釜垣内遺跡（第２・４・５次）発掘調査報告

― 鈴鹿市小岐須町 ―

２０１８（平成30）年10月

三重県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（西から）

ＳＫ210埋設土器出土状況（西から）

土壙墓群完掘写真（南から）

ＳＸ76出土遺物集合写真

序

三重県埋蔵文化財センターでは、平成20年度から、新名神高速道路の四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ間の路線内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。対象となる埋蔵文化財は22遺跡、発掘調査対象面積は34万㎡と広大です。

当センターとしては、供用開始予定に間に合わせるべく、発掘調査を終了させるため、担当職員を増員するなどの対応策も行ってきました。

調査成果である報告書作成より、現地調査を最優先に取り組むことを主眼に、年間５万㎡を超える面積の発掘調査を行ったこともありました。

ようやく発掘調査も終了して、本格的に報告書作成に取り組みはじめ、ここに鈴鹿市小岐須町に所在する釜垣内遺跡の調査成果を、とりまとめることが出来ました。縄文時代の埋設土器をはじめ、古代から中世にかけての集落の一端を垣間見ることが出来ました。特に、鎌倉時代の集落は溝で囲まれており、土壙墓からは網代双鳥鏡と呼ばれる和鏡も見つかるなど、地域の歴史に新たな１ページが加わりました。

最後になりますが、現地調査に限らず、その成果をまとめて終了するという事にもご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所をはじめとする各関係機関の方々、地元小岐須町自治会をはじめ発掘調査区近隣に居住の方々に心からのお礼を申し上げます。

平成30年10月

三重県埋蔵文化財センター
所長　野原宏司

例　　言

1　本書は、三重県鈴鹿市小岐須町に所在する釜垣内遺跡（第２・４・５次）の発掘調査報告書である。

2　本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う緊急発掘調査である。

3　発掘調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

4　発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ～Ⅳ・Ⅵ』の４冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。

5　調査は下記の体制で実施した。

委託者　　中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
受託者　　三重県教育委員会
調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

なお、詳細については『Ⅰ前言』に記載したとおりである。

6　本書の執筆は三重県埋蔵文化財センター職員が行い、文責については目次及び文末に記載した。遺物の写真撮影は中村法道・萩原義彦が行い、編集は萩原義彦・服部芳人・村上央が行なった。

7　本書で示す方位は、世界測地系第Ⅵ系による座標北である。

8　本書で表記する土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖（30版）』（日本色研事業株式会社1967初版）に拠った。

9　発掘調査に際しては、地元の方をはじめ、鈴鹿市、鈴鹿市考古博物館、小岐須町自治会、三重県企業庁、愛知学院大学藤澤良祐氏からのご教示やご協力をいただいた（順不同、敬称略）。

10　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

11　本書で使用した地図は、国土地理院発行の１：25,000の地形図「御在所山」「伊船」、三重県共有デジタル地図Ⅷ（平成19年測図）を用いた。三重県共有デジタル地図は三重県市町総合組合の承認を得て使用した。（承認番号：平成29年４月12日付　三総合地第１号）

12　本書で用いた遺構表示略記号は、以下のとおりである。

ＳＡ：柵列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　ＳＸ：墓　ＮＲ：自然流路

目　　次

Ⅰ　前言 ……（服部芳人）……1
1　調査に至る経緯 ……1
2　調査の経過 ……1

Ⅱ　位置と環境 ……（萩原義彦）……5
1　地理的環境 ……5
2　歴史的環境 ……5

Ⅲ　層序 ……（服部芳人）……11

Ⅳ　遺構 ……（浅野隆司・大川 操・小原雄也・服部芳人）……11
1　縄文時代 ……11
2　奈良・平安時代 ……15
3　鎌倉時代以降 ……15

Ⅴ　遺物 ……（大川 操・中村法道・萩原義彦）……42

Ⅵ　自然科学分析 ……（株式会社パレオ・ラボ）……66
1　放射性炭素年代測定 ……66
2　土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析 ……69
3　土器内土壌のリン・カルシウム分析 ……72
4　炭化物の樹種同定 ……75
5　焼土の材質分析 ……78
6　炭化種実 ……87

Ⅶ　まとめ ……（萩原義彦・服部芳人）……89
1　ＳＸ76出土の和鏡について ……（萩原義彦）……89
2　ＳＸ76の被葬者像について ……（萩原義彦）……89
3　時代別の概観について ……（服部芳人）……91

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図……7
第２図　遺跡地形図……8
第３図　調査区位置図……9
第４図　調査区全体平面図……10
第５図　調査区西壁断面図①……12
第６図　調査区西壁断面図②……13
第７図　ＳＫ50・ＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ24・
ＳＫ38・ＳＫ210実測図……14
第８図　ＳＤ116・ＳＫ123・ＳＫ196・
ＳＫ202・ＳＫ206実測図……16
第９図　ＳＫ197・ＳＫ200実測図……17
第10図　ＳＫ205実測図……18
第11図　ＳＢ63・ＳＫ52・ＳＫ55・ＳＫ56実測図…19
第12図　ＳＢ64・ＳＢ65実測図……21
第13図　ＳＢ81実測図……22
第14図　ＳＢ106・ＳＢ107・ＳＡ108・ＳＢ119
実測図……23
第15図　ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況図……24
第16図　ＳＢ128・ＳＫ127実測図……25
第17図　ＳＢ129・ＳＫ126・ＳＢ130実測図 ……26
第18図　ＳＢ131・ＳＫ122実測図……27
第19図　ＳＸ60実測図……29
第20図　ＳＸ76実測図……30
第21図　和鏡など出土状況図……30
第22図　ＳＫ77・ＳＸ78実測図……31
第23図　ＳＸ79・ＳＸ80実測図……32
第24図　ＳＸ110実測図……33
第25図　ＳＫ161・ＳＫ163・ＳＫ164・ＳＫ193・
ＳＫ194・ＳＫ211実測図……34
第26図　ＳＤ１・ＳＤ20・ＳＤ21・ＳＤ28・ＳＤ29・
ＳＸ80土層断面図・Ｉ-Ｌ20Ｐｉｔ１
実測図……35
第27図　第５次調査Ｆ地区南壁土層断面図……36
第28図　ＳＫ50・ＳＫ158・ＳＫ167・ＳＫ210・
包含層・Ｎ-Ｂ10Ｐｉｔ３出土遺物
実測図……43
第29図　ＳＤ116・ＳＫ123・ＳＫ200・ＳＫ205・
ＳＢ63・ＳＢ106・ＳＢ128・ＳＢ130・
ＳＢ131・ＳＫ55・ＳＫ122・ＳＫ126・
ＳＫ127出土遺物実測図……44
第30図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）……46
第31図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）……47
第32図　ＳＤ21・ＳＤ28・ＳＤ29・ＳＤ154・
ＳＤ155・ＳＤ209出土遺物実測図……48
第33図　ＳＸ60・ＳＸ76出土遺物実測図……49
第34図　ＳＸ78・ＳＸ79・ＳＸ80・ＳＸ110・
ＳＫ５・ＳＫ６・ＳＫ10・ＳＫ25・
ＳＫ30・ＳＫ34・ＳＫ36・ＳＫ42・
ＳＫ57出土遺物実測図……50
第35図　ＳＫ69・ＳＫ74・ＳＫ83・ＳＫ111・
ＳＫ112・ＳＫ124・ＳＫ151・ＳＫ161・
ＳＫ163・ＳＫ174・ＳＫ175・ＮＲ152
出土遺物実測図……52
第36図　Ｐｉｔ出土遺物実測図……53
第37図　包含層・表土出土遺物実測図……55
第38図　暦年較正結果……68
第39図　炭素・窒素安定同位体比……70
第40図　炭素安定同位体比とＣ／Ｎ比の関係……70
第41図　土器付着炭化物……71
第42図　ＳＫ210土器内土壌試料採取位置……72
第43図　出土状況、土器内土壌試料採取位置と
プレス試料およびリンとカルシウムの
元素マッピング図……74
第44図　釜垣内遺跡（５次）出土炭化材の
走査型電子顕微鏡写真……77
第45図　分析試料と断面写真……83
第46図　胎土の偏光顕微鏡写真……84
第47図　受熱の痕跡を示す粒子の顕微鏡写真……85
第48図　焼土のＸ線回折スペクトル図……86
第49図　釜垣内遺跡（５次）ＳＫ200から
出土した炭化種実……88
第50図　出土鏡分布略図……90
第51図　近似鏡拓影及び写真……92
第52図　遺構全体図および時代別変遷図……95

第53図　遺物出土分布図……96
第54図　区画割図Ａ案……97
第55図　区画割図Ｂ案……98
附図　遺構平面図

写真図版目次

巻頭図版１　遺跡遠景（西から）
ＳＫ210埋設土器出土状況（西から）
巻頭図版２　土壙墓群完掘写真（南から）
ＳＸ76出土遺物集合写真
写真図版扉　米軍空中写真
写真図版１　第２次調査Ａ・Ｂ区調査前風景（東から）…100
第２次調査Ⅰ・Ｊ・Ｋ区調査前風景（東から）…100
写真図版２　第２次調査Ⅰ区調査前風景（東から）101
第２次調査Ｊ区調査前風景（南から）101
写真図版３　第４次調査Ｈ区調査前風景（東から）102
第２次調査Ｂ・Ｃ区遺構検出状況（北から）…102
写真図版４　第４次調査Ｅ区調査前風景（東から）103
第２次調査Ｊ区完掘状況（北東から）103
写真図版５　第４次調査Ｈ区完掘状況（南から）…104
第４次調査Ｉ区完掘状況（北東から）104
写真図版６　第５次調査Ｇ区完掘状況（北から）…105
第５次調査Ｇ区東南部完掘状況（西から）…105
写真図版７　ＳＫ50土層断面（東から）……106
ＳＫ210遺物出土状況（南から）……106
写真図版８　ＳＫ12完掘状況（北から）……107
ＳＫ38完掘状況（北から）……107
写真図版９　ＳＫ196焼土検出状況（東から）……108
ＳＫ197焼土検出状況（北東から）……108
写真図版10　ＳＫ200完掘状況（南から）……109
ＳＫ202完掘状況（北から）……109
写真図版11　ＳＫ205焼土検出状況（北西から）……110
ＳＢ65完掘状況（西から）……110
写真図版12　ＳＢ81完掘状況（西から）……111
ＳＢ106完掘状況（東から）……111
写真図版13　ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況①（北から）…112
ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況②（北から）…112
写真図版14　ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況③（北から）…113
ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況④（北から）…113
写真図版15　ＳＫ55・56完掘状況（東から）……114
ＳＫ126完掘状況（北東から）……114
写真図版16　ＳＸ60遺物出土状況（北から）……115
ＳＸ76・78・79遺物出土状況（南から）…115
写真図版17　ＳＸ76遺物出土状況①（西から）……116
ＳＸ76遺物出土状況②（西から）……116
写真図版18　ＳＸ78遺物出土状況①（西から）……117
ＳＸ78遺物出土状況②（西から）……117
写真図版19　ＳＸ79遺物出土状況①（西から）……118
ＳＸ79遺物出土状況②（西から）……118
写真図版20　ＳＫ161完掘状況（南から）……119
ＳＫ163・164完掘状況（東から）……119
写真図版21　ＳＫ193完掘状況（東から）……120
ＳＫ194完掘状況（東から）……120
写真図版22　ＳＤ28（Ｊ－Ｂ８～Ｊ－Ｃ８）土層断面（東から）……121
第５次調査Ｆ区ＮＲ152完掘状況（北から）…121
写真図版23　出土遺物①……122
写真図版24　出土遺物②……123
写真図版25　出土遺物③……124
写真図版26　出土遺物④……125
写真図版27　出土遺物⑤……126
写真図版28　出土遺物⑥……127
写真図版29　出土遺物⑦……128
写真図版30　出土遺物⑧……129
写真図版31　出土遺物⑨……130
写真図版32　出土遺物⑩……131
写真図版33　出土遺物⑪……132

写　真　目　次

写真１　武備塚３・４号墳……5
写真２　椿ケ岳・椿大神社……6
写真３　山本城跡……6

表　目　次

第１表　周辺主要遺跡一覧……7
第２表　掘立柱建物・柵一覧表……37
第３表　溝一覧表……38
第４表　土壙墓一覧表……38
第５表　土坑一覧表①……39
第６表　土坑一覧表②……40
第７表　土坑一覧表③……41
第８表　自然流路一覧表……41
第９表　遺物観察表①……56
第10表　遺物観察表②……57
第11表　遺物観察表③……58
第12表　遺物観察表④……59
第13表　遺物観察表⑤……60
第14表　遺物観察表⑥……61
第15表　遺物観察表⑦……62
第16表　遺物観察表⑧……63
第17表　遺物観察表⑨……64
第18表　遺物観察表⑩……65
第19表　遺物観察表（鉄製品）……65
第20表　測定試料および処理……67
第21表　放射性炭素年代測定および
　暦年較正の結果……68
第22表　測定結果……70
第23表　分析対象一覧……72
第24表　半定量分析結果……73
第25表　出土炭化材の樹種同定結果一覧……75
第26表　釜垣内遺跡（第５次）
　出土炭化材の樹種同定結果一覧……76
第27表　試料とその詳細……82
第28表　焼土中の微化石類と砂粒物の特徴……82
第29表　焼土中の粘土および砂粒組成の特徴……82
第30表　岩石片の起源と組み合わせ……82
第31表　X線回析分析による検出鉱物……82
第32表　釜垣内遺跡（第５次）から
　出土した炭化種実……87
第33表　銅代双鳥鏡出土一覧表……91

Ⅰ 前 言

1 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21年（2009）年2月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書[註]には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

【註】

①三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』(2011年)

2 調査の経過

（1）調査経過の概要

釜垣内遺跡は、鈴鹿・亀山工事区管内の遺跡であるため、四日市工事区管内の遺跡の発掘調査よりは、供用開始計画予定からも優先度は若干低かった。しかしながら、四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ全体の進捗との調整で、用地買収や伐採などの調査の条件が整った遺跡から発掘調査を実施してきた。

今回、平成22年度から平成28年度にかけて行われた発掘調査の年度ごとの概要を、以下に記述する。

平成22年度

釜垣内遺跡の発掘調査に関わる初めての協議は、平成22年８月27日ネクスコとの定例会にて行われた。その結果、当時の遺跡内の用地買収の状況から、平成23年度の秋から冬頃にかけて、合計2,640㎡の一次調査を行う計画がなされた。

平成23年度

年度が替わり、数回協議を重ねたが、８月31日の段階で、用地取得が概ね半分程度であった。しかし、９月末で契約場所も増えるということで、これまでの計画していた2,640㎡は無理だが、10月以降に2,300㎡の一次調査を実施することとなった。

また、一次調査の結果次第であるが、仮に路線内の半分二次調査が必要となったと仮定した場合は、平成24年度と平成25年度の２か年に、それぞれ7,500㎡ずつの分割調査となることが決まった。

10月28日～12月27日にかけて、未買収地以外に、トレンチを41か所設定して一次調査を実施した結果、15か所のトレンチで13世紀を中心とする溝や土坑などの遺構が確認され、土師器、陶器類が出土した。そのため、概ね路線内の西側半分について、二次調査が必要と判断された。

年度末には、次年度に7,500㎡の二次調査と、買収地に200㎡の一次調査が計画された。

平成24年度

５月24日～６月15日にかけて、７か所のトレンチを設定して、一次調査を実施した。その結果、概ね中世の遺構、遺物が確認されたため、二次調査の対象とした。また、当年度に計画されていた二次調査の7,500㎡に、今回の二次調査面積を加えることとなり、合計8,500㎡を11月26日まで第２次調査として発掘調査を行った。

調査区は東区と西区に２分され、東区では、鎌倉時代の掘立柱建物群や、それらを区画する溝の他、墓などが確認された。また、山茶椀や小皿の他、墓への副葬品として青銅製の和鏡などが出土した。

なお、第２次調査の東区の東北部分が、新名神高速道路の建設に伴う仮設道路に計画されたため、鈴鹿市教育委員会によって、９月12日～10月５日に306㎡が第３次調査として発掘調査が行われた。

年度末には、次年度の二次調査の計画が協議されて、3,900㎡の調査が、平成25年度に予定された。

平成25年度

計画された二次調査は、５月27日～９月13日まで、第４次調査として実施された。調査区は、東区と西区に２分され、東区では中世～近世の水路の跡と、平安～鎌倉時代の自然流路を確認した。西区では、多くの石を詰め込んだ土坑などを確認した。出土遺物には、縄文土器の他、平安時代の黒色土器や鎌倉時代の山茶椀などがある。調査面積は、3,200㎡である。

平成26年度

二次調査必要範囲に宅地が２軒あり、その契約や引渡し時期とともに、橋脚や工事用道路場所の計画による２か年度分割案などで、再三、調整協議を重ねた。しかし結果的には、宅地の引渡しが当年度末となるため、最終的には平成26年度は発掘調査を実施することが出来なかった。

年度末の協議では、未調査二次調査の3,600㎡をすべて次年度内に実施することが計画された。

平成27年度

５月27日～12月18日にかけて、第５次調査が行われた。調査個所は、第２次調査と第４次調査の間に当たる。調査の結果、自然流路の他、柱穴や土坑や、縄文時代の土器棺墓と思われる土坑も検出した。遺物には、製塩土器や土師器、灰釉陶器、黒色土器などがあり、確実な遺構は不明であるが、古代の集落の存在も想定された。

平成28年度

昨年度の第５次調査で、二次調査はすべて終了したが、第２次調査の東区で確認された中世の掘立柱建物群を囲む区画溝（ＳＤ１）の西側部分を南北に走る市道のアスファルト舗装の除去に伴って工事立会い調査を実施した。区画溝の続きの存在が想定されたが、現代の水道管などによって撹乱されており、遺構は確認出来なかった。

＜調査日誌（抄）＞

平成23年度

11月14日
～16日　トレンチ29・30・34掘削
12月１日　トレンチ15・16・28掘削
12月９日
～12日　トレンチ９・10・11掘削
12月13日　トレンチ37・７・４・38・39・25掘削
12月15日
～16日　トレンチ32・33・６・８・31掘削
12月19日　トレンチ２・42・３・40・５掘削
12月20日　トレンチ１・41掘削

平成24年度

６月12日　トレンチ７掘削
６月14日　トレンチ４掘削
６月20日　西区表土掘削
６月25日　西区包含層掘削・遺構検出
７月５日　東区表土掘削
７月11日　東区大型土坑数基検出・掘削
７月13日　西区２間×３間掘立柱建物検出
７月24日　西区ＳＢ106柱穴掘削・北東隅柱穴から山茶椀出土
７月25日　ＳＢ106柱穴山茶椀の下から大礫出土
７月26日　ＳＢ106柱穴大礫の下から山茶椀出土
７月27日　ＳＸ110掘削・完形山茶椀出土
８月１日　東区ＳＸ50掘削縄文土器出土
８月７日　東区ＳＤ１掘削山茶椀多数出土
８月21日　東区ＳＢ55・ＳＢ56掘削山茶椀出土
８月27日　発掘調査現場公開１日目15名参加
８月28日　雨のため作業中止・発掘調査現場公開２日目16名参加
８月29日　発掘調査現場公開３日目41名参加
９月３日　ＳＫ55はＳＢ63の南東隅土坑と判明
９月６日　東区空中写真撮影
９月12日　鈴鹿市教育委員会第３次調査開始
９月24日　西区掘削終了
９月26日　西区1/20平面図作成
９月28日　台風対策現場の養生
10月２日　ＳＢ128・ＳＢ129掘立柱建物検討
10月３日　ＳＸ76・ＳＸ78・ＳＸ79掘削・山茶椀・小皿など出土・出土状況図作業
10月５日　ＳＸ76から鉄製品出土
10月９日　東区1/20平面図作成
10月11日　鈴鹿市立椿小学校発掘体験
10月15日　東区ＳＤ１・ＳＸ80掘削終了
10月16日　空中写真撮のための清掃開始
10月19日　空中写真撮影強風のため中止

10月20日　空中写真撮影
10月24日　個別遺構写真撮影
10月29日　調査区埋戻し終了

平成25年度

5月28日　業者と現地確認
6月11日　東区表土掘削開始
6月14日　東区旧河道（ＮＲ152）確認
6月18日　西区表土掘削開始・東区包含層掘削開始
6月24日　東区遺構掘削
7月１日　東区ＳＺ151掘削
7月３日　西区で縄文土器出土
7月４日　東区空中写真撮影
7月９日　西区包含層掘削
7月16日　東区埋戻し開始
7月22日　西区縄文土器数点出土
7月23日　東区埋戻し終了
7月24日　西区柱穴多数検出
8月１日　ＳＫ163・ＳＫ164半裁・土層写真
8月６日　西区空中写真撮影のための清掃
8月８日　西区空中写真撮影・個別遺構写真撮影
8月12日　午後地元説明会開催29名来場
8月15日　現場作業終了
8月26日　埋戻し終了

平成27年度

6月15日　表土掘削開始
6月19日　ＮＲ152の幅検討
6月29日　Ｆ区半分以上表土掘削終了
6月30日　ＮＲ152以外の流路確認
7月10日　Ｆ区東側土層断面写真・土層図作成
7月14日　Ｆ区表土掘削ほぼ終了
7月15日　Ｇ区表土掘削開始
7月21日　職場巡視
7月24日　Ｆ区包含層掘削・遺構検出開始
7月31日　Ｇ区で、奈良時代の土師器や山茶椀出土
8月11日　Ｆ区Ｐｉｔ掘削
8月12日　Ｆ区調査区南・西壁土層断面写真
8月19日　ＮＲ152掘削山茶椀出土
8月27日　ＳＫ194検出・写真撮影
9月７日　Ｇ区包含層掘削・遺構検出
9月11日　Ｇ区灰釉浄瓶出土
9月14日　Ｆ区写真撮影準備清掃
10月２日　縄文土器片出土
10月５日　石鏃出土
10月８日　製塩土器出土
10月13日　ＳＫ205から果実の種・炭化物出土
10月16日　ＳＫ205完掘・出土状況図作成
10月21日　縄文時代晩期の突帯文土器出土
10月28日　空中写真撮影のための清掃
10月30日　空中写真撮影
11月１日　現地説明会119名参加
11月２日　ＳＫ210縄文土器取上げ
11月５日　ＳＢ写真撮影
11月10日　資材類片付け・道具類搬出

平成28年度

4月18日　２次調査区確認のＳＤ１の続き確認のための工事立会

（２）調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成23年度

・一次調査

担当：鈴木規之・櫻井拓馬（調査研究Ⅱ課）
業者：株式会社島田組（土工委託）
期間：平成23年10月24日～平成24年２月17日
面積：2,300㎡

平成24年度

・工事立会調査

担当：鈴木規之（調査研究Ⅲ課）
業者：ネクスコ中日本（労務提供）
期間：平成24年４月10日
面積：7.4㎡

・一次調査

担当：鈴木規之・小原雄也（調査研究Ⅲ課）
業者：株式会社四門（調査補助委託）
期間：平成24年５月24日～平成24年11月26日
面積：200㎡

・第２次調査

担当：鈴木規之・小原雄也（調査研究Ⅲ課）
業者：株式会社四門（調査補助委託）
期間：平成24年５月24日～平成24年11月26日
面積：8,500㎡

・**第３次調査**

担当：吉田真由美（鈴鹿市考古博物館）

主体：鈴鹿市

期間：平成24年９月12日～平成24年10月５日

面積：306㎡

平成25年度

・**第４次調査**

担当：高松雅文・浅野隆司（調査研究３課）

業者：株式会社イビソク（調査補助委託）

期間：平成25年５月27日～平成25年９月13日

面積：3,200㎡

平成27年度

・**第５次調査**

担当：浅野隆司・谷口隆亮・大川　操

（調査研究３課）

業者：株式会社アート（調査補助委託）

期間：平成27年５月27日～平成27年12月18日

面積：3,644㎡

平成28年度

・**工事立会調査**

担当：西脇智広・村上　央（調査研究３課）

業者：ネクスコ中日本（労務提供）

期間：平成28年４月18日

面積：115㎡

（３）文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等の発掘に関する通知）

・平成22年８月６日付け、中高名支四工第760号
（中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて）

◎文化財保護法第99条第１項（発掘調査の着手報告）

・平成24年６月１日付け、教埋第75号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成24年度・第２次】

・平成25年６月４日付け、教埋第115号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成25年度・第４次】

・平成27年６月５日付け、教埋第80号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）　【平成27年度・第５次】

◎文化財保護法第100条第２項
（文化財の発見・認定通知）

・平成25年１月９日付け、教委第12-4421号
（三重県教育委員会教育長から鈴鹿警察署長あて）
【平成24年度・第２次】

・平成25年９月11日付け、教委第12-4407号
（三重県教育委員会教育長から鈴鹿警察署長あて）
【平成25年度・第４次】

・平成28年１月13日付け、教委第12-4419号
（三重県教育委員会教育長から鈴鹿警察署長あて）
【平成27年度・第５次】
（服部）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

釜垣内遺跡（1）は、三重県鈴鹿市小岐須町に所在する。鈴鹿市は、北を四日市市、東を伊勢湾、西を滋賀県・亀山市、南を津市に接した市であり、県内においては、北勢地域と呼ばれる一角を占めている。市域の中でも小岐須町は、東側を小社町、北側を山本町、南・西側を西庄内町・伊船町によって囲まれた町である。

小岐須町の地勢は、西側の鈴鹿山脈を水源とする鈴鹿川・安楽川の支流である御幣川・内部川・鍋川が東南方向に流れて、それらによって形成された内部川開析複合扇状台地上に位置している。なお、当遺跡の南を流れる御幣川は、鈴鹿山脈内の仙ヶ岳・入道ヶ岳の間を水源とし、小岐須渓谷を形成しており、渓谷には「屏風岩」と呼ばれる巨岩をみることができる。また、他の河川では、椿渓谷・宮妻峡といった渓谷も形成されている。

この地域は、開析扇状台地のため、水不足に備えて「大池」「三池」と呼ばれるため池が多く造られている。遺跡周辺の標高は、153.3～155.9m前後である。

2　歴史的環境

今回、発掘調査した釜垣内遺跡は、主に鎌倉時代の遺跡であるが鈴鹿市域を中心として、原始から近世に至る各時代を概観する。

【旧石器時代】鈴鹿川下流域北岸の台地上から旧石器時代のナイフ形石器が確認されており、この時期から人々が住み始めていたことが窺える。

【縄文時代】草創期の有茎尖頭器が鈴鹿山脈の麓一帯から採集されている。釜垣内遺跡から東方向約4kmの内部川右岸の椿一宮遺跡[1]（2）では、発掘調査で有茎尖頭器が出土している。

また、東南方向約5.4kmの御幣川右岸に位置する東庄内町の東庄内Ａ遺跡[2]では、早期から後期にかけて多くの土器が発掘調査で出土し、同方向約4.7kmの東庄内Ｂ遺跡[3]（3）では、前期及び中期末の竪穴住居跡・土坑が確認されている。

このように縄文時代においては、早い時期から集落の形成が始まっていたことが推測される。

【弥生時代】前述した東庄内Ａ遺跡で弥生時代中期の円形竪穴住居が確認されており、東庄内Ｂ遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓５基をはじめ土坑が確認されている。また、東南方向約1.8kmの双児塚遺跡（4）においても中期の方形周溝墓７基が確認されている。

【古墳時代】周辺に目立った古墳は、少ない。当遺跡から東南方向の御幣川沿いに約1.9km下った北岸の長沢町に３基の円墳からなる双児塚古墳群（5）、東南方向５kmの同町に４基の円墳からなる武備塚古墳群（6）が存在する。かつて、これらは、「ヤマトタケル」の伝承に基づき陵墓として考えられた。この伝承が存在すること自体、伊勢平野の中で鈴鹿地域が大和の王権の東国との関わりに重要な役割を果たしていたと言えよう。

写真１　武備塚３・４号墳

また、ほぼ北方向約1.7kmの山本町にある椿大神社境内に全長約32mの前方後円墳と想定される椿大神社古墳（7）が存在している。この地域の古墳の数は、鈴鹿川中・下流域と比較して非常に少なく、古墳時代において当地域は、生産性や人口にかなりの差異があったと想定できる。なお、集落遺跡としては、東方向約2.7kmの武備野遺跡（8）がみられる程度である。

また、椿大神社及び入道ヶ岳から見える眺望は、北勢地域を一望できることを指摘しておきたい。

写真２　椿ヶ岳・椿大神社（左奥側の小山）

【奈良・平安時代】北東方向1.6kmの山本町に所在する高ノ瀬遺跡※（９）において灰釉陶器が採集されている程度であり、前時代である古墳時代の差異の影響を引き続いて受けていたと想定される。

平安時代の文献である『倭名類聚抄』※にある「長世郷」や、『神鳳鈔』※に記載される伊勢神宮領の「椿御薗」は、周辺地域に所在したとみられる。

【鎌倉時代】周辺各所に遺跡が認められるようになる。中戸遺跡（10）、本郷垣内遺跡（11）、東荒野遺跡（12）、高ノ瀬遺跡（９）、大松遺跡（13）、神戸遺跡（14）、井領田遺跡（15）、牧ヶ久保遺跡（16）、東海戸遺跡（17）、青木Ａ遺跡（18）、上分田遺跡（19）、小岐須寺垣内遺跡（20）、寺垣内西遺跡（21）、北条遺跡（22）、北条南遺跡（23）である。どの遺跡も遺物が表面採集されている。ほとんどが、鎌倉時代以降に一斉に拓けている。推測の城ではあるが、源平の争乱に伴って関東地方の武士がこの鈴鹿地域に入ってきたことを示しているのかもしれない。

【室町時代】集落や城館が各所で築かれるようになる。集落は、鍋川対岸に小社遺跡（24）が形成される。城館は、北方向約2.4kmの大久保町の大久保城跡（25）、北方向約1.7kmの山本町の山本城跡（26）、西方向約0.5kmの小岐須町の小岐須城跡（27）、南方向約１kmの御幣川沿いに牧ヶ久保城跡（28）が所在する。

写真３　山本城跡

室町時代の終わり頃から、織田信長の伊勢への侵入が始まる。東海地域から天下統一という日本全体の動きの中で北勢地域は、数々の争乱に巻き込まれていった。主なものとして徳川家康の伊賀越えをはじめ、豊臣秀吉の伊勢侵攻から関ケ原の合戦に伴う東西に分かれての戦いなどである。

【江戸時代】この地域には、南北方向に巡見街道※が走る。各村落は、あちらこちらに分割して領地化されており、亀山領をはじめとして津領や神戸領あるいは天領といった複雑なモザイク状をしている。

（萩原）

【註】

①三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（1970年）

②三重県埋蔵文化財センター『東庄内Ａ遺跡（第２次）発掘調査報告』（2009年）

③三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ～Ⅵ』（2012～2016年）

④中田祝夫編『倭名類聚抄』（勉誠社文庫　1978年）

⑤続群書類従完成会『群書類従　第１輯』（1932年）

⑥三重県教育委員会編『美濃街道・濃州道・八風道・菰野道・巡見道・巡礼道・鈴鹿の峠道』「歴史の道調査報告書」（1985年）

【参考文献】

・『三重県の地名』（平凡社　1983年）

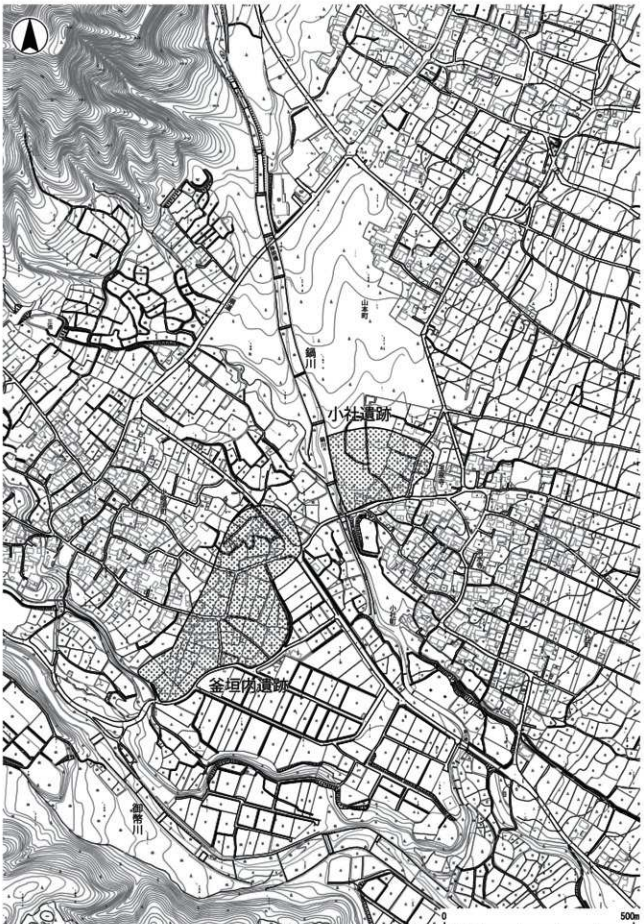
・『鈴鹿市史』（鈴鹿市　1980年）

・鈴峰の郷土誌編纂委員会『鈴峰の郷土史』（1993年）

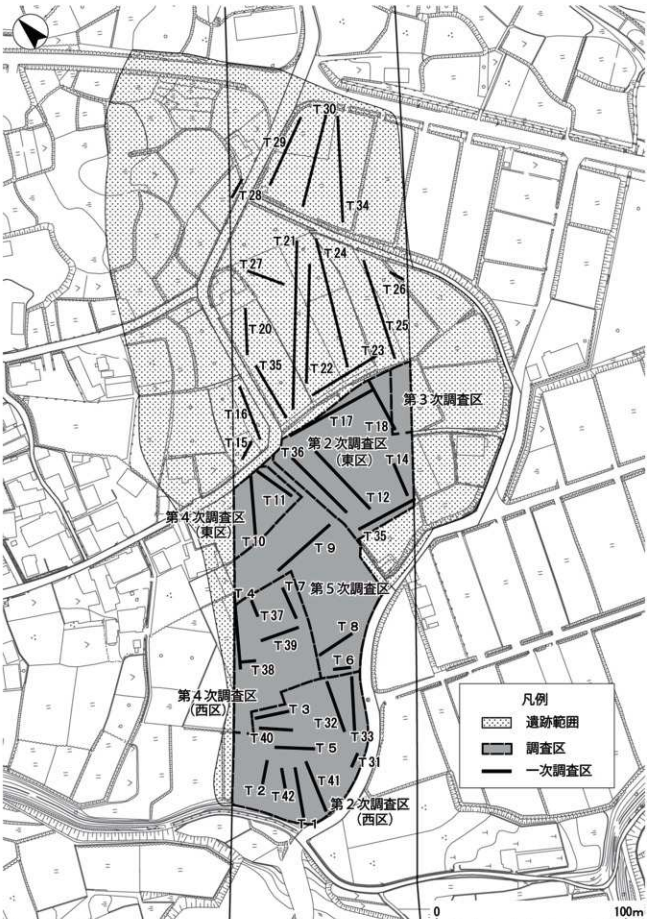
第１図　遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院発行「御在所山」「伊船」（１：25,000）〕

1	釜垣内遺跡	2	椿一宮遺跡	3	東庄内Ｂ遺跡	4	双児塚遺跡	5	双児塚古墳群
6	武備塚古墳群	7	椿大神社古墳	8	武備野遺跡	9	高ノ瀬遺跡	10	中戸遺跡
11	本郷垣内遺跡	12	東荒野遺跡	13	大松遺跡	14	神戸遺跡	15	井領田遺跡
16	牧ヶ久保遺跡	17	東海戸遺跡	18	青木Ａ遺跡	19	上分田遺跡	20	小岐須寺垣内遺跡
21	寺垣内西遺跡	22	北条遺跡	23	北条南遺跡	24	小杜遺跡	25	大久保城跡
26	山本城跡	27	小岐須城跡	28	牧ヶ久保城跡				

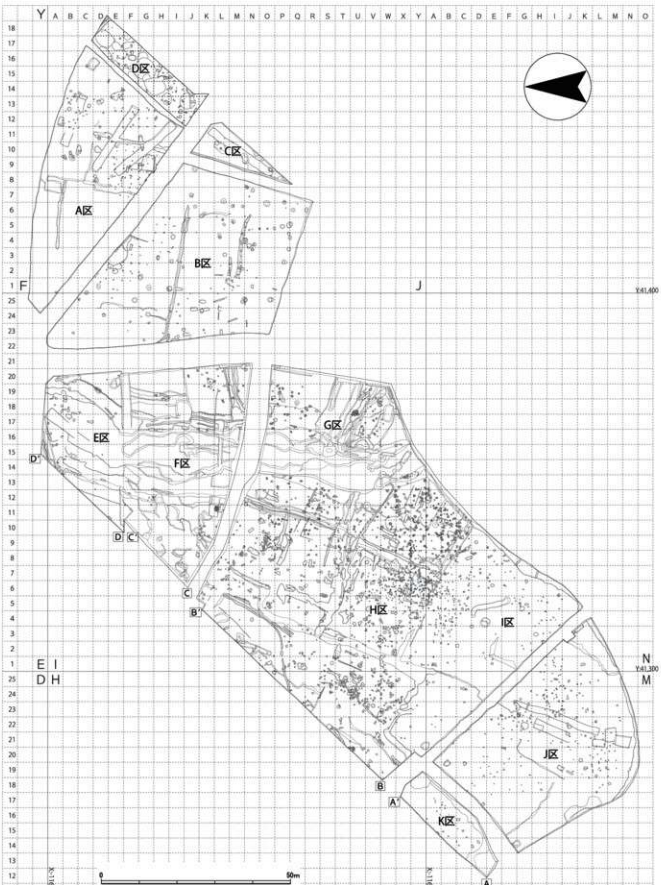
第１表　周辺主要遺跡一覧



第２図　遺跡地形図（１：10,000）



第３図　調査区位置図（１：2,000）



第４図　調査区全体平面図（１：1,000）

Ⅲ　層序

釜垣内遺跡は、御幣川と鍋川に挟まれた、標高約155mの扇状地上に立地する（第２図）。

今回の調査区は、緩やかに北西から南東方向にかけて傾斜する地形の先端近くに設定された。南北方向（路線延長方向）に約250m、東西方向（路線幅）に約70mの調査範囲を、第２次から第５次（３次は、鈴鹿市教育委員会担当）の複数年次に分けて調査を行った（第３図）。

なお、調査区内には用排水路や市道などが走るため、調査区がＡ区からＫ区に分断された（第４図）。

調査前の状況は、茶畑や水田、家屋などである。なお、場所によっては、区画ごとに石垣を設けて、段差が生じている所もあったが、全体的には、調査区内は平坦であった。基本的な層序は、表土・耕作土の下に、黄褐色や灰色を呈した砂礫層（土石流などによる堆積）や粘質土などが堆積している。概ね、褐色を呈した砂質土を地山として、その上面で遺構検出を行った（第５・６図）。　　（服部）

Ⅳ　遺構

１　縄文時代

この時代の遺構には、土器埋設土坑と、陥し穴がある。他の遺構は確認していないが、包含層などから、晩期の土器片などが20数点出土している。

（１）土器埋設土坑

ＳＫ50（第７図）　第２次調査Ａ区の中央で検出した土坑である。楕円形の形状で、規模は0.８m×0.５m、深さ0.３mである。検出段階では、0.６m×0.４mのＳＫ22と、0.５m×0.35mのＳＫ35の別遺構と判断していたが、同一個体である縄文晩期の深鉢（１）が含まれることから、２つの土坑を包括する１つの土坑であると判断した。

なお、この深鉢は体部片が逆位にある底部片の上に、折り重なったような状況で出土した。こうした状況からこの深鉢は、倒立状態で埋納された後に、土圧により底部が土器内部に落ち込み、その後に体部が内側へ崩壊したものと考えられる。

（小原・服部）

ＳＫ210（第７図）　第５次調査Ｇ区の北西部分、第４次調査Ｈ区の北東隅で検出した土坑である。方形の形状で、1.35m×1.05m、深さ0.５mである。埋土は、検出面の黄灰シルトと非常に区別しにくく、黄灰シルトにやや灰褐色シルトの大まかなブロックが少量混じっていた。

土器は、口縁部を北方向に横倒しとなって出土し、口縁部を覆う器物の遺存はなかったが、土器棺の可能性が考えられる。器種は広口壺（２）で、突帯文系の土器である。時期は、弥生時代前期に属する。

（大川・服部）

（２）陥し穴

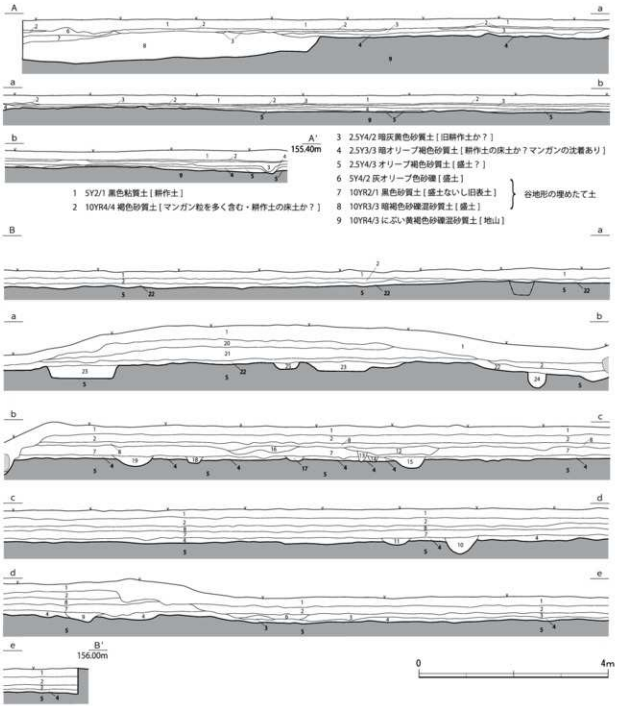
第２次調査Ｂ区では、円形や楕円形を呈するやや大型の土坑を数多く検出した。この内、ＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ24・ＳＫ38は、土坑の底部に円形の小穴がみられる。小穴は底部中央に１箇所のみ施され、径約0.２m、深さ約0.25～0.３mである。いずれも小穴から杭状の痕跡を確認することはできなかったが、陥し穴の可能性がある。

また、他の土坑については、小穴の確認が出来ず、出土遺物もないため断定はできないが、同じ様な形状や深さである事から陥し穴と考えておきたい。

ＳＫ12（第７図）　直径0.９mの円形で、深さは0.54m～0.58mである。底部の中央南に直径0.３～0.４mの小穴が0.22m掘られる。出土遺物はない。

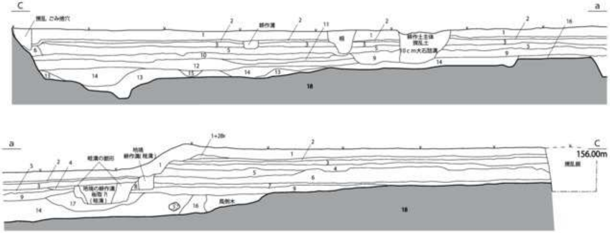
ＳＫ13（第７図）　概ね円形で、規模は1.２m×１m、深さは0.64m～0.69mである。底部の中央西に直径0.３mの小穴が0.23m掘られる。出土遺物はない。

ＳＫ24（第７図）　楕円形で、規模は1.２m×0.８m、深さは0.93～0.95mである。底部の中央南

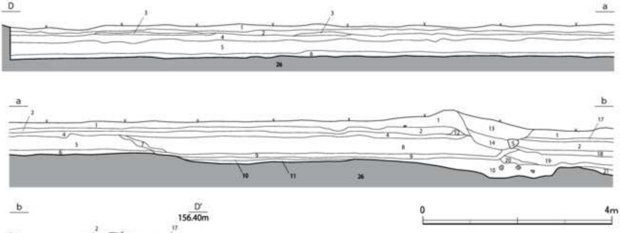


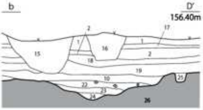
1 2.5Y3/1 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [耕作土]
2 10YR2/2 シルト～極細粒砂 しまりあり [床土]
3 10YR4/2 極細粒砂～細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし [灰色砂層]
4 7.5YR3/4 極細粒砂～細粒砂 しまりやや有り [マンガン層]
5 10YR4/6 極細粒砂 しまりやや有り [地山]
6 2.5Y4/2 極細粒砂～細粒砂 しまりなし [灰色砂層]
7 2.5Y4/2 極細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし [灰色砂層]
8 7.5YR3/3 極細粒砂～細粒砂 しまりやや有り [マンガン層]
9 10YR3/4 極細粒砂～細粒砂 しまりなし [旧畑の畦に伴う溝]
10 10YR4/3 極細粒砂 しまりなし
11 10YR4/2 シルト～極細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし
12 10YR3/3 極細粒砂～細粒砂 しまりなし [灰色砂層]
13 10YR4/3 極細粒砂 しまりなし
14 10YR4/2 極細粒砂 しまりなし
15 10YR4/3 極細粒砂 しまりなし [SD154埋土]
16 10YR4/2 極細粒砂～細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし [灰色砂層]
17 10YR4/2 極細粒砂～細粒砂 しまりなし
18 10YR4/4 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
19 10YR3/3 極細粒砂 しまりなし
20 10YR4/2 極細粒砂～細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし
21 10YR4/2 極細粒砂～細粒砂 しまりなし [灰色砂層]
22 7.5YR3/3 極細粒砂 しまりやや有り [マンガン層]
23 10YR3/4 極細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし
24 10YR4/3 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
25 10YR3/3 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

第５図　調査区西壁断面図①（１：80）



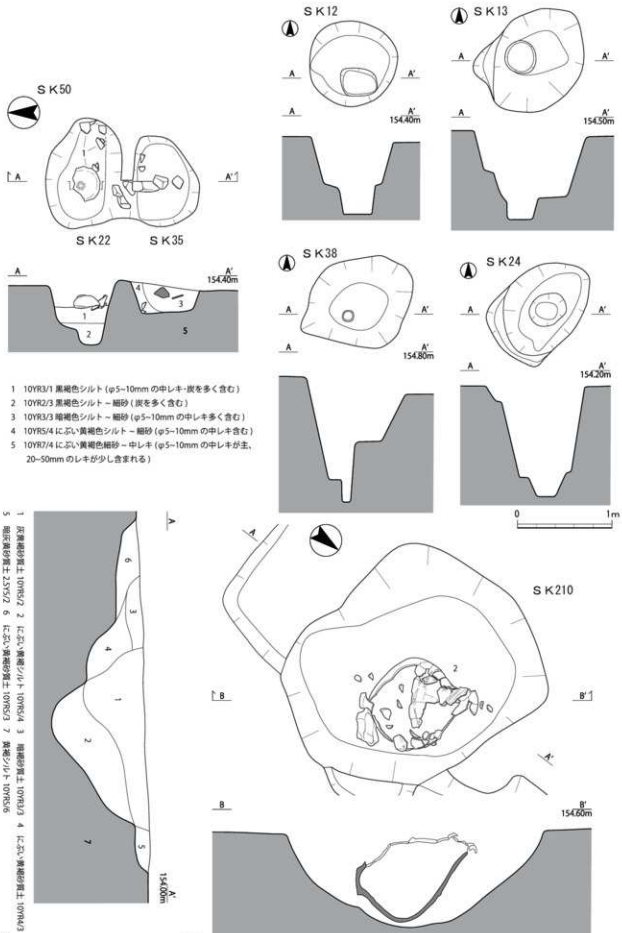
1　7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土［耕作土］
2　10YR4/6 褐色粘質土［床土］
3　10YR5/8 黄褐色砂質土［旧床土］
4　10YR3/4 暗褐色砂質土［包含層］
5　7.5YR5/2 灰オリーブ色砂質土と
7.5YR5/6 明褐色粘質土と 7.5YR5/6 やや砂質
のブロック層
6　5Y5/2 灰オリーブ色砂質土［包含層］
7　7.5YR5/6 明褐色粘質土
8　7のやや砂質
9　5Y5/1 灰色砂質土（ややシルト）
10　9と同色やや砂質
11　9と同色 3cm 大角礫少混
12　5Y5/1 灰色砂質土（シルト）
13　2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫層 5cm 大の礫含む［土石流堆積］
14　2.5Y5/3 黄褐色砂礫層 3~5cm 角礫多く含む［土石流堆積］
15　14と同色　礫含まずシルト層［土石流堆積］
16　7.5YR6/6 橙色土 3~10cm 大角礫少量含む［土石流堆積］
17　10YR5/6 黄褐色砂質土 3~5cm 角礫多く含む［土石流堆積］
18　2.5Y5/6 黄褐色粘質土 ~2.5Y5/3 黄褐色シルト［地山］





1　2.5Y4/1 シルト（一部極細）しまりなし［耕作土］
2　10YR3/1 シルト（一部極細）しまりあり［床土］
3　2.5Y3/2 極細（一部細）しまりややあり［床土］
4　7.5YR3/4 極細~細粒砂（一部シルト）しまりあり［マンガン層］
5　2.5Y4/2 極細~細粒砂（一部シルト）しまりなし［灰色砂層］
6　7.5YR3/4 極細 しまりあり［マンガン層］
7　2.5Y4/1 シルト（一部細）しまりなし
8　2.5Y3/3 細（一部極細）しまりなし
9　5Y4/1 シルト（一部粘土）しまりややあり
10　2.5Y4/2 シルト~極細 しまりなし
11　7.5YR5/6 極細（一部シルト）しまりややあり［マンガン層］
12　10YR4/2 極細~細 しまりややあり［床土］
13　10YR4/1 極細~細 しまりなし［現代攪乱］
14　10YR4/3 極細~細 しまりややあり［畦造成土］
15　10YR3/1 極細 しまりなし［現代攪乱］
16　7.5YR3/1 極細 しまりなし［現代攪乱］
17　2.5Y4/1 極細 しまりややあり［耕作土］
18　10YR4/2 極細~細 しまりなし［床土］
19　2.5Y4/2 極細 しまりなし
20　10YR4/3 シルト~極細 しまりあまりなし
21　2.5Y5/3 中粒砂 しまりなし 長径 2cm 以下の礫を 20% 含む［SD150 と一連の性格］
22　2.5Y4/3 細~中粒砂 しまりなし 長径 15cm 以下の礫を 10% 含む［SD150 埋土］
23　2.5Y4/2 極細（一部細）しまりなし［SD150 埋土］
24　2.5Y4/3 中粒砂 しまりなし 長径 10cm 以下の礫を 10% 含む［SD150 埋土］
25　2.5Y4/3 シルト しまりなし［ピット埋土］
26　10YR4/6 極細（一部シルト） しまりややあり［地山］

第６図　調査区西壁断面図②（１：80）



第７図　ＳＫ50・ＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ24・ＳＫ38（１：40）・ＳＫ210（１：20）実測図

に直径0.29mの小穴が0.23m掘られる。出土遺物はない。

SK38（第7図）　直径1mの円形で、深さは1.14m～1.19mである。底部の中央に直径0.1mの小穴が0.25m掘られる。出土遺物はない。（小原・服部）

2　奈良・平安時代

この時代の遺構には、溝、土坑（焼土土坑含む）やピットがあり、第2次調査I区から第5次調査G区を中心にまとまりを見せる。

出土遺物には、土坑や包含層から、暗文が施された土師器やロクロ土師器の皿、黒色土器椀の他、志摩式製塩土器などの細片がある。

（1）溝

SD116（第8図）　第2次調査I区の北東で検出した溝である。幅約0.5m×長さ約3.3m、深さは約0.07mである。なお、後世の柱穴などが重複するため、底面は凹凸である。須恵器の杯身（9）や灰釉陶器の壺片が出土した。

（2）土坑

SK123（第8図）　第2次調査I区の南東で検出した土坑である。1.3m×1.2mの円形で、深さは約0.2mである。須恵器の杯蓋（10）が出土した。（小原・服部）

SK196（第8図）　第5次調査G区の南西隅で検出した土坑である。幅0.6m×長さ1.6m、深さは0.1m、長楕円形を呈する。埋土に焼土を含む。土師器片が出土した。

SK197（第9図）　第5次調査G区の南東隅で検出した土坑である。幅0.9m×長さ2.2m、深さは0.35m、楕円形を呈し、埋土には焼土が含まれる。

出土遺物はないが、この遺構の周辺からは古代の遺物しか出土していないため、当時期のものと判断した。

SK200（第9図）　第5次調査G区の南西隅で検出した土坑である。多数の柱穴等と重複しているため、形状が認識しづらい。規模は0.9m×1.1m、深さは0.08mで方形を呈する。

焼土と炭に混じり、焼土硬化面直上で製塩土器（11～15）、土師器甕（16・17）、また、製塩土器片下から炭化種子が出土した。

SK205（第10図）　第5次調査G区の中央の南西部分、NR152が東～若干屈曲する西岸で検出した土坑である。規模は2m×1.7m、深さは0.11mである。

炭化材が約0.5m四方の方形に残存する箇所がある。出土遺物としては、平安時代の土師器杯（18）を底面直上で確認したほか、この遺構の上面から土師器長胴甕片、鉄滓（鉱滓）、灰釉陶器浄瓶の頸部片（299）が出土した。

焼土は土坑壁面寄りに集中してみられたが、カマド等の施設を確認できなかったこと、後世の柱穴は重複するものの、竪穴住居としての主柱穴を確認できなかったことから、焼土・炭化材を伴う土坑と判断した。

SK206（第8図）　SK205の東隣にある、長楕円形の土坑である。この遺構に重複して掘削された一次調査の調査坑の埋戻し埋土から、鉄製曲刃鎌（328）が出土した。遺構検出後、墓の可能性も考え半裁等を行い掘削したが、鎌以外の出土遺物および棺等の痕跡は見られなかった。

（3）Pit

I-L20Pit1（第26図）　第5次調査F区の南東で検出したPitである。規模は0.7m×0.4m、深さは0.55mである。ほぼ垂直に掘り込まれ、平面形は、楕円形状を呈する。焼土塊や炭化材が多く入り込んでいる。（大川・服部）

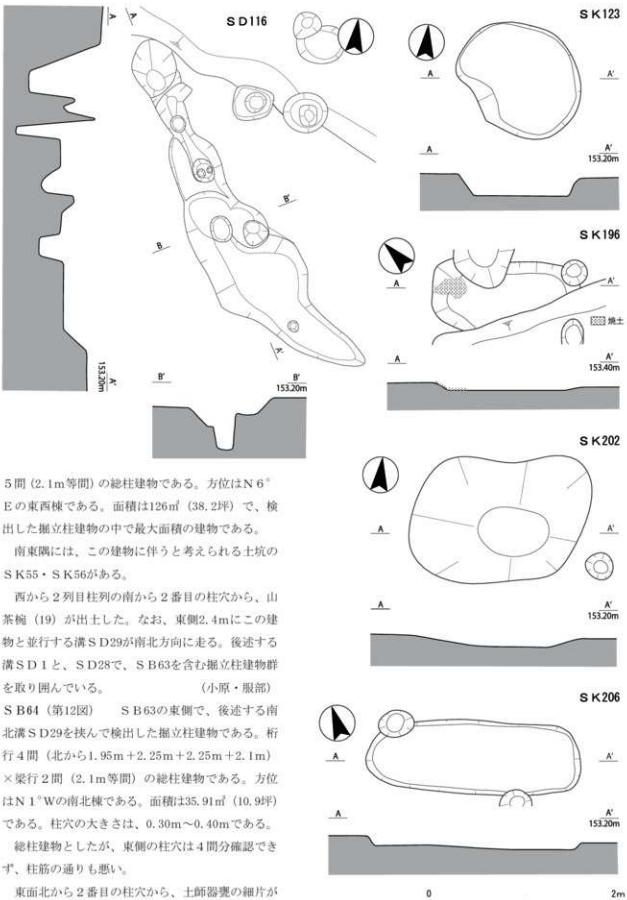
3　鎌倉時代以降

この時代の遺構には、掘立柱建物・柵列・土壙墓・土坑（建物に伴う南東隅土坑を含む）・溝（区画溝を含む）・自然流路などがある。当遺跡の中心となる時代であり、多数の山茶椀・小皿・土師器類が出土した。

（1）掘立柱建物・柵列・建物に伴う土坑

第2次調査A・B区で掘立柱建物4棟、同じく第2次調査I・J区で掘立柱建物7棟、柵列1基の他、掘立柱建物に伴う土坑を検出した。概ね、12世紀後半～13世紀前半のものと思われる。

SB63（第11図）　第2次調査A区の中央やや南東で検出した掘立柱建物である。桁行5間（東から2.4m＋2.4m＋2.1m＋2.55m＋2.55m）×梁行



第８図　ＳＤ116・ＳＫ123・ＳＫ196・ＳＫ202・ＳＫ206実測図（１：40）

５間（2.1m等間）の総柱建物である。方位はＮ６°Ｅの東西棟である。面積は126㎡（38.2坪）で、検出した掘立柱建物の中で最大面積の建物である。

南東隅には、この建物に伴うと考えられる土坑のＳＫ55・ＳＫ56がある。

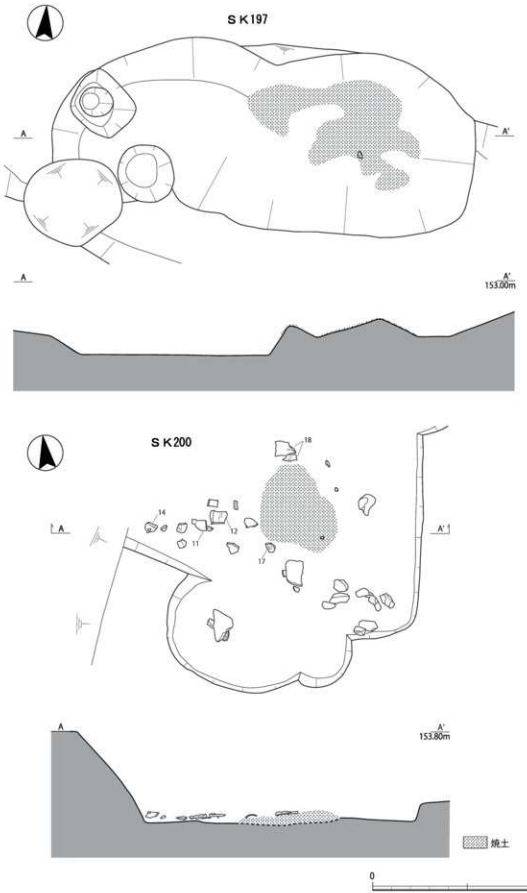
西から２列目柱列の南から２番目の柱穴から、山茶椀（19）が出土した。なお、東側2.4mにこの建物と並行する溝ＳＤ29が南北方向に走る。後述する溝ＳＤ１と、ＳＤ28で、ＳＢ63を含む掘立柱建物群を取り囲んでいる。　（小原・服部）

ＳＢ64（第12図）　ＳＢ63の東側で、後述する南北溝ＳＤ29を挟んで検出した掘立柱建物である。桁行４間（北から1.95m＋2.25m＋2.25m＋2.1m）×梁行２間（2.1m等間）の総柱建物である。方位はＮ１°Ｗの南北棟である。面積は35.91㎡（10.9坪）である。柱穴の大きさは、0.30m～0.40mである。

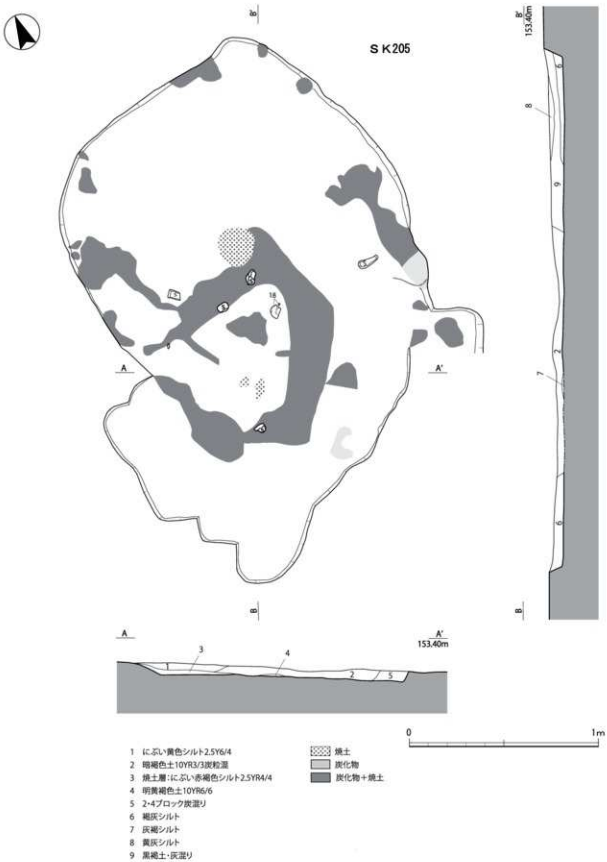
総柱建物としたが、東側の柱穴は４間分確認できず、柱筋の通りも悪い。

東面北から２番目の柱穴から、土師器甕の細片が出土した。

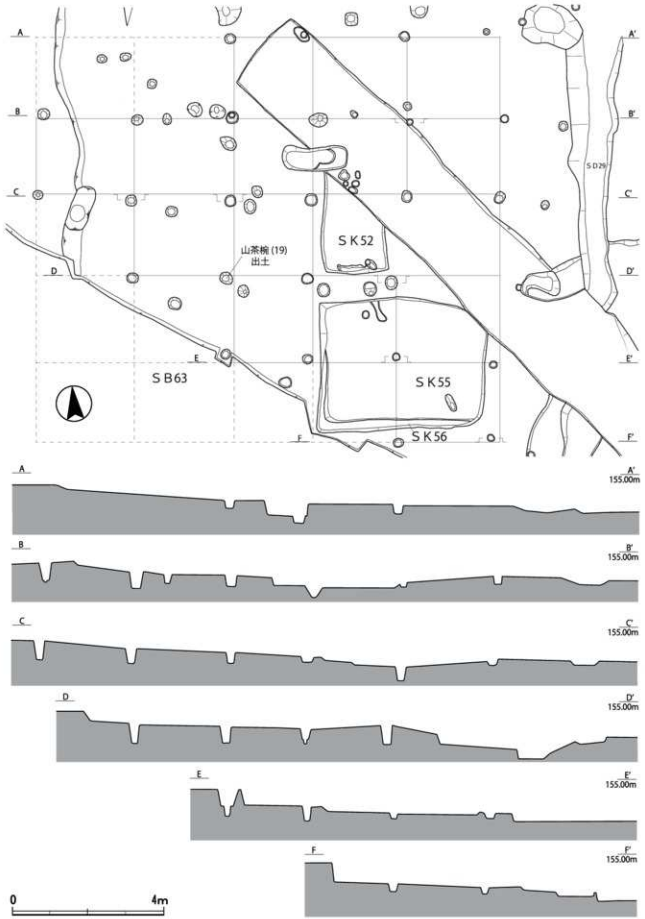
ＳＢ65（第12図）　ＳＢ63の南西で検出した掘立



第９図　ＳＫ197・ＳＫ200実測図（１：20）



第10図　ＳＫ205実測図（１：20）



第11図　ＳＢ63・ＳＫ52・ＳＫ55・ＳＫ56実測図（１：100）

柱建物である。桁行２間（2.25m等間）×梁行２間（2.25m等間）の総柱建物である。南西隅の柱穴は確認できず、全体の柱筋の通りも悪い。方位はＮ９°Ｅ、面積は20.25㎡（6.1坪）である。出土遺物はない。

なお、この建物の南３mに、ＳＤ１が東西方向に走る。

ＳＢ81（第13図）　ＳＢ65の北西で検出した掘立柱建物である。桁行４間（東から2.4m＋2.1m＋2.4m＋2.4m）×梁行４間（北から2.1m＋2.25m＋2.1m＋2.25m）の総柱建物である。方位はＮ４°Ｅの東西棟である。面積は80.91㎡（24.5坪）である。ＳＢ63に次ぐ面積の広い建物であり、北側の柱筋を揃える。（服部）

ＳＢ106（第14図）　第２次調査Ｉ区の中央で検出した掘立柱建物である。桁行３間（1.95等間）×梁行２間（2.1m等間）の総柱建物である。方位は、Ｎ８°Ｅと東西棟である。面積は24.57㎡（7.4坪）である。

この掘立柱建物の北東隅柱穴で、柱の抜き取り後に土器と大礫を交互に重ねて埋納したような状況が確認された（第15図）。埋納の状況は、柱穴底部に山茶椀を二分に割ったもの（22）を正位に据え、この上に握り拳大の礫を配している。続いて、礫の上部に山茶椀（20）、土師器の砕片と拳大の礫を置いている。さらに、礫の上に山茶椀（21）を伏せ、その上に拳大の礫を配している。

柱穴の位置が建物の北東隅という鬼門の方角であることは、非常に興味深い。出土した山茶椀は尾張型第４型式であり、12世紀後半の遺構と考えられる。なお、礫はいずれも自然石である。

その他、東面中央と西面中央の柱穴から土師器片、西面南隅の柱穴から灰釉陶器片が出土した。

（小原・服部）

ＳＢ107（第14図）　ＳＢ106の東側で重複する位置で検出した掘立柱建物である。桁行２間（北から1.95m＋2.1m）、梁行２間（東から1.95m＋2.1m）の総柱建物である。方位は、Ｎ８°Ｅである。面積は、16.4㎡（4.97坪）である。

東面の各柱穴から、土師器甕の細片が出土した。

ＳＡ108（第14図）　ＳＢ107の東側で検出した柱列で３間分を確認した。第２次調査Ｉ区、第４次調査Ｈ区、第５次調査ＧＥと３つの調査区が接する場所に当たる。北側に延びる掘立柱建物の可能性も検討したが、建物としての柱穴が北側に確認できなかった。そのため、後述するＳＢ119に伴う柵であると判断した。出土遺物はない。

ＳＢ119（第14図）　ＳＡ108の南側で検出した掘立柱建物である。桁行３間（東から1.95m＋1.95m＋1.8m）×梁行２間（2.1m等間）の側柱建物である。方位は、Ｎ２°Ｅの東西棟である。面積は23.94㎡（7.2坪）である。東面中央の柱穴から、黒色土器や土師器の細片が出土した。

ＳＢ128（第16図）　第２次調査Ｊ区の南側で検出した掘立柱建物である。桁行４間（東から2.7m＋2.1m＋2.4m＋2.1m）×梁行３間（北から1.95m＋2.1m＋2.25m）の総柱建物である。方位はＮ９°Ｗの東西棟である。面積は58.05㎡（17.6坪）である。

西から２列目柱列の北から２番目の柱穴から、山茶椀（23・24）が出土した。その他、複数の柱穴から土師器片・山茶椀片・小皿片が出土した。

なお、南東隅には、この建物に伴うと考えられる土坑ＳＫ127がある。

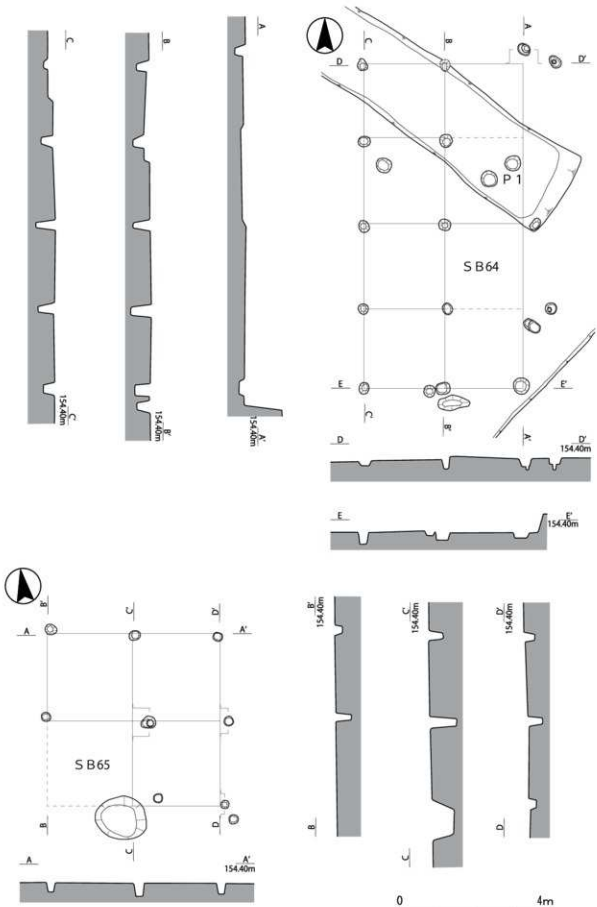
ＳＢ129（第17図）　ＳＢ128に重複する位置で検出した掘立柱建物である。桁行３間（東から2.7m＋2.4m＋2.4m）×梁行２間（北から1.95m＋2.1m）の総柱建物である。方位は、Ｎ９°Ｅの東西棟である。面積は31.59㎡（9.6坪）である。

東から２列目の南柱穴から土師器甕の細片が出土した。

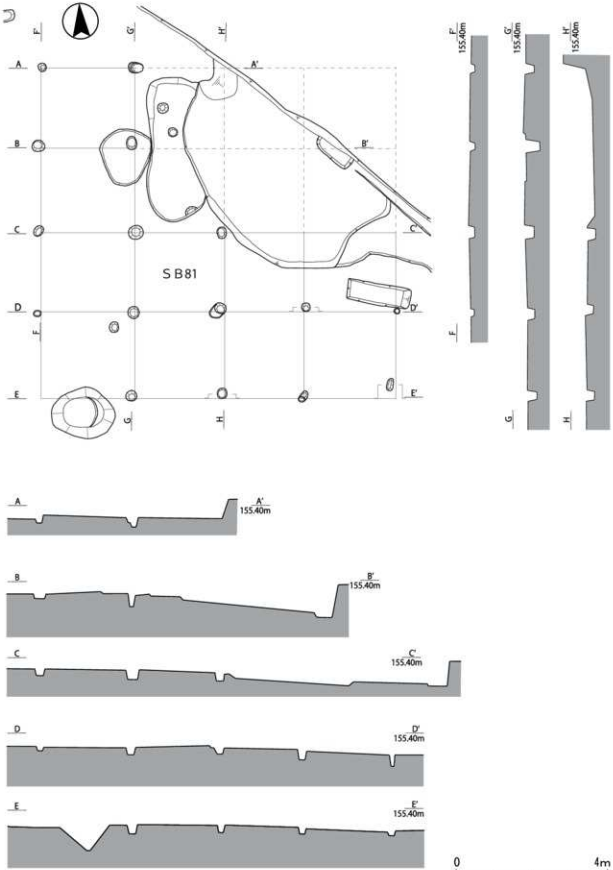
なお、北東隅には、この建物に伴うと考えられる土坑ＳＫ126がある。

ＳＢ130（第17図）　ＳＢ128とＳＢ129の北東で検出した掘立柱建物である。桁行３間（東から1.95m＋2.1m＋2.1m）×梁行２間（2.1m等間）の総柱建物である。方位はＮ８°Ｅの東西棟である。面積は25.83㎡、7.8坪である。

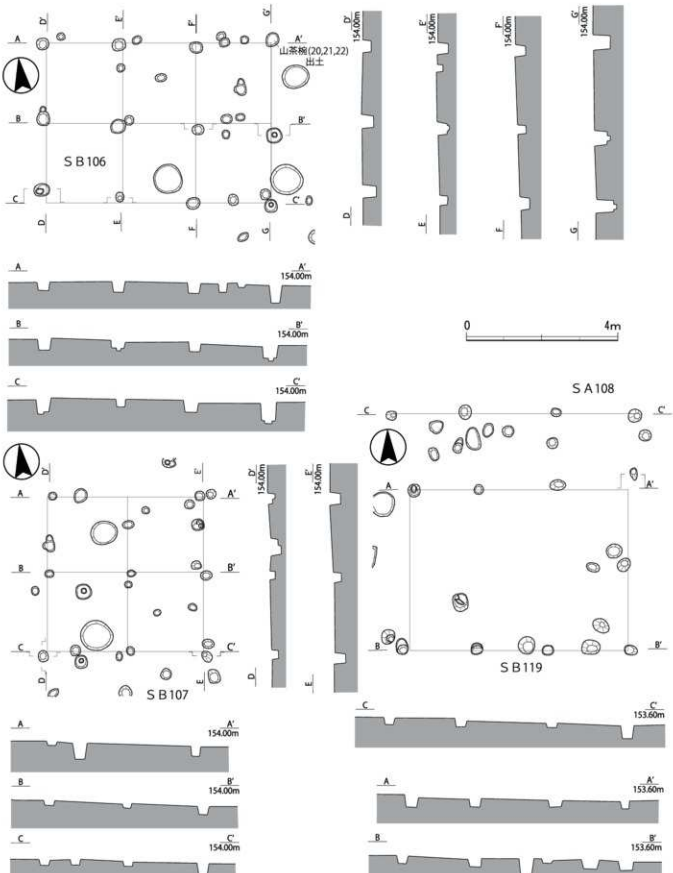
南西隅の柱穴からは土師器の杯（25）、北東隅の柱穴からは、同じく土師器の皿（26）が出土した。その他、北面の東から２番目の柱穴からは灰釉陶器片、西から２列目の北から２番目の柱穴からは灰釉陶器片、土師器の細片が出土した。



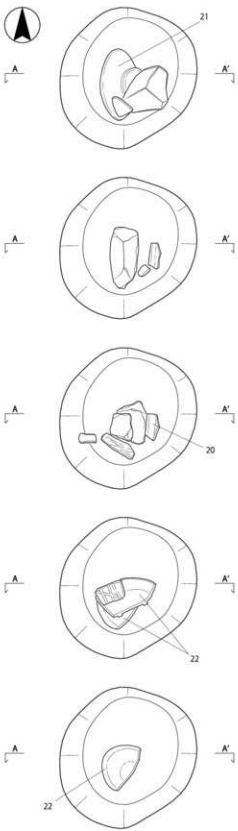
第12図　ＳＢ64・ＳＢ65実測図　（１：100）



第13図　ＳＢ81実測図（１：100）



第14図　SB106・SB107・SA108・SB119実測図（1：100）



第15図　ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況図（１：10）

ＳＢ131（第18図）　第２次調査Ｊ区の北側中央で検出した。桁行３間（北から2.25m＋2.4m＋2.25m）×梁行２間（東から2.55m＋2.4m）の総柱建物である。方位はＮ８°Ｅの南北棟である。面積は34.1㎡（10.3坪）である。

北面中央の柱穴からは土師器の鍋（27・28）が、北西隅の柱穴からは土師器の甕片が出土した。

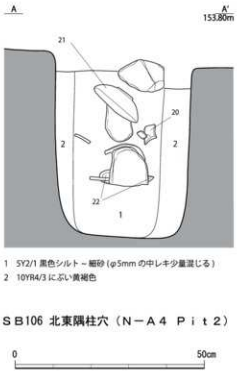
なお、南東隅には、この建物に伴うと考えられる土坑ＳＫ122がある。

ＳＫ52（第11図）　後述するＳＫ55の北側で検出したＳＢ63に伴う土坑と思われる。北東部分は調査坑により、規模が判然としないが、１間×２間の長方形を呈する可能性がある。出土遺物はない。

ＳＫ55・ＳＫ56（第11図）　ＳＫ55は、ＳＢ63に伴う南東隅土坑である。２間×２間の範囲に収まる。形状は隅丸方形で、長辺（東西）約4.3m、短辺（南北）約3.4m、深さは約0.1mである。なお、この土坑の南側にはＳＫ56が、重複して存在する。

出土遺物には、片口鉢（29）、土師器の羽釜（30）、山茶椀（31・32）がある。

ＳＫ122（第18図）　ＳＢ131に伴う南東隅土坑で



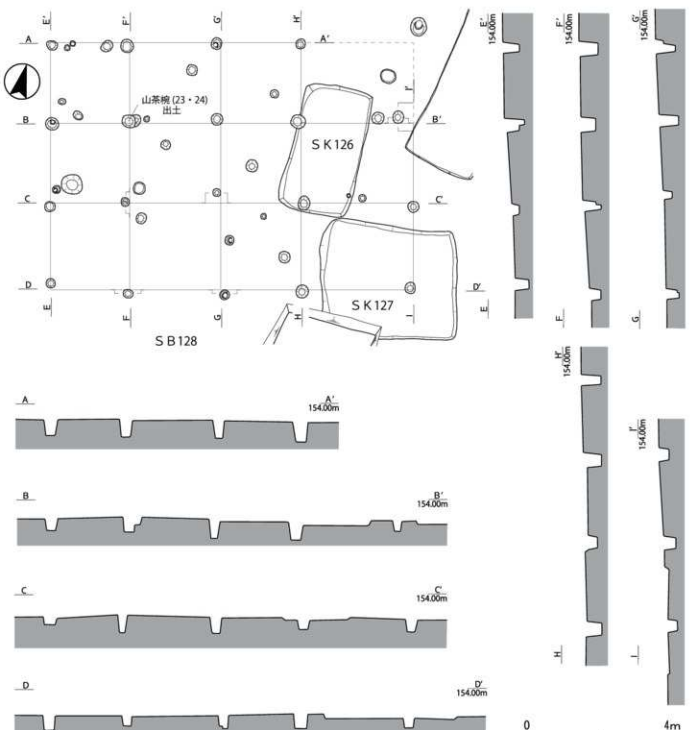
1　5Y2/1 黒色シルト～細砂（φ5mm の中レキ少量混じる）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色

ＳＢ106 北東隅柱穴（Ｎ－Ａ４　Ｐｉｔ２）

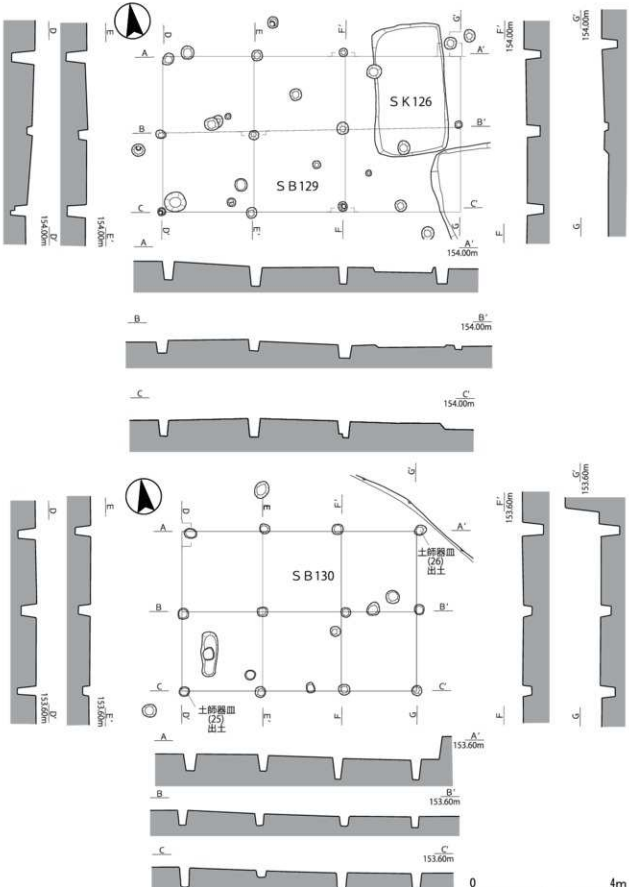
ある。概ね１間×１間に収まる隅丸方形のもので、直径約2.0m、深さは約0.13mである。出土遺物には、山茶椀（33）がある。

ＳＫ126（第17図）　ＳＢ129に伴う土坑である。概ね北東隅の１間×１間に収まるが、南北に長い長方形を呈する。長辺（南北）3.4m、短辺（東西）1.8m、深さは約0.09mである。出土遺物には、ロクロ土師器の椀（34）、山茶椀（35～38）、小皿（39・40）がある。

ＳＫ127（第16図）　ＳＢ129に重複するＳＢ128に伴う南東隅土坑である。概ね１間×１間に収まり、隅丸長方形を呈する。長辺（東西）3.7m、短辺



第16図　ＳＢ128・ＳＫ127実測図（１：100）



第17図　ＳＢ129・ＳＫ126・ＳＢ130実測図（１：100）

（南北）３m、深さは約0.11mである。出土遺物には、山茶椀（41・42）がある。

（２）溝

第２次調査Ａ・Ｂ区では、前述の掘立柱建物群を区画するような溝を検出した。

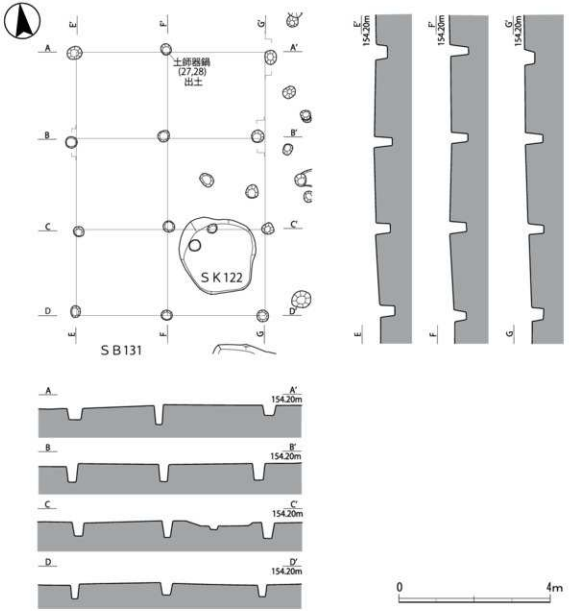
出土遺物には、尾張第４～６型式を中心とした山茶椀や小皿、土師器の皿や鍋、常滑陶器の甕、渥美陶器の甕などがあり、時期は概ね、12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

また、第４次調査・第５次調査では、後述する自然流路ＮＲ152に付随する溝を検出した。

ＳＤ１（第26図）　第２次調査Ｂ区のほぼ中央で検出した東西方向の溝である。幅約1.1m、延長38.9m、深さ約0.31mである。西側で若干北側に曲がる様相を呈しており、調査区外での工事立会い調査では、その続きを確認することが出来なかった。後述するＳＤ28とＳＤ29で、掘立柱建物ＳＢ63・ＳＢ65・ＳＢ81を取り囲む区画溝として考えられる。

出土遺物には、土師器の鍋（43）、小皿（44～53）、多量の山茶椀（54～114）、常滑陶器の甕（115～118）や渥美陶器の甕（119・120）などがある。

ＳＤ20（第26図）　ＳＤ１の南で検出した東西方



第18図　ＳＢ131・ＳＫ122実測図（１：100）

向の溝である。幅0.8m、延長5.1m、深さ約0.05mである。

出土遺物には、山茶椀、土師器皿がある。

ＳＤ21（第26図）　ＳＤ20の南で検出した東西方向の溝である。幅1.3m、延長16.8m、深さ約0.44mである。ＳＤ１との溝芯々の距離は約16.5mで、ＳＤ１と後述するＳＤ28との距離の半分である。

出土遺物には、山茶椀（121～123）、小皿（124）、黒色土器（125）がある。

ＳＤ28（第26図）　第２次調査Ａ区のほぼ中央で検出した東西方向の溝である。幅0.9m、延長18m、深さ約0.31mである。ＳＤ１と並行に走り、溝芯々の距離は約30mである。

出土遺物には、山茶椀（126～134）、小皿、土師器、常滑陶器の甕、渥美陶器の甕などがある。

ＳＤ29（第26図）　第２次調査Ａ区の東で検出した南北方向の溝である。幅約1.2m、延長24.2m、深さ約0.18mで、ＳＤ１とＳＤ28に直交する方向に走る。出土遺物には、土師器鍋（135）、山茶椀（136～141）、小皿（142・143）、常滑陶器の甕、渥美陶器の甕などがある。（服部）

ＳＤ150（附図）　第４次調査Ｅ区の北西で検出した東西方向の溝である。幅１m、深さ0.44mである。西から東へと流れていたと考えられ、御幣川からの用水路の可能性もある。

出土遺物として、山茶椀、天目茶椀、製塩土器、陶器片などが出土した。

ＳＤ153（附図）　第４次調査Ｅ区の東側、後述するＮＲ152に並行して検出した南北方向の溝である。幅0.3m、深さ0.13mの溝で、延長13.4m確認した。出土遺物はない。

ＳＤ154（附図）　第４次調査Ｈ区の北西で検出した溝である。幅0.5m、深さ0.17mである。川底の高さから判断すると、北北東方向へと流れていたと考えられる。この流れや形状から、御幣川からの用水路の可能性がある。出土遺物には、山茶椀（145・146）がある。

なお、ＳＤ150と、後述するＳＤ155も同じような形状をしており、同様の性格を持つものと考えられる。

ＳＤ155（附図）　ＳＤ154の南側で検出した溝である。幅0.5m、深さ0.13mである。ＳＤ154から分岐していた可能性も考えられる。出土遺物には、山茶椀（147）がある。（浅野・服部）

ＳＤ191（附図）　第５次調査Ｆ区の南東、後述するＮＲ192の下層で検出した東西方向の溝である。幅0.7m、深さ0.13mである。第２次調査Ｂ区で検出したＳＤ21へ繋がる可能性もあるが、確証はない。

ＳＤ203（附図）　第５次調査Ｇ区の中央やや東寄り、ＮＲ152に合流する東岸で検出した弧状溝である。黒褐色の壌土で検出したが、0.05m下で暗褐色の小礫を含む砂であった。陶器瓶類の小片が出土した。

溝の形状及び検出時の埋土の状況から、弧状溝形水洗式トイレ遺構とも考えられたため、土壌試料の採取を試みたが、砂礫層に阻まれ、採取できなかった。（大川・服部）

（３）土壙墓

第２次調査Ａ区で１基、Ｂ区で４基確認した。特にＳＸ76・78・79は密集しており、規模や方位も比較的近似している。

ＳＸ60（第19図）　第２次調査Ａ区の北東で検出した。平面形態が隅丸長方形を呈しており、主軸は東西を向く。規模は上面2.2m×1.48m、下面2.04m×1.32m、深さ0.15mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

出土遺物は山茶椀（149～159）があり、土壙墓の西から中央にかけて出土した。この内、１点（155）の底部外面には「大」の墨書がある。尾張型第５型式で、時期は13世紀前後とみられる。この他に、土壙中央から北寄りにかけて拳大の大礫が４点出土しており、いずれも自然石である。

ＳＸ76（第20・21図）　第２次調査Ｂ区の西側で検出した。平面形態が隅丸長方形を呈しており、主軸は南北を向く。規模は上面2.0m×0.82m、下面1.8×0.72m、深さ0.18m～0.26mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

出土遺物は山茶椀１点（170）、小皿10点（160～169）の他、和鏡１点（171）、鉄製品の和鋏（172）、毛抜き（173）、刀子（174）がある。土器の時期は尾張型第５型式で、13世紀前後と考えられる。

出土状況は、山茶椀が中央南寄りにあるものの、

小皿・和鏡・鉄製品は墓壙の北東にまとまっていた。

また、山茶椀・小皿は墓壙中央に向かい落ち込んだ状態であるのに対し、和鏡・鉄製品は墓壙の底部付近から出土した。このことから和鏡・鉄製品は棺内の副葬品であり、山茶椀・小皿は棺外の供献具であったとみられる。

ＳＸ78（第22図）　ＳＸ76の南側で検出した。平面形態が隅丸長方形であり、主軸は南北を向く。規模は上面1.75m×0.79m、下面1.59m×0.71m、深さ0.25mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

出土遺物には土師器皿10点（175～184）がある。その内７点（178～184）が墓壙北西隅の底部付近でまとまり出土した。さらに、この土器群から東で３点（175～177）がまとまり、墓壙中央に向かい落ち込んだ状態で出土した。時期は、12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

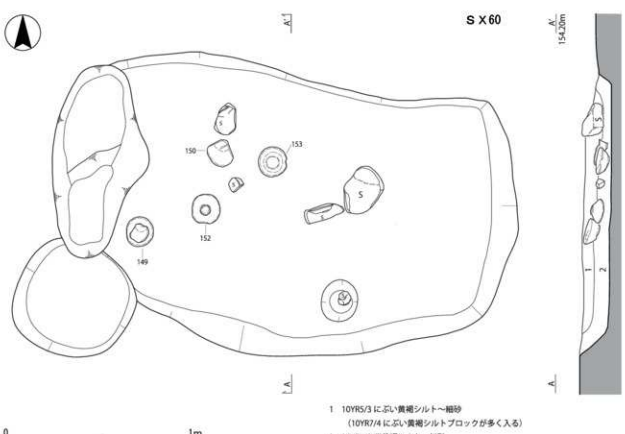
ＳＸ79（第23図）　ＳＸ78の東側で検出した。平面形態が隅丸長方形を呈しており、主軸は南北を向く。規模は上面1.65m×0.86m、下面1.52m×0.76m、深さ0.1mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

出土遺物には尾張型第６型式の山茶椀が２点（185・186）、土師器の皿が４点（187～190）、墓壙北東隅にまとまり、墓壙中央に向かい落ち込んだ状態で出土している。時期は13世紀前半と考えられる。

ＳＸ80（第23図）　前述のＳＸ76、78、79の北東で検出した。平面形態が隅丸長方形を呈し南北を向くが、北端は溝ＳＤ１により削平される。規模は上面1.6m×0.74m、下面1.46m×0.54m、深さ0.3mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

遺物はロクロ土師器椀２点（191・192）が墓壙北東で合口に据えられた状態で出土した。２点とも底部には糸切痕が残り、口縁部から体部にかけての調整はロクロナデである。時期は12世紀後半とみられる。

ＳＸ110（第24図）　第２次調査Ｉ区西側で検出した。平面形態が楕円形を呈しており、南北を向く。



第19図　ＳＸ60実測図（１：20）

上面1.8m×0.5m、下面1.54m×0.25m、深さ0.25mである。木棺の痕跡については確認できなかった。

出土遺物は墓坑北東隅に尾張型第５型式の山茶椀１点（193）が伏せられた状態で出土した。時期は13世紀前後と考えられる。（小原・服部）

（４）その他の土坑

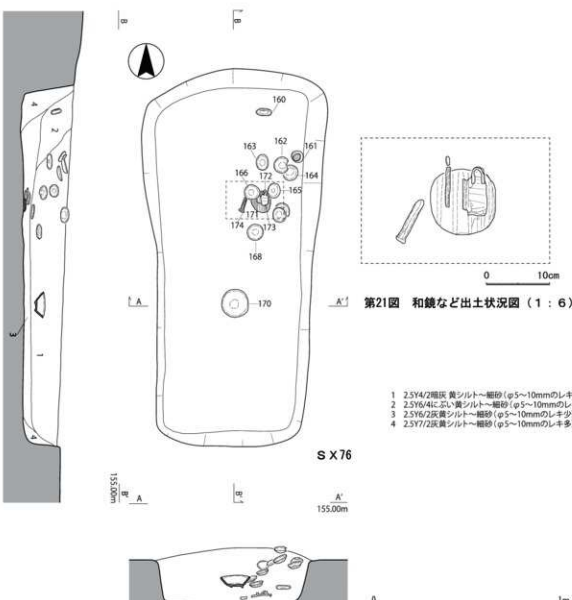
自然流路ＮＲ152の両岸で、礫を充填する土坑数基と、焼土土坑を確認した。

ＳＫ161（第25図）　第４次調査Ｈ区の北側で検出した土坑である。長さ1.55m、幅0.65m、深さ0.35cm、隅丸長方形状を呈しており、断面は箱形、礫が充填されていた。礫の大きさは、0.1m以下のものから0.3mのものまである。形状は、角礫・亜角礫・亜円礫が多く、一部円礫も含まれ、材質も様々である。

また、石材の並び方についても、一定の高さに揃えたような状況ではなく、意図的な配置が観察できなかったことから、石材をランダムに詰め込んだものと考えられる。

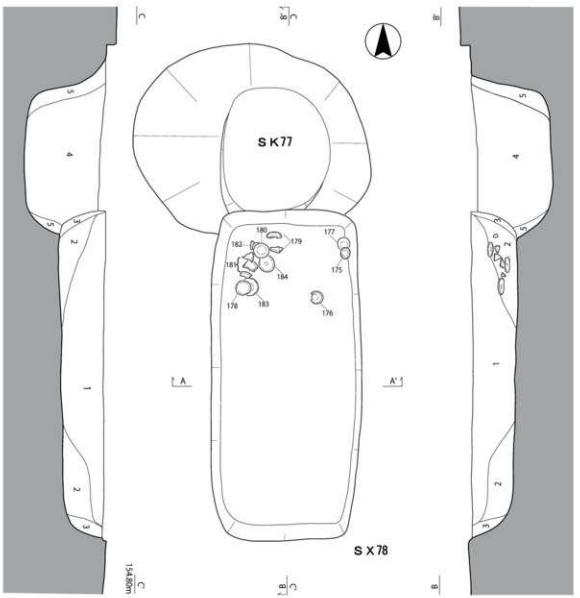
出土遺物としては、山茶椀（226）が１点ある。底部のみで、完形ではないこと、石材と石材の間に挟まるようにして斜位で出土していることから、意図的な据え付け・設置・安置などは考えにくい。

このような状況から、遺構の性格としては、中世墓とは考えにくく、不要な石材をまとめて廃棄した



第21図　和鏡など出土状況図（１：６）

第20図　ＳＸ76実測図（１：20）



1　2.5Y4/2 暗灰黄シルト～細砂
（φ5 ～ 10mm のレキ多）
2　2.5Y3/1 黒褐シルト～細砂
（φ5 ～ 10mm のレキ少）
3　2.5Y7/2 灰黄シルト～細砂
（φ5 ～ 10mm のレキ多）
4　5YR2/1 黒褐シルト～細砂
（φ5 ～ 10mm のレキ多）
5　10YR4/2 灰黄褐色シルト
（φ5 ～ 10mm のレキ少）

0　1m

第22図　ＳＫ77・ＳＸ78実測図（１：20）

土坑であったと考えておく。

ＳＫ163（第25図）　第４次調査Ｈ区北東で検出した土坑である。長さ2.1m、幅0.8m、深さ0.3mの隅丸長方形を呈する。断面は逆台形で、礫が充填されていた。礫の大きさは、0.1m以下のものから0.3mのものまである。

出土遺物は、土師器皿（227）、土師器鍋（228）、山茶椀（229～231）がある。

礫の形状、大きさ、並び方、出土遺物の状況などは、ＳＫ161と類似しているため、同様の性格の遺構であろう。

ＳＫ164（第25図）　ＳＫ163の北側で検出した遺構である。長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.4mの隅丸長方形の土坑である。断面は逆台形に近く、やや緩やかな傾斜で、深さは0.4mを測る。

出土遺物として、灰釉陶器あるいは山茶椀とみられる破片が１点出土した。

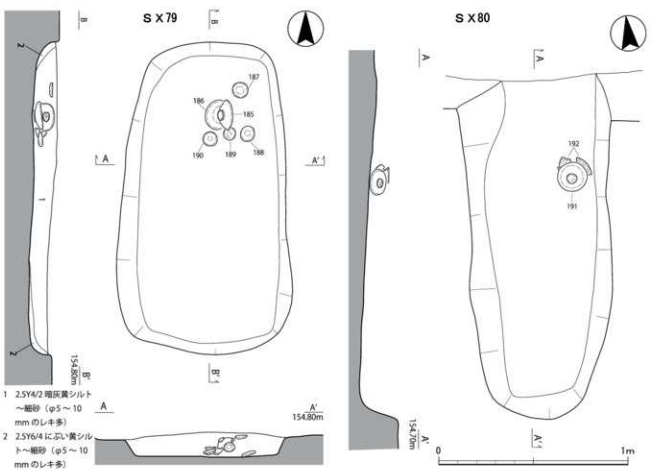
礫の形状、大きさ、並び方、出土遺物の状況などは、ＳＫ161・ＳＫ163と類似しているため、同様の性格の遺構であろう。　（浅野・服部）

ＳＫ193（第25図）　第５次調査Ｆ区の南西で、ＮＲ152の西岸の川岸最上段で検出した土坑である。長辺2.0m、短辺1.8m、深さ0.08mで、不整円形の形状である。拳大の礫が充填されている。出土遺物はない。

ＳＫ194（第25図）　第５次調査Ｆ区の中央南で、後述するＮＲ192に沿って検出した土坑である。

幅0.9m、延長3.7mにわたって、0.1m～0.25m大の川原石が浅い掘り込みの中に充填されたような形状で検出された。出土遺物はない。

ＳＫ211（第25図）　第５次調査Ｇ区中央東、ＮＲ152の東岸で検出した土坑である。ＳＫ193と同様不正円形に川原石が浅い掘り込みに充填された状況で検出されたが、石の残存はＳＫ193より密度が薄く、



第23図　ＳＸ79・ＳＸ80実測図　（１：20）

角礫がやや多く見受けられた。出土遺物はない。

このような礫を充填するような土坑は、ＮＲ152の両岸の法面に多く検出された。形状は不整円形、長楕円形と一定ではないが、増水時の護岸や氾濫時の洗掘を防止するために設置した蛇籠[1]的な水制敷材の残骸であると思われる。

なお、ＮＲ152の東岸の法面にみられる、不連続の溝状土坑も、礫が検出されていないものの、こうした水制敷材の据え付け痕跡であった可能性がある。

（大川・服部）

（５）自然流路

ＮＲ152　第４次調査Ｅ区からＦ区、第５次調査のＧ区のほぼ中央で検出した自然流路である。北側ではやや南西方向に流れ、途中からやや東に進路を変えるが、概ね南北方向に縦断する。川幅約８～15ｍで、東西に氾濫域があり、氾濫域を含んだ川幅は、約28ｍとなる。雨の時のみ、冠水するような、一種の「かれ川」のようなものだったと考えられる。

川面の東西の法面には、いくつかの段が形成され、各段に不連続の溝状土坑を確認した。

川底は、地山が洗掘され、川幅中央は３～５㎝大の円礫が厚く堆積して、中洲を形成しており、水量が減じた時には、中洲を除けて東西の法際に流れが分流した様子が明らかとなった。

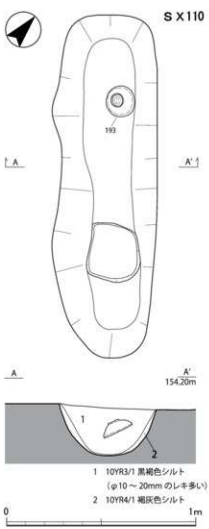
また、東岸は、わずかな平坦部を見せるが、ゆるやかに東側の市道へ向けて下がる傾斜を見せており、第２次調査Ｂ区で確認した屋敷地や土壙墓の集落域との間に、浅い凹地があったものと考えられる。一方の西岸は、南へ行くほど、古代の土坑や中世の柱穴、土坑などが検出され、安定した面が存在していたものと思われる。

出土遺物には、氾濫域の川岸にあたる部分で山茶椀が、また、川底の円礫直上に当たる層から、灰釉陶器が出土した。これらの遺物から古代から中世にかけて機能したと考えられる。

（浅野・大川・服部）

ＮＲ192　第５次調査Ｆ区の南東隅から西流して、南端中央でＮＲ152へ合流する流路である。約0.45ｍ下で東西溝ＳＤ191とＳＤ190が検出され、これらの東西溝が増水時に氾濫してできた流路と考えられる。

（大川・服部）



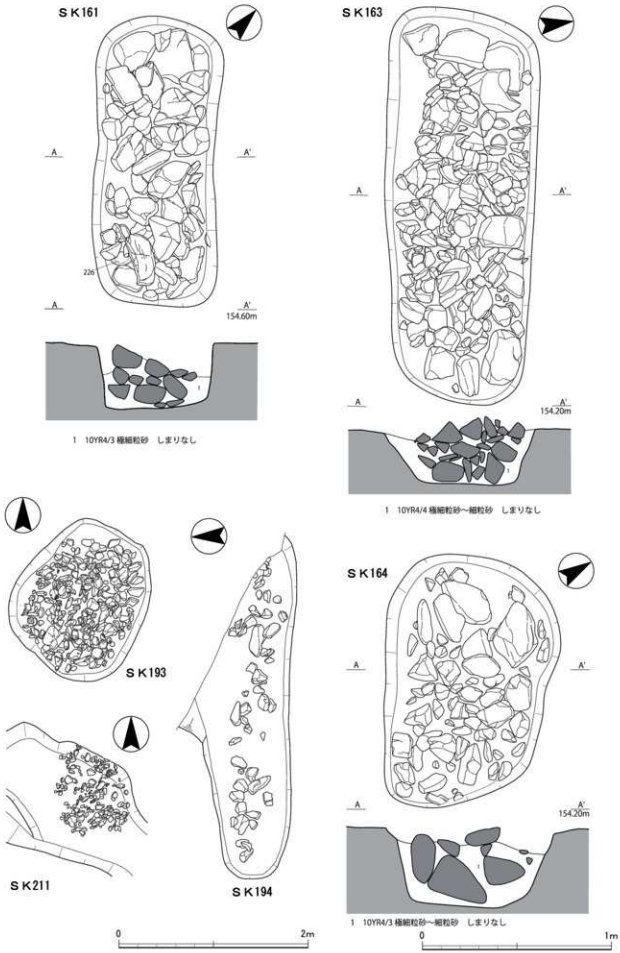
第24図　ＳＸ110実測図（１：20）

【註】

①蛇籠は、近世の農書『百姓伝記』に、土川や砂川では不適、石川に適性な水衝部や洗掘箇所の防御資材と記される。また、近隣の山本町郷土史には、近世に錦川の氾濫に対して蛇籠による洪水対策を講じてきた歴史が紹介されており、近世以前もこうした川の護岸対策を行ってきた地域であったと考えられる。

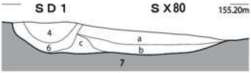
・石崎正和「蛇籠に関する歴史的考察」『第７回日本土木史研究発表会論文集』（1987年）

・山本町郷土史研究会『山本の昔いま』（2003年）

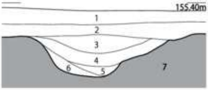


第25図 SK161・SK163・SK164(1：20)・SK193・SK194・SK211(1：40) 実測図

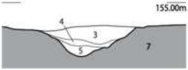
ＳＤ１・ＳＸ80 土層断面



ＳＤ１ 第２次Ｂ区西壁



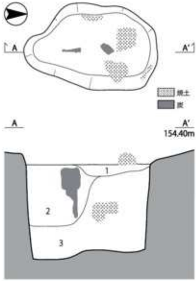
ＳＤ１（Ｊ－Ｉ５～Ｊ５）



ＳＸ80
a　10YR6/4 にぶい黄色細粒砂（φ5mm の中レキ多）
b　10YR7/4 にぶい黄シルト～細粒砂（φ5mm の中レキ多）
c　2.5Y4/2 暗灰変色シルト～細粒砂（φ5mm の中レキ多）

ＳＤ１・20・21
1　N3/ 暗灰色粘土（φ2~5mm のレキを均一に含む）
2　5Y5/3 灰オリーブシルト～細砂（φ2~5mm のレキを均一に含む）
3　10YR3/3 暗褐色シルト～細砂（φ5mm 程の中レキ多）
4　10YR2/3 黒褐シルト～細砂
5　10YR4/3 にぶい黄褐シルト～細砂（スミを少し含む）
6　10YR3/1 黒褐色シルト
7　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～中レキ（φ5~30mm の中レキ多）

Ｉ－Ｌ20Ｐｉｔ１

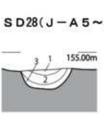


Ｉ－Ｌ20Ｐｉｔ
1　Ｐｉｔ埋土（上層）　褐灰砂質土 10YR4/1 に炭微小粒混
2　Ｐｉｔ埋土炭層　褐灰砂質土 7.5YR4/1 に炭塊 3cm 大混じり
3　Ｐｉｔ埋土（最下層）　黄褐砂質土 10YR5/6+灰黄褐砂質土（やや粘質）10YR5/2 の Br 層

0　50cm

ＳＤ20・ＳＤ21（Ｊ－Ｍ２）

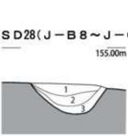
ＳＤ28（Ｊ－Ａ５～Ｊ－Ｂ５）



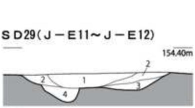
ＳＤ28
1　7.5YR4/3 褐シルト～細粒砂（φ3~10mm のレキ多）
2　7.5YR4/2 灰褐シルト（φ3~5mm のレキ少）
3　7.5YR5/4 にぶい褐シルト（φ3~5mm のレキ少）

0　2m

ＳＤ28（Ｊ－Ｂ８～Ｊ－Ｃ８）

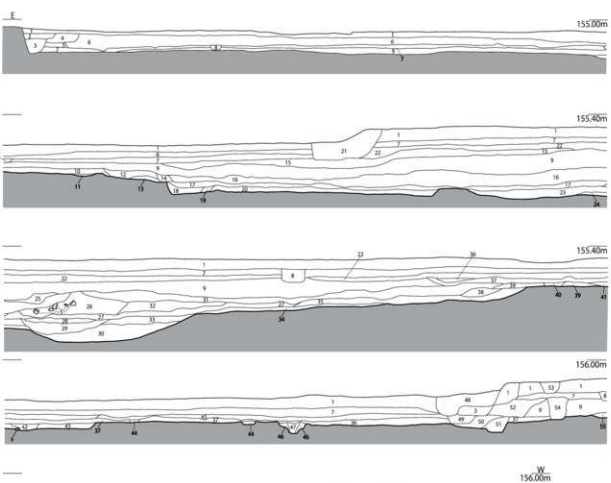


ＳＤ29（Ｊ－Ｅ11～Ｊ－Ｅ12）



ＳＤ29
1　10YR3/2 黒褐色シルト～細砂
2　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂（10YR6/6 明黄褐シルト）
3　10YR4/2 灰黄褐色細砂（φ5mm の中レキ多）
4　10YR3/1 黒褐シルト～細砂（φ5mm の中レキ多）

第26図　ＳＤ１・ＳＤ20・ＳＤ21・ＳＤ28・ＳＤ29・ＳＸ80土層断面図（１：40）　Ｉ－Ｌ20Ｐｉｔ１実測図（１：20）



1 SG4/1 暗緑灰色粘質土［表土］
2 埋設し土
3 攪乱
4 N3/ 暗灰色粘質土に攪乱粘土の粒混じり
5 N3/ 暗灰色粘質土に床土の粒混じり
6 N3/ 暗灰色粘質土［旧表土］
7 2.5Y7/8 黄色粘質土（小礫混）［床土］
8 耕作溝
9 2.5Y5/3 黄褐色土（やや砂質）［包含層］
10 10YR4/2 灰黄褐色土（小礫混）［NR191］
11 10YR5/2 灰黄褐色シルト［NR191 東辺基時の蛇籠］
12 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（～ 5mm 大砂粒混）［NR152 東辺基］
13 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫（1 cm大礫混）［NR152 東辺基］
14 5Y4/2 灰オリーブ色シルト（5 ～ 10mm 下礫混）［NR152 東辺基］
15 2.5Y6/4 にぶい黄色土（やや砂質・マンガン粒含む）［NR152 上面包含層］
16 5Y5/2 灰オリーブ色砂質土（やや粘性あり）［NR152］
17 2.5Y5/3 灰色シルトと 10YR5/6 黄褐砂質土のブロック層［NR152］
18 5Y4/1 灰色シルト［NR152］
19 2.5Y5/3 黄褐色シルト（粘性大）［NR152］
20 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（わずかに 5mm 大砂粒含む）［NR152］
21 攪乱 地境の段差造成
22 10YR6/6 明黄褐色土（やや砂質）に 10YR3/2 黒褐色土（マンガン塊）流着［NR152 上面包含層］
23 5Y6/2 灰オリーブ色シルト
24 5Y4/1 灰色シルト（微細砂粒多く含む）
25 5Y7/6 黄色細砂
26 5Y4/2 灰オリーブ色シルト（10 ～ 15 cm礫含む）［SK193］
27 2.5Y4/1 浅黄色シルト
28 7.5Y7/3 浅黄色シルト
29 7.5Y6/2 灰オリーブ色（10 cm大礫少量含む）
30 5Y6/4 オリーブ黄色
31 10YR6/8 明黄褐色砂質土
32 5Y5/2 灰オリーブ色砂質土（やや粘性あり）に炭粒含む
33 5Y7/3 浅黄色シルト
34 2.5Y5/3 黄褐色シルト
35 2.5Y4/1 黄灰色シルトに 2.5Y5/3 黄灰色シルトのブロックが混じる
36 2.5Y4/1 黄灰色シルト［包含層］
37 2.5Y5/1 黄灰色シルト（小石粒含む）［包含層］
38 10YR5/1 褐灰色シルト（微小炭粒含む）［NR152 埋土］
39 10YR6/8 明黄褐色砂質土に 2.5Y5/1 黄灰色シルト（小石粒含む）がブロックで混じる
40 2.5Y6/1 黄灰色シルト［Pit 埋土］
41 10YR5/1 褐灰色シルトと 10YR5/8 黄褐色シルトのブロック層
42 10YR5/1 褐灰色シルトと 10YR6/6 シルト明黄褐色のブロック層
43 2.5Y6/4 にぶい黄色と 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトのブロック層
44 2.5Y6/2 灰黄色シルト［Pit 埋土］
45 2.5Y5/1 黄灰色シルト（小石粒含む）の上面に床土の金気が沈着したマンガン塊の層
46 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト
47 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト
48 攪乱 畦境の攪乱
49 7.5Y6/1 灰色シルトと 5Y7/4 浅黄色シルト（地山）のブロック層
50 5Y7/3 浅黄色シルトにわずかに 7.5Y6/1 灰色シルトがブロック混入
51 5Y6/1 灰色シルトに 5Y7/3 浅黄色シルトがわずかにブロック混入
52 攪乱 旧地境の造成痕
53 攪乱 取水口攪乱
54 旧造成痕
55 2.5Y5/3 黄褐色土と 10YR3/1 黒褐色土のブロック層
56 5Y6/6 明黄褐色シルト（3 cm大小礫含む）
57 2.5Y5/3 黄褐色土と 10YR3/3 暗褐色土と 2.5Y5/4 黄褐色シルトのブロック層
58 2.5Y5/4 黄褐色シルト（2 ～ 3 cm大 小礫含む）
59 根カクラン
60 株
61 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫層［土石流堆積］
62 根

第27図　第５次調査Ｆ区南壁土層断面図（１：80）

遺構番号	大地区	小地区	P i t	出土遺物	規模			柱間		方位	棟方向	備考
					間数	桁行（m）	梁行（m）	桁行（m）	梁行（m）			
S B 63	J	E－8	P i t 3									
	J	F－8	P i t 3	山茶椀（№ 19）	5×5	12	10.5	2.4＋2.4＋2.1＋2.55＋2.55	2.1＋2.1＋2.1＋2.1＋2.1	N 6° E	東西棟	総柱建物 S K 65・S K 52（南東隅土坑）
	J	E－8	P i t 5									
S B 64	J	F－12	P i t 1	土師器甕片	4×2	8.55	4.2	1.95＋2.25＋2.25＋2.1	2.1＋2.1	N 1° W	南北棟	総柱建物
S B 65	J				2×2	4.5	4.5	2.25＋2.25	2.25＋2.25	N 9° E		総柱建物
S B 81	J	E－2	P i t 1	山茶椀片	4×4	9.3	8.7	2.4＋2.1＋2.4＋2.4	2.1＋2.25＋2.1＋2.25	N 4° E	東西棟	総柱建物
S B 106	N	A－2	P i t 1		3×2	5.85	4.2	1.95＋1.95＋1.95	2.1＋2.1	N 8° E	東西棟	総柱建物
	N	B－2	P i t 1									
	N	A－3	P i t 1									
	N	B－3	P i t 1	土師器片								
	N	B－4	P i t 1	土師器片								
	N	A－3	P i t 2									
	N	A－4	P i t 2	土師器鍋片 山茶椀（№ 19-21-22）								
	N	B－2	P i t 2	灰釉陶器片								
	N	B－3	P i t 2									
	N	B－4	P i t 2									
	N	B－3	P i t 3									
	N	B－3	P i t 4									
S B 107	N	A－5	P i t 1	土師器片	2×2	4.05	4.05	1.95＋2.1	1.95＋2.1	N 8° E		総柱建物
	N	B－5	P i t 2	土師器甕片								
	N	B－5	P i t 3	土師器片								
S A 108	N				3	6.3		2.1＋2.25＋1.95		N 2° E	東西棟	塀列
S B 119	N	C－7	P i t 1	黒色土器片 土師器片	3×2	5.7	4.2	1.95＋1.95＋1.8	2.1＋2.1	N 2° E	東西棟	側柱建物
	N	B－5	P i t 6	土師器片								
S B 128	M	K－19	P i t 1	土師器甕片	4×3	9.3	6.3	2.7＋2.1＋2.4＋2.1	1.95＋2.1＋2.25	N 9° W	東西棟	総柱建物 S K 127（南東隅土坑）
	M	K－20	P i t 1	山茶椀片								
	M	M－20	P i t 1	土師器片								
	M	M－21	P i t 1	土師器片								
	M	L－20	P i t 2	山茶椀 山皿片								
	M	L－20	P i t 3	山茶椀（№ 23・24）								
S B 129	M	M－20	P i t 2	土師器片	3×2	7.5	4.05	2.7＋2.4＋2.4	1.95＋2.1	N 9° E	東西棟	総柱建物 S K 126（北東隅土坑）
S B 130	M	H－25	P i t 1		3×2	6.15	4.2	1.95＋2.1＋2.1	2.1＋2.1	N 8° E	東西棟	総柱建物
	M	I－25	P i t 1	土師器杯（№25）								
	M	I－25	P i t 2	灰釉陶器片 土師器片								
	N	H－1	P i t 1	灰釉陶器片								
	N	I－1	P i t 1									
	N	H－1	P i t 2	土師器皿（№ 26）								
S B 131	M	F－21	P i t 1	土師器甕片	3×2	6.9	4.95	2.25＋2.4＋2.25	2.55＋2.4	N 8° E	南北棟	総柱建物 S K 122（南東隅土坑）
	M	F－22	P i t 1	土師器鍋（№ 27・28）								
	M	G－21	P i t 1									
	M	F－21	P i t 2									
	M	F－22	P i t 2									

第２表　掘立柱建物・柵一覧表

遺構番号	大地区	小地区	出土遺物	方向	幅（m）	長さ（m）	深さ（m）	時代
SD1	I・J	G－22～J－6	山茶椀・小皿・土師器（皿・鍋）・常滑（甕）・渥美（甕）	東西	1.1	38.9	0.31	鎌倉時代以降
SD20	J	M－2～M－3	山茶椀・土師器皿	東西	0.8	5.1	0.05	鎌倉時代以降
SD21	J	M－2～N－5	山茶椀（墨書含む）・小皿・黒色土器	東西	1.3	16.8	0.44	鎌倉時代以降
SD28	J	A－3～B－8	山茶椀（墨書含む）・小皿・常滑（甕）・渥美（甕）	東西	0.9	18.0	0.31	鎌倉時代以降
SD29	J	E－11～H－10	山茶椀・小皿・土師器（鍋）・常滑（甕）・渥美（甕）	南北	1.2	24.2	0.18	鎌倉時代以降
SD46	J	B－9	—	南北	0.5	1.8	0.05	不明
SD82	I	G－24～H－24	—	南北	0.3	4.4	0.08	不明
SD116	N	C－8～C－9	須恵器（杯身）・灰釉陶器（壺）	東西	0.5	3.3	0.07	奈良・平安時代
SD150	E	Y－14～Y－16	製塩土器・天目茶椀・山茶椀・陶器片	東西	1.0	9.7	0.44	鎌倉時代以降
SD153	E・I	C－20～H－17	—	南北	0.3	13.4	0.13	鎌倉時代以降
SD154	H・I	P－24～L－6	山茶椀	南北	0.5	34.0	0.17	鎌倉時代以降
SD155	I	P－3	山茶椀	南北	0.5	6.5	0.13	鎌倉時代以降
SD157	I	M－7～O－6	山茶椀・灰釉陶器・土師器	南北	1.2	12.0	0.34	不明
SD159	I	P－9～P－11	中世土師器	東西	1.0	4.0以上	0.1	不明
SD162	I	P－6～S－5～T－8	中世土師器片？	南北	2.5	14.0	0.21	不明
SD165	I	T－1～U－1	縄文土器片	南北	0.3	7.0	0.03	不明
SD166	H	S－22～T－21	土師器片	南北	1.0	7.0以上	0.13	不明
SD167	H	S－25～T－24	縄文土器・炭含む	南北	0.8	8.5	0.16	不明
SD171	I	V－5	縄文土器・炭含む	南北	0.9	3.5	0.52	不明
SD173	I	X－6	土師器片	南北	0.3	1.7	0.06	不明
SD176	I	X－6	製塩土器	東西	0.5	5.0	0.12	不明
SD191	I	L－20～M－14	土師器片	東西	0.7	25.0	0.13	鎌倉時代以降
SD203	I	U－16～V－16	陶器瓶類小片	南北	1.1	10.8	0.08	鎌倉時代以降
SD209	I	N－12～S－10	灰釉陶器片	南北	1.8	11.0	0.19	不明

第３表　溝一覧表

遺構	大地区	小地区	出土遺物	時代	平面形態	規模			主軸	木棺
						上面（m）	下面（m）	深さ（m）		
SX60	J	A－12	山茶椀	13世紀前後	隅丸長方形	2.2×1.48	2.04×1.32	0.15	東西	痕跡無し
SX76	I	J－24	山茶椀・小皿・和鏡・鉄製品（和鉄・毛抜き・刀子）	13世紀前後	隅丸長方形	2.0×0.82	1.8×0.72	0.18～0.26	南北	痕跡無し
SX78	I	K－24	山茶椀・土師器皿	12世紀後半～13世紀前半	隅丸長方形	1.75×0.79	1.59×0.71	0.25	南北	痕跡無し
SX79	I	K－25	山茶椀・土師器皿	13世紀前半	隅丸長方形	1.65×0.86	1.52×0.76	0.1	南北	痕跡無し
SX80	J	I－1	ロクロ土師器椀	12世紀後半	隅丸長方形	1.6×0.74	1.46×0.54	0.3	南北	痕跡無し
SX110	M	C－24	山茶椀	13世紀前後	楕円形	1.8×0.5	1.54×0.25	0.25	南北	痕跡無し

第４表　土壙墓一覧表

遺構番号	大地区	小地区	出土遺物	時代	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
ＳＫ２	J	P−3	土師器皿	不明	円	1.1	1.0	0.17〜0.21	
ＳＫ３	J	Q−4	山茶椀	不明	円	0.9	0.85	0.08〜0.14	
ＳＫ４	J	P−3	—	不明	円	1.3	1.2	0.15〜0.22	
ＳＫ５	J	P−4	土師器皿・白磁片？	不明	円	0.9	0.8	0.15〜0.19	
ＳＫ６	J	P−5	山茶椀・土師器皿・須恵器壺	不明	楕円	1.8	1.3	0.18〜0.46	
ＳＫ７	J	P−5	—	縄文時代？	円	0.8	0.75	0.65〜0.67	
ＳＫ８	J	Q−6	—	縄文時代？	円	1.0	1.0	0.95〜1.02	
ＳＫ９	J	P−6	—	縄文時代？	円	1.1	0.9	0.83〜0.95	
ＳＫ10	J	O−6	山茶椀・土師器鍋	縄文時代？	円	1.8	1.7	0.9〜0.95	
ＳＫ11	J	M−6	—	縄文時代？	円	0.85	0.7	0.82〜0.92	
ＳＫ12	J	M−6	—	縄文時代	円	0.9	0.9	0.54〜0.58	土坑底部　φ0.3〜0.4m 深さ0.22m　円形小穴
ＳＫ13	J	M−5	—	縄文時代	円	1.2	1.0	0.64〜0.69	土坑底部　φ0.3m 深さ0.23m　円形の小穴
ＳＫ14	J	L−7	—	縄文時代？	円	1.4	1.3	0.86〜0.91	
ＳＫ15	J	J−7	山茶椀	縄文時代？	円	1.1	1.1	0.54〜0.62	
ＳＫ16	J	L−5	—	不明	円	0.6	0.6	0.1〜0.16	
ＳＫ17	J	L−4	—	不明	楕円	1.5	0.9	1.11〜1.12	風倒木？
ＳＫ18	J	L−3	—	不明	円	1.0	1.0	0.14〜0.22	風倒木？
ＳＫ19	J	P−5	山茶椀	不明	円	1.2	1.1	0.14〜0.25	
ＳＫ23	J	R−6	—	縄文時代？	楕円	1.5	0.9	0.70〜0.79	
ＳＫ24	J	N−7	—	縄文時代	楕円	1.2	0.8	0.93〜0.95	土坑底部　φ0.29m 深さ0.23m　円形の小穴
ＳＫ25	J	N−7	山茶椀・土師器鍋	不明	円	1.1	1.0	0.19〜0.26	
ＳＫ26	J	K−6	山茶椀・土師器皿	不明	—	—	—	—	平面図なし
ＳＫ27	J	N−5	—	不明	不定形	0.6	0.55	0.38〜0.45	焼土？
ＳＫ30	J	N−10	山茶椀・小皿	不明	円	1.2	1.2	0.15〜0.22	
ＳＫ31	J	O−9	—	不明	円	0.7	0.7	0.05〜0.1	
ＳＫ32	J	O−9	—	縄文時代？	円	1.2	1.0	0.87〜0.93	
ＳＫ33	J	P−8	—	不明	円	1.4	1.4	0.48〜0.51	
ＳＫ34	J	I−4	山茶椀・土師器皿・常滑甕	縄文時代？	円	1.4	1.1	0.59〜0.65	
ＳＫ36	J	L−10	小皿	不明	楕円	4.0	2.4	0.71〜0.82	
ＳＫ37	J	N−10	—	不明	楕円	2.8	1.6	0.88〜1.06	
ＳＫ38	J	J−5	—	縄文時代	円	1.0	1.0	1.14〜1.19	土坑底部　φ0.1m 深さ0.25m　円形の小穴
ＳＫ39	J	J−6	—	縄文時代？	円	0.95	0.9	0.71〜0.76	
ＳＫ40	J	J−9	—	縄文時代？	円	1.4	1.2	0.91〜0.94	
ＳＫ41	J	M−2	—	不明	円	1.1	0.8	0.37〜0.43	
ＳＫ42	J	B−13	山茶椀・小皿・常滑甕	縄文時代？	円	1.1	0.9	0.49〜0.50	
ＳＫ43	J	B−10	山茶椀・常滑甕・渥美甕？	不明	不定形	2.8	1.4	0.14〜0.17	
ＳＫ44	J	B−9	—	不明	円形	1.5	1.2	0.95〜1.00	
ＳＫ45	J	B−10	石	不明	楕円	1.0	0.6	0.32〜0.34	
ＳＫ47	J	B−14	山茶椀	不明	円形	0.6	0.6	0.07〜0.12	
ＳＫ48	J	D−8	—	不明	円形	0.4	0.3	0.28〜0.3	
ＳＫ49	J	D−8	—	不明	円形	0.9	0.8	0.11〜0.14	
ＳＫ50	J	D−8	縄文土器深鉢	縄文晩期	楕円	0.8	0.5	0.3	ＳＫ22・ＳＫ35と同一遺構 土器棺
ＳＫ51	J	E−8	—	不明	楕円	0.8	0.7	0.63〜0.69	
ＳＫ52	J	F−9	—	鎌倉時代以降	長方形	2.6以上	1.7	0.15〜0.20	ＳＢ63の 南東隅土坑
ＳＫ53	J	G−10	—	不明	楕円	1.0	0.5	0.30〜0.32	

第５表　土坑一覧表①

遺構番号	大地区	小地区	出土遺物	時代	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
SK54	J	F−9	—	不明	楕円	1.7	0.6	0.45〜0.50	
SK55	J	G−9	山茶椀・土師器羽釜・片口鉢	鎌倉時代以降	隅丸長方形	東西4.3m	南北3.4m	0.06〜0.15	SB63の南東隅土坑
SK56	J	G−9	山茶椀	鎌倉時代以降	隅丸長方形	東西4.3m	南北不明	0.03〜0.07	SB63の南東隅土坑
SK57	J	D−11	山茶椀・小皿・土師器鍋	不明	円	0.9	0.7	0.15〜0.16	
SK58	J	D−11	—	不明	楕円	0.9	0.8	0.25〜0.30	
SK59	J	D−12	—	不明	円	0.5	0.5	0.29〜0.33	
SK61	J	A−12	山茶椀・土師器鍋	不明	不定形	0.7	0.7	0.1	
SK62	J	E−11	—	不明	円	0.6	0.6	0.33〜0.38	
SK66	I・J	C−25〜C−1	—	不明	楕円	1.1	0.9	0.73〜0.77	
SK67	I	B−23	—	不明	円	0.7	0.65	0.28〜0.29	
SK68	I	D−24	—	不明	円	0.95	0.9	0.40〜0.42	
SK69	I	G−24	山茶椀・土師器皿・甕・鍋	不明	円	1.2	1.1	0.37〜0.38	
SK70	I	F−25	—	不明	円	1.4	1.3	0.69〜0.76	
SK71	J	F−1〜G−2	—	不明	楕円	1.7	1.4	1.46〜1.52	
SK72	J	G−1	—	不明	楕円	1.6	1.1	0.72〜0.76	
SK73	J	I−3	—	不明	円	1.1	1.0	0.89〜0.91	
SK74	J	E−2	山茶椀	不明	楕円	3.8	1.4	0.08〜0.13	
SK75	J	H−1〜I−1	—	不明	円	1.4	1.4	0.70〜0.76	
SK77	I	K−24	—	不明	円形	1.3	0.9	0.44〜0.47	
SK83	I	O−25	山茶椀・土師器皿	不明	楕円	1.5	1.3	0.9〜0.14	
SK101	M	D−14	—	不明	楕円	0.9	0.5	0.15〜0.19	
SK102	M	D−14	—	不明	楕円	1.0	0.6	0.02〜0.08	
SK103	M	C−16	—	不明	楕円	1.1	0.7	0.13〜0.20	
SK104	M	C−15	—	不明	楕円	0.65	0.5	0.38	
SK105	N	A−6	土師器甕・土師器皿・須恵器甕	不明	円形	1.0	1.0	0.09〜0.14	
SK109	N	A−5	黒色土器・土師器甕	不明	円形	1.0	0.9	0.1	
SK111	N	C−2	土師器皿(ロクロ土師器)	不明	円形	1.0	0.9	0.32	
SK112	N	C−3	山茶椀・古式土師器	不明	円形	0.9	0.9	0.16〜0.19	
SK113	N	E−1	山茶椀片	不明	円形	0.65	0.6	0.22〜0.23	
SK114	N	B−5	黒色土器・須恵器甕・土師器皿	不明	円形	0.65	0.6	0.05〜03	
SK115	N	D−9	土師器甕	不明	円形	0.9	0.9	0.23〜1.25	
SK117	N	C−8	—	不明	楕円	1.8	0.8	0.35	
SK118	N	G−5	土師器皿・須恵器甕	不明	—	—	—	—	平面図なし
SK120	N	G−5	土師器甕	不明	楕円	1.0	0.5	0.2〜0.22	
SK121	N	G−5	古式土師器甕	不明	楕円	0.8	0.6	0.34〜0.37	
SK122	M	G−22	陶器片・山茶椀片	鎌倉時代以降	隅丸方形	2.0	2.0	0.04〜0.22	SB131の南東隅土坑
SK123	N	G−5	須恵器蓋杯・土師器甕	奈良・平安時代	円形	1.3	1.2	0.17〜0.24	
SK124	M	I−23	常滑甕底部	不明	楕円	0.7	0.4	0.52〜0.56	
SK125	M	I−25	土師器皿	不明	楕円	1.2	0.4	0.18〜0.22	
SK126	M	L−21	山茶椀・小皿・土師器皿	鎌倉時代以降	隅丸方形	3.4	1.8	0.05〜0.13	SB129の土坑?
SK127	M	L−21〜M−21	土師器・山茶椀	鎌倉時代以降	隅丸方形	3.7	3.0	0.02〜0.2	SB128の土坑?
SK151	I	B−15	山茶椀・炭混じり	不明	楕円	1.5	1.1	0.27	
SK156	I	M−3	縄文土器・中世土師器	不明	不定形	2.3	1.7	1.06	
SK158	I	M−8	縄文土器(馬見塚式)混入・炭混じり	不明	不定形	1.5	1.5	0.11	根撹乱による窪み
SF160	I	O−10	—	不明	不定形	0.9	0.65	0.33	被熱部分なし・焼土・炭多く含む

第6表　土坑一覧表②

遺構番号	大地区	小地区	出土遺物	時代	形状	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	備考
ＳＫ161	Ⅰ	Ｎ−10	山茶椀片	鎌倉時代以降	隅丸長方形	1.52〜1.55	0.62〜0.65	0.34〜0.35	蛇籠
ＳＫ163	Ⅰ	Ｒ−8	土師器鍋・皿・山茶椀	鎌倉時代以降	隅丸長方形	2.09〜2.10	0.79〜0.80	0.29〜0.30	蛇籠
ＳＫ164	Ⅰ	Ｒ−8	灰釉陶器もしくは、山茶椀	鎌倉時代以降	隅丸長方形	1.4	0.89〜0.90	0.4	蛇籠
ＳＫ168	Ⅱ	Ｔ−25	縄文土器片	不明	楕円	2.0	1.2	0.49	炭含む
ＳＫ169	Ⅱ	Ｖ−21	中世土師器羽釜	不明	長楕円（溝状）	3.5	1.0	0.22	
ＳＫ170	Ⅱ・Ⅰ	Ｕ−25	—	不明	長楕円（溝状）	2.0	0.5	0.13	
ＳＫ172	Ⅰ	Ｙ−5	土師器片・須恵器片	不明	方形	1.8	1.6	0.13	
ＳＫ174	Ⅰ	Ｗ−7	中世土師器鍋・黒色土器・中世陶器壺・灰釉陶器	奈良・平安時代	方形	2.2	2.1以上	0.43	炭含む
ＳＫ175	Ⅰ	Ｙ−4	古代土師器長胴甕？	奈良・平安時代	不定形	2.5	2.0	0.35	
ＳＫ193	Ⅰ	Ｌ−11	—	鎌倉時代以降	不整円形	2.0	1.8	0.08	蛇籠
ＳＫ194	Ⅰ	Ｍ−15	—	鎌倉時代以降	長楕円（溝状）	3.7	0.9	0.18	蛇籠
ＳＫ195	Ⅰ	Ｇ−12・Ｈ−12	—	鎌倉時代以降	楕円	2.0	1.3	0.02	蛇籠
ＳＫ196	Ｎ	Ａ−7	土師器片	奈良・平安時代	長楕円（溝状）	1.6	0.6	0.1	焼土含む
ＳＫ197	Ｎ	Ｃ−10	—	奈良・平安時代	楕円	2.2	0.9	0.35	焼土含む
ＳＫ198	Ｎ	Ｂ−10	土師器片	不明	不定形	1.7	1.5	0.25	
ＳＫ199	Ｎ	Ａ−6	土師器・灰釉陶器・中世陶器片	不明	不定形	1.2	0.7	0.2	
ＳＫ200	Ｎ	Ａ−6	製塩土器・土師器甕・炭化種子	奈良・平安時代	不定形	1.1	0.9	0.08	焼土・炭含む
ＳＫ201	Ⅰ	Ｙ−8・Ｙ−9	製塩土器・黒色土器・土師器・中世陶器	不明	楕円	2.0	1.2	0.31	
ＳＫ202	Ｎ	Ａ−10	製塩土器	奈良・平安時代	不定形	3.6	1.6	0.12	
ＳＫ205	Ⅰ	Ｗ−10〜Ｘ−10	土師器杯・長胴甕片・鉄滓・灰釉陶器浄瓶	奈良・平安時代	不定形	2.0	1.7	0.11	焼土・炭含む
ＳＫ206	Ⅰ	Ｘ−10〜Ｘ−11	曲刃鎌	奈良・平安時代	隅丸方形	2.30	0.9	0.1	
ＳＫ207	Ⅰ	Ｘ−11	土師器甕	不明	不定形	1.2	1.0	0.15	
ＳＫ208	Ⅰ	Ｙ−7	土師器甕・製塩土器	不明	隅丸方形	1.6	1.1	0.09	
ＳＫ210	Ⅰ	Ｏ−10	突帯文土器広口壺	弥生時代前期	楕円	1.35	1.05	0.5	土器棺
ＳＫ211	Ⅰ	Ｕ−17・Ｕ−18	—	鎌倉時代以降	不定形	2.5	2.0	0.14	蛇籠

第７表　土坑一覧表③

遺構	大地区	小地区	出土遺物	方向	幅（m）	長さ（m）	深さ（m）
ＮＲ152	Ｅ・Ⅰ	Ｙ−17〜Ａ−19	灰釉陶器・中世土器・土師器片	南北	8.0〜28.0	60.0	0.24〜0.46
	Ⅰ	Ｙ−13〜Ｘ−15	山茶椀・黒色土器・青磁				
ＮＲ190	Ⅰ	Ｆ−19〜Ｉ−19	山茶椀	東西	5.0	12.5	0.07
ＮＲ192	Ⅰ	Ｍ−14〜Ｌ−20	山茶椀・中世陶器	東西	2.2	23.5	0.2
ＮＲ212	Ⅰ	Ｇ−9〜Ｊ−11	—	東西	6.0	22.5	0.52

第８表　自然流路一覧表

V 遺 物

今回の発掘調査で遺物の総量は、コンテナバット50箱ある。遺物の概要は縄文土器及び9世紀代から13世紀後半にかけてのものがあり、12世紀後半から13世紀前半が主体を占める。

遺物の時期決定については、以下の編年を用いた。縄文土器（の晩期の土器）については、山田 猛氏[1]、須恵器は猿投窯[2]、土師器杯・甕については斎宮跡[3]、黒色土器については大川勝宏氏[4]、志摩式製塩土器は山本雅靖氏[5]、南伊勢系土師器鍋・土師器小皿については伊藤裕偉氏[6]、土師器羽釜については菅原正明氏[7]、東海系無釉陶器椀・小皿（山茶椀・山皿）については藤澤良祐氏[8]、貿易陶磁器については太宰府市教育委員会のもの[9]を使用した。

縄文～弥生時代

ＳＫ50（１）　１は縄文時代晩期の深鉢である。内湾気味の胴部から緩やかに外反する口縁部をもつ。外面調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデされ、胴部は巻貝条痕が横位ないし右下がりに、底部近くは縦位に施される。内面の底部付近と外面全体に煤が付着している。器形や調整の様相から、滋賀里Ⅲｂ式[10]に相当すると推定される。

ＳＫ210（２）　２は弥生時代前期の突帯文系広口壺である。すぼまった頸部から口縁部にかけて大きく外反し、胴部中位に最大径を持つ。胴部径に比べ底部径が小さく、自立困難な印象を持つ。口頸部に３条の素文突帯を廻らし、肩部には指圧による長大な刻目突帯を１条貼付する。外面調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデされ、体部は二枚貝による条痕が横位ないし右下がりに施され、底部に近くなるほど縦位になる。内面の胴部と外面全面には煤が付着している。

ＳＫ158（３）　３は縄文時代晩期の突帯文土器で、深鉢の口縁部片である。口縁部はやや外反し、口唇部は外側に小さく折り返し肥厚している。口縁直下に断面形がかまぼこ状の素文突帯が１条付く。口縁外面に煤が微量付着している。

ＳＤ167（４）　４は縄文時代晩期の突帯文土器で、深鉢の体部片である。外面調整は二枚貝による条痕が右下がりに認められる。

包含層出土（５～７）　５は縄文時代晩期の突帯文土器で、深鉢の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し、長い口縁部の下に長大で低い刻目突帯が１条付く。器面の調整は外面に斜条痕、内面に二枚貝による横位の条痕が施される。６は縄文時代後期後葉の注口土器片である。外面全体にミガキを施している。さらに幅約２㎜の沈線および刺突で文様を描き、その内側に巻貝による擬似縄文を施す。体部屈曲付近には、瘤状の突起があり、中央部を刺突により凹める。文様構成などから元住吉山Ⅰ式[11]と考えられる。７は縄文時代晩期の突帯文土器で、深鉢の口縁部片である。口縁部は外反し、口唇はわずかに折り返し肥厚している。突帯は低い位置に１条あり、指圧による長大な刻みが連続する。

Ｎ-Ｂ10　Ｐｌｔ３（８）　８はサヌカイト製の石鏃である。全長2.6㎝、凹基無茎で一方の逆刺が剥離折損するが、ほぼ完形である。（中村）

平安時代以降

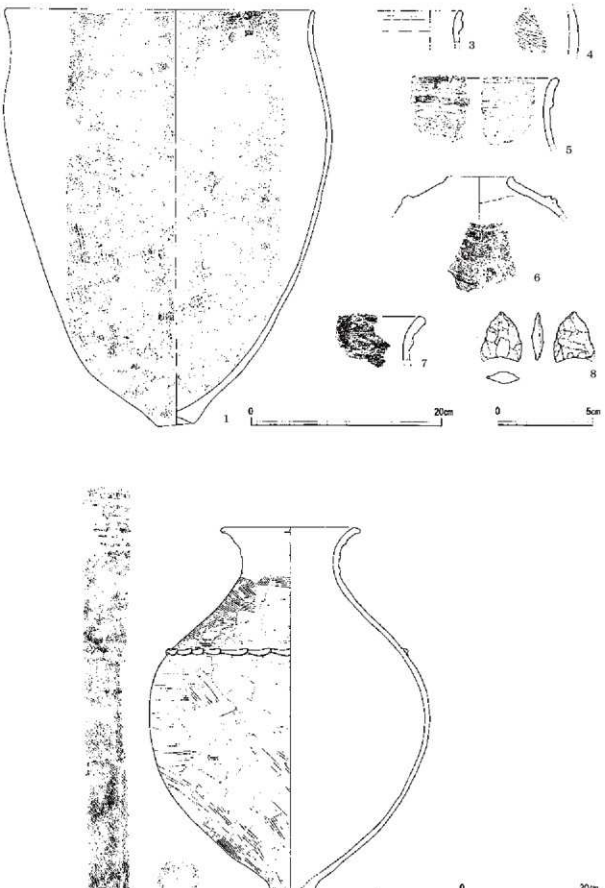
ＳＤ116（９）　９は須恵器杯身である。口縁部が外方にやや屈曲して、やや四角形状にまとまる。器形から９世紀代とみられる。

ＳＫ123（10）　10は須恵器杯蓋である。口縁端部は下方に垂直にまとまる。赤焼けのもので北勢地域によく出土する。器形から９世紀代とみられる。

ＳＫ200（11～17）　11～15は志摩式製塩土器である。11・12は口縁部から底部、14は底部、13・15は口縁部である。底部外面には籾殻痕跡を留める。山本編年でＣ類の９世紀第１四半期ごろとみられる。２次被熱を受けたとみられ、赤褐色ないしピンク色に変色している。16・17は土師器甕である。16は煤が外面口縁部から体部にかけて残る。共に９世紀代とみられる。

ＳＫ205（18）　18は土師器杯である。口縁部に油煙跡が残る。９世紀代とみられる。

ＳＢ63（19）　19は山茶椀である。藤澤編年（以下、省略）の尾張型第４型式の12世紀後半のものである。



第28図　ＳＫ50・ＳＫ158・ＳＫ167・ＳＫ210・包含層・Ｎ－Ｂ10Ｐｉｔ３出土遺物実測図（１：４，１：２，１：６）

ＳＢ106（20～22）　20～22は山茶椀である。21・22はほぼ完形で、尾張型第４型式の12世紀後半とみられる。22は墨書が体部外面底部よりにあり、「人」とも読めるが「上」の可能性も考えられる。

ＳＢ128（23・24）　23・24は山茶椀である。尾張型第４～５型式で12世紀後半から13世紀前後のものである。

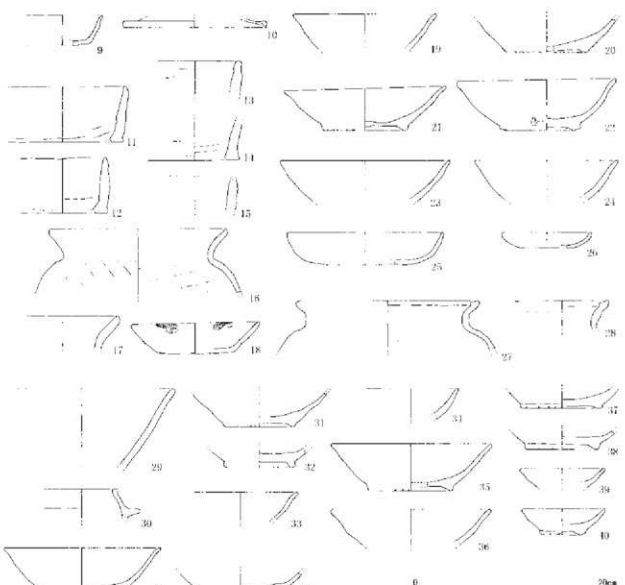
ＳＢ130（25・26）　25は土師器杯、26は土師器皿である。共に器形から11世紀末から12世紀末のものである。

ＳＢ131（27・28）　27・28は伊藤編年の南伊勢系土師器鍋の１ａ～１ｂ段階で13世紀前半から13世紀中葉のもので、口縁端部は折り返される。

ＳＫ55（29～32）　29は陶器鉢、30は土師器羽釜、31・32は山茶椀である。29は片口鉢で、12世紀後半とみられる。30は12世紀後半のものである。31・32は尾張型第５型式とみられ、13世紀前後のものである。

ＳＫ122（33）　33は山茶椀の口縁部である。尾張型第４型式の12世紀後半のものである。

ＳＫ126（34～40）　34はロクロ土師器椀の口縁部である。12世紀中葉から後葉にかけてのものとみられる。35～38は山茶椀で、39・40は陶器小皿で尾張型第４型式の12世紀後半のものである。



第29図　ＳＤ116・ＳＫ123・ＳＫ200・ＳＫ205・ＳＢ63・ＳＢ106・ＳＢ128・ＳＢ130・ＳＢ131・ＳＫ55・ＳＫ122・ＳＫ126・ＳＫ127出土遺物実測図（１：４）

ＳＫ127（41・42）　41・42は山茶椀である。尾張型第５型式の13世紀前後のものである。

ＳＤ１（43～120）　43は南伊勢系土師器鍋、44は土師器小皿、45～53は小皿、54～114は山茶椀、115～120は陶器甕である。土師器鍋は伊藤編年１ａ段階で13世紀前半のものとみられる。土師器小皿は13世紀前半であろう。山茶椀・小皿は尾張型第４型式～尾張型第６型式で12世紀後半から13世紀前半にかけてのもの。54～57は外面底部に墨書が施されている。54は「×」ないし「十」であろう。55は判読できない。56はひらがなの「め」であろうか。57は「×」ないし「十」であろうか。109は底部外面に墨書の痕跡を留めるが判読はできない。陶器甕は、常滑及び渥美産の甕の体部である。文様は115・117・118・120が縦線文、116が扇状文、119が菱形文である。

ＳＤ21（121～125）　121～123は山茶椀、124は小皿、125は黒色土器椀である。山茶椀・小皿は尾張型第６型式のもので13世紀前半のもの。123は底部外面に墨書の痕跡を留めるが判読はできない。黒色土器はＡ類で、９世紀後半のものであろう。

ＳＤ28（126～134）　126～134は山茶椀である。尾張型第５型式で13世紀前半のものである。134は墨書の痕跡を留めるが、判読はできない。

ＳＤ29（135～144）　135は南伊勢系土師器鍋である。伊藤編年１ｂ期で13世紀前半のもの。136～141は山茶椀、142・143は小皿である。山茶椀・小皿は尾張型第５～６型式にかけてのもので13世紀前半である。144は鉄製品の輪受とみられる。

ＳＤ154（145・146）　145・146は山茶椀で、尾張型第６型式の13世紀前半のものである。

ＳＤ155（147）　147は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀を前後するものである。

ＳＤ209（148）　148は灰釉陶器椀で、折戸53号窯式の10世紀後半のものである。

ＳＸ60（149～159）　149～159は山茶椀である。全て尾張型第５型式で13世紀を前後するものである。155は墨書「大」が底部外面に施されている。

ＳＸ76（160～174）　160～169は小皿、170は山茶椀、171は和鏡、172は和鉄、173は毛抜き、174は刀子である。山茶椀・小皿は尾張型第５型式で12世紀後葉～13世紀前葉のものである。（萩原）

和鏡は直径10.８cm、厚0.17cm、細縁鏡Ⅰ類に分類できる。鏡背を見ると、鈕は捩菊座、内区には鈕を挟んで対称に２羽の外向きの飛鳥を配し、伏せ籠が界圏を跨いで描かれる。外区には界圏にかけて萩とみられる草文を描写する。「鋼代双鳥鏡」[8]と呼ばれる構図となる。一方、鏡面には複数の織物痕跡があり、自然科学分析の結果、織物の染色および文様は検出できなかったものの、絹織物であることが明らかとなった。この鏡の錆の影響を受けて残った木質は、ヒノキ製であることがわかり、黒い被膜は漆塗であった可能性がある。鏡との銹着状況や材質から、この木質製品は鏡箱であったと思われる。この箱上に添えられた鉄製品は和鉄と毛抜きで、鏡と併せて化粧道具の副葬事例と考えられる。和鉄は出土時に不明鉄製品とされた棒状製品と接合し、残存長11.７cm、幅2.２cmまで復元できた。毛抜きは全長7.４cm、幅1.７cmでこの２点は鏡箱上蓋へ銹着する。また、鏡箱脇で出土した刀子は、刀身を欠損し、残存長8.５cmである。茎は柄の木質が良好に遺存する。（大川・萩原）

ＳＸ78（175～184）　175～184は土師器小皿である。伊藤編年の皿Ａ形態とみられ、底部から口縁部の立ち上がりをみるとⅠｂ～Ⅱａ期の12世紀後半から13世紀前半のものとみられる。

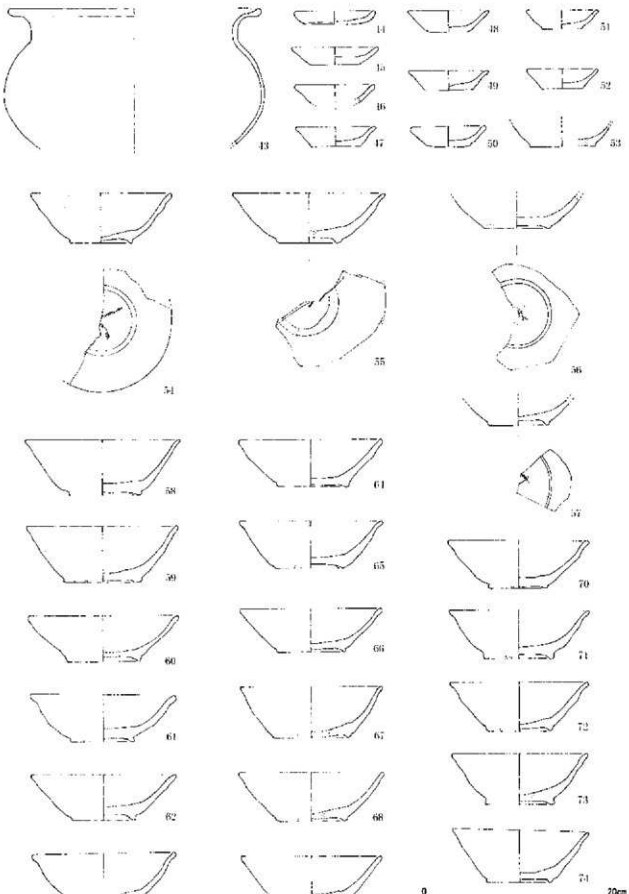
ＳＸ79（185～190）　185・186は山茶椀、187～190は土師器皿である。山茶椀は、尾張型第６型式で13世紀前半のものである。土師器小皿は、伊藤編年の皿Ａ形態とみられ、底部から口縁部の立ち上がりをみるとⅡａ期の13世紀前半とみられる。

ＳＸ80（191～192）　191・192はロクロ土師器椀である。２点とも未使用のものであろうか、磨滅の痕跡はない。器形から12世紀後半のものとみられる。

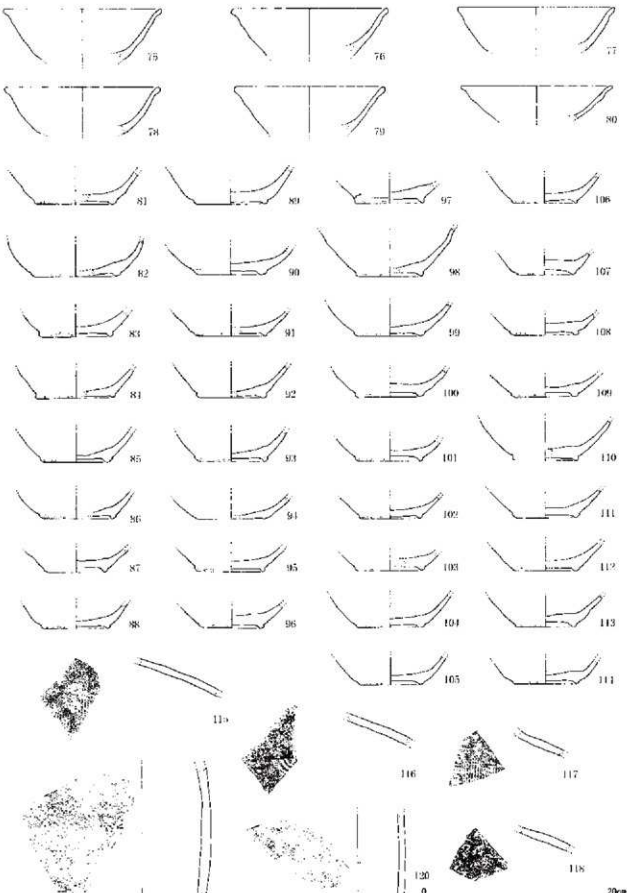
ＳＸ110（193）　193は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀を前後するものである。

ＳＫ５（194）　194は白磁椀である。太宰府分類の椀Ⅷ類で、12世紀中葉から後半にかけてのものである。

ＳＫ６（195～197）　195は土師器皿である。小片のためもう少し口径が小さくなる可能性もあろう。196・197は山茶椀である。尾張型第６型式の13世紀



第30図　ＳＤ１出土遺物実測図（１）（１：４）



第31図　ＳＤ１出土遺物実測図（２）（１：４）

前半とみられる。

SK10（198）　198は南伊勢系土師器鍋で、伊藤編年１ｂ段階の12世紀後半のもの。

SK25（199・200）　199は南伊勢系土師器鍋、200は山茶椀である。鍋は伊藤編年１ｂ段階で13世紀後半のものである。山茶椀は尾張型第５型式の13世紀を前後するものである。

SK30（201）　201は小皿で、尾張型第５～６型式の13世紀前半のものである。

SK34（202～208）　202は、土師器皿、203～206は山茶椀、207・208は陶器甕である。山茶椀は尾張型第５～６型式で13世紀前半のものである。甕は体部片で常滑・渥美産である。共に内面に当て具痕跡を留める。文様は扇状文である。

SK36（209）　209は小皿で、尾張型第６型式の13世紀前半のものである。

SK42（210～212）　210・211は小皿、212は山茶椀である。全て尾張型第６型式のもので13世紀前半のものである。

SK57（213）　213は小皿で、尾張型第６型式の13世紀前半のものである。

SK69（214～218）　214は南伊勢系土師器鍋で伊藤編年１ｂ段階の13世紀前半である。215～218は山茶椀で、尾張型第６型式の13世紀前半のものである。

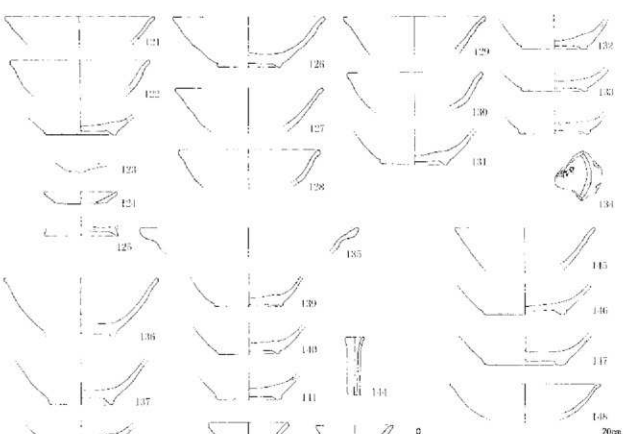
SK74（219）　219は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀を前後するものである。

SK83（220・221）　220・221は山茶椀で、尾張型第７型式の13世紀第３四半期のものである。220は墨書があり、「L」状であるが片仮名の「ワ」「ム」であろうか。

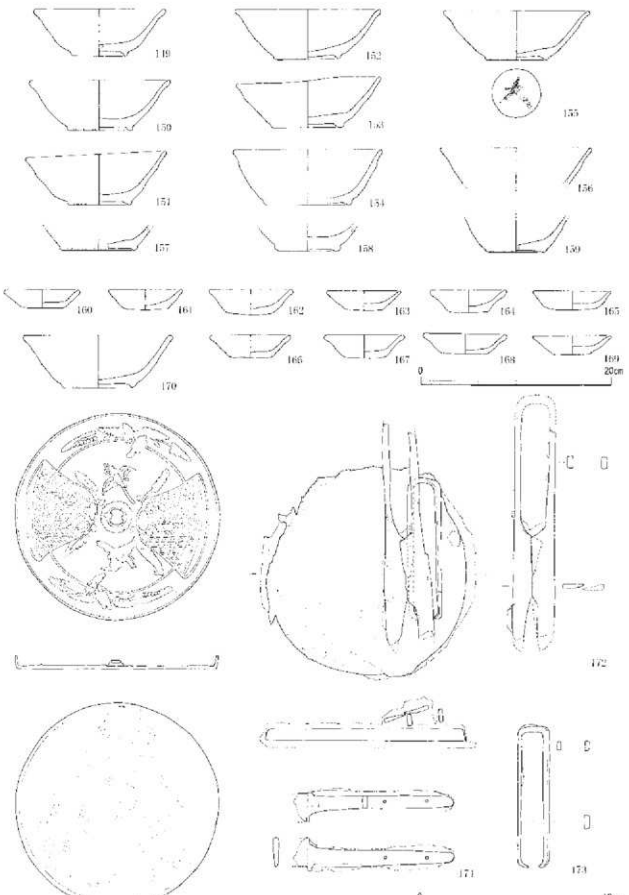
SK111（222）　222は、ロクロ土師器皿である。器形から12世紀後半のものであろう。

SK112（223）　223は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀を前後するものである。

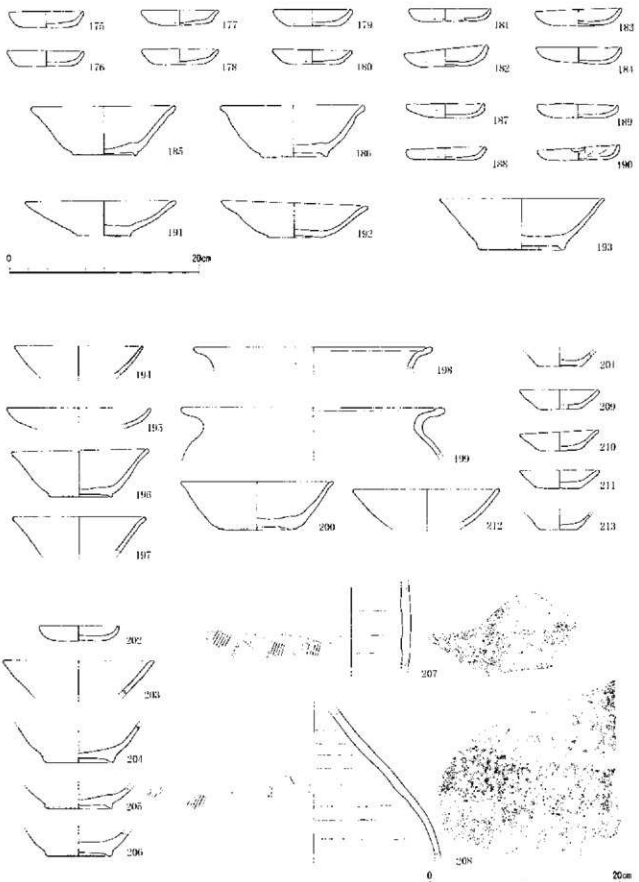
SK124（224）　224は陶器甕の底部である。常滑・渥美産の甕とみられる。



第32図　ＳＤ21・ＳＤ28・ＳＤ29・ＳＤ154・ＳＤ155・ＳＤ209出土遺物実測図（１：４）



第33図　ＳＸ60・ＳＸ76出土遺物実測図（１：４，１：２）



第34図　ＳＸ78・ＳＸ79・ＳＸ80・ＳＸ110・ＳＫ５・ＳＫ６・ＳＫ10・ＳＫ25・ＳＫ30・ＳＫ34・ＳＫ36・ＳＫ42・ＳＫ57出土遺物実測図（１：４）

ＳＫ151（225）　225は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀を前後するものである。

ＳＫ161（226）　226は山茶椀で、尾張型第６型式の13世紀前半のものである。

ＳＫ163（227～231）　227は土師器皿、228は南伊勢系土師器鍋、229～231は山茶椀である。鍋は伊藤編年１ｂ段階で13世紀後半のものである。山茶椀は尾張型第５～６型式の13世紀前後のものである。

ＳＫ174（232～238）　232～234は土師器甕である。232は、伊藤編年のＡ段階で12世紀後半のものである。233・234は小型の甕である。235は志摩式製塩土器である。山本編年のＣ類で、９世紀後半のものであろう。製塩土器の底部は籾殻痕跡を留める。236は須恵器甕で、口縁部が垂下している。口頸部には黄土が塗られ暗赤色に発色しており、猿投窯のものであろう。237は灰釉陶器椀で、折戸53号窯式の10世紀後半であろう。238は黒色土器椀で、Ａ類の９世紀後半のものである。

ＳＫ175（239・240）　239・240は土師器甕である。239は口縁端部がつまみあげられている。240は丸くまとまる。９世紀代とみられる。

ＮＲ152（241～262）　241・242は土師器甕で口縁部から12世紀代とみられる。243は土師器杯で器形から９世紀後半とみられる。244は土師器羽釜で、菅原編年の大和Ｈ型で13世紀代とみられる。245は土師器皿で底部から口縁部にかけて緩やかに屈曲し口縁端部はやや厚みをもって丸くまとまる。時期は器形から13世紀代とみられる。246・247はロクロ土師器椀で、器形から12世紀後半とみられる。248・249は灰釉陶器皿で高台部の形状から黒笹90号窯式から折戸53号窯式併行で、９～10世紀代であろう。250は黒色土器Ａ類で、内面が磨かれている。時期は、９世紀後半とみられる。251は青磁椀、太宰府分類の龍泉窯系でⅠ類、破片のため内面の文様は不確かな部分もあるが花文であろう。12世紀中頃～12世紀後半のものである。252は白磁皿、太宰府分類の皿Ⅶ類で内面の見込に沈線及び草花文が施されている。12世紀中頃～12世紀後半のものである。

253～260は山茶椀、261～262は小皿である。尾張型第４～６型式で12世紀後半から13世紀前半のものである。253の底部外面に墨書があり、「天」の可能性がある。255・259は内面に使用痕跡を残す。

Ｐｉｔ出土遺物　Ｐｉｔ出土の図版は、調査次数と調査区を一括してレイアウトを行っており、時系列に並べたものでないことを記しておく。

Ｊ－Ｄ７Ｐｉｔ１（263）　263は土師器杯である。口縁端部は丸くまとまりながら、緩く外反する。時期は器形から10世紀代のものであろう。

Ｊ－Ｆ12Ｐｉｔ７（264）　264は土師器皿である。底部がやや盛り上がるものである。時期は器形から13世紀前後のものである。

Ｊ－Ｅ13Ｐｉｔ２（265）　265はロクロ土師器皿である。時期は器形から13世紀前後のものである。

Ｊ－Ｂ12Ｐｉｔ１（266）　266は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀前後のものである。

Ｊ－Ｆ７Ｐｉｔ１（267）　267は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀前後のものである。

Ｎ－Ｃ６Ｐｉｔ１（268）　268は土師器甕である。口縁端部は上方に摘みあげられる。時期は器形から９世紀後半とみられる。

Ｎ－Ａ５Ｐｉｔ３（269）　269は土師器杯である。口縁端部が折り返されたようにまとまる。時期は器形から９世紀後半ごろとみられる。

Ｍ－Ｈ24Ｐｉｔ１（270）　270は土師器皿である。時期は器形から13世紀前後のものである。

Ｎ－Ａ４Ｐｉｔ３（271）　271は灰釉陶器三耳壺である。口縁部の一部から体部にかけて残る。耳が１方向残る。時期は９世紀後半のものであろう。

Ｊ－Ｂ12Ｐｉｔ５（272）　272は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀前後のものである。

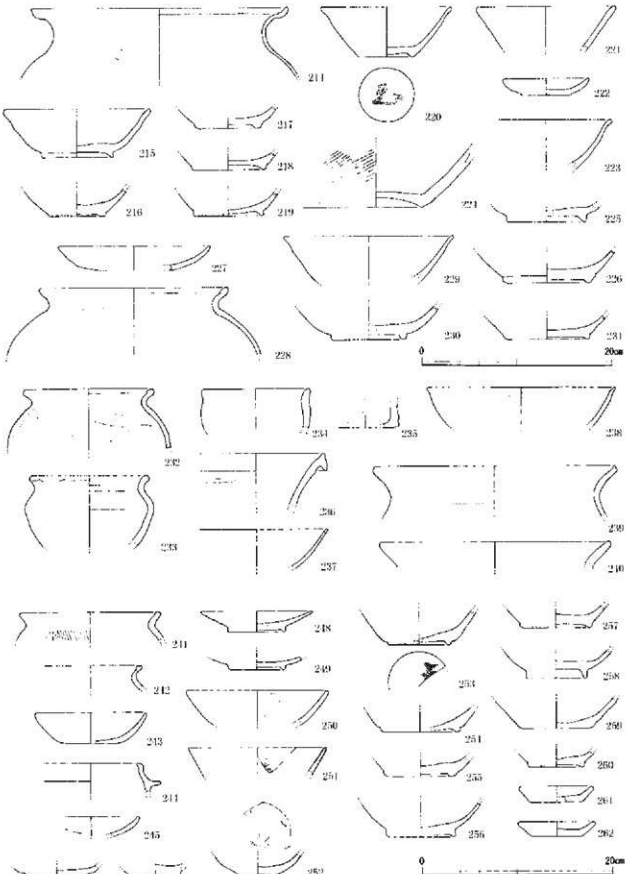
Ｎ－Ｆ５Ｐｉｔ１（273）　273は山茶椀で、尾張型第４型式の12世紀後半のものである。

Ｍ－Ｌ19Ｐｉｔ１（274）　274は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀前後のものである。内面底部に使用痕跡を残す。

Ｍ－Ｌ20Ｐｉｔ１（275）　275は山茶椀で、尾張型第５型式の13世紀前後のものである。

Ｍ－Ｌ21Ｐｉｔ２（276・277）　276は山茶椀、277は小皿である。尾張型第６型式の13世紀前半のものである。

Ｎ－Ａ６Ｐｉｔ５（278）　278は土師器甕である。口縁端部は内側に折り返されている。伊藤編年の



第35図　ＳＫ69・ＳＫ74・ＳＫ83・ＳＫ111・ＳＫ112・ＳＫ124・ＳＫ151・ＳＫ161・ＳＫ163・ＳＸ174・ＳＫ175・ＮＲ152出土遺物実測図（１：４）

A段階の12世紀後半のものである。

N－A6Pit4（279・280）　279は土師器甕で、伊藤編年A段階の12世紀後半のものである。280は志摩式製塩土器である。山本編年のC類で9世紀後半のものである。底部に籾殻痕跡を留める。

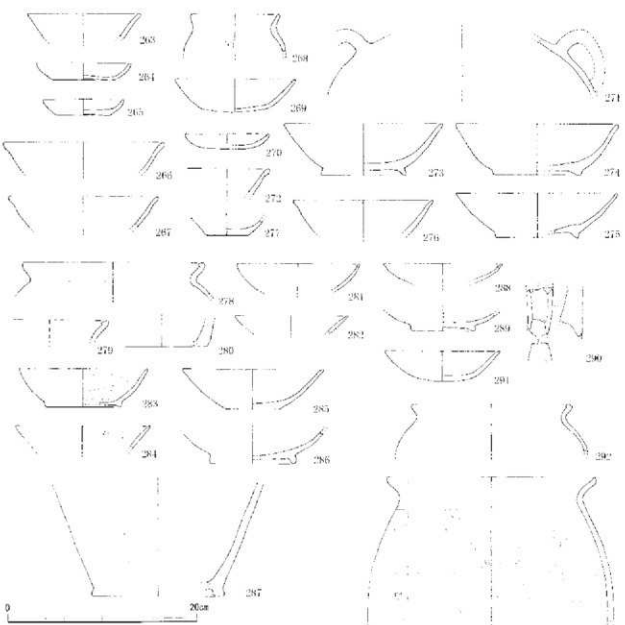
I－Y6Pit3（281）　281は土師器椀である。口縁部は内面に折り返される。ロクロ土師器の可能性もあるが10世紀代のものであろう。

N－A5Pit4（282）　282は土師器椀である。椀というより杯の可能性もある。ロクロ土師器の可能性もあろう。時期は10世紀代であろうか。

I－X6Pit8（283）　283は黒色土器椀のA類で、内面は磨かれている。時期は、10世紀前半のものである。

I－Y6Pit7（284）　284は黒色土器椀のA類で、内面は磨かれている。時期は、10世紀前半のものである。

I－X6Pit1（285）　285は灰釉陶器椀である。高台は剥落して欠損している。時期は、折戸53号窯式併行の10世紀前半のものである。



第36図　Pit出土遺物実測図（1：4）

Ⅰ－Ｘ６Ｐｉｔ６（286）　286は灰釉陶器椀である。黒笹90号窯式併行の９世紀後半のものである。

Ⅰ－Ｗ７Ｐｉｔ１（287）　287は灰釉陶器壺の底部片である。時期は、高台部から10世紀後半のものであろう。

Ｎ－Ａ５Ｐｉｔ５（288）　288は灰釉陶器皿である。黒笹90号窯式併行の９世紀後半のものである。

Ⅰ－Ｙ６Ｐｉｔ10（289）　289は灰釉陶器椀である。折戸53号窯式併行の10世紀前半のものである。

Ⅰ－Ｖ６Ｐｉｔ２（290）　290は砥石である。砥面は４面である。

Ⅰ－Ｋ10Ｐｉｔ１（291）　291は土師器杯である。時期は、器形から10世紀後半のものであろう。

Ⅰ－Ｙ７Ｐｉｔ３（292）　292は土師器甕である。口縁端部が内面に折り込まれかけており、伊藤編年のＡ段階の11世紀後半のものである。

Ⅰ－Ｘ11Ｐｉｔ（293）　293は土師器長胴甕である。口縁端部が上方に摘みあげられている。口縁部から９世紀後半から10世紀前半のものとみられる。

包含層（294～312）　294は土師器鍋で、清郷型の10世紀中葉のものである。295は土師器甕で、９世紀後半のものである。296・297は土師器杯で、９世紀後半から10世紀にかけてのものである。296には内面に放射状暗文が残る。298は土師器皿で、12世紀後半のものである。299は灰釉陶器浄瓶で、10世紀前半から後半にかけてのものである。ＳＫ205上面からの出土である。300・301は黒色土器椀で、共にＡ類の内外面共に磨かれている。時期は10世紀前半のものである。302～308は山茶椀、309・310は小皿で尾張型第４～６型式で12世紀後半から13世紀前半にかけてのものである。311は青磁椀で、太宰府分類のⅠ類の12世紀中頃～12世紀後半のものである。内面の底部に草花文が描かれる。312は砥石である。砥面は１面である。

表土（313～324）　313～323は山茶椀、324は小皿である。全て尾張型第４～６型式とみられる。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものとみられる。313は底部外面に墨書の痕跡を留める。２文字で１文字目が「八」であろうか。２文字目は判読できない。

鉄製品（325～330）　325・326は鉄鍋である。両方共に口縁部の一部分である。327は鎹である。328は曲刃鎌である。刃先は欠損している。329・330は釘である。　（萩原）

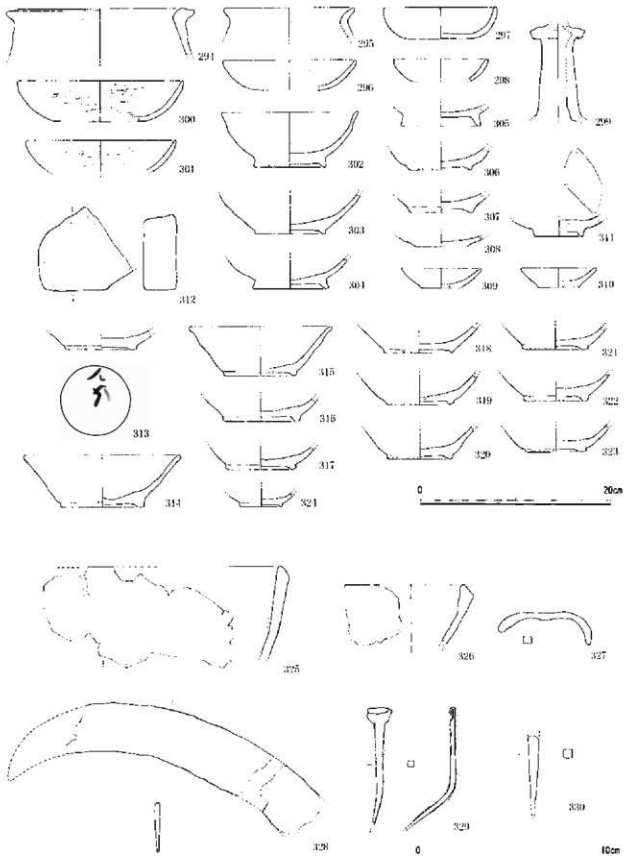
【註】

①山田猛『伊勢の突帯文土器』（2010年）
②愛知県教育委員会『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅲ』（1983年）
③斎宮歴史博物館「斎宮跡発掘調査報告Ⅰ」（2001年）
④大川勝宏「斎宮の黒色土器」『斎宮歴史博物館　紀要第２号』（斎宮歴史博物館　1993年）
⑤山本雅靖「志摩式製塩土器考」『考古学論集　第三集』（考古学を学ぶ会　1990年）
⑥三重県「三重県史　資料編考古２」（2008年）
⑦菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』（国立奈良文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会　1983年）
⑧藤澤良祐「山茶碗の編年研究について」『研究紀要　第３号』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）
⑨大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡■』（2000年）
⑩小林達雄編「縄覧縄文土器」（株式会社アム・プロモーション　2008年）
⑪別名「伏龍双鳥鏡」とも呼ばれる。

【参考文献】

・愛知県「愛知県史　別編　中世・近世　瀬戸系」（2007年）
・藤澤良祐「瀬戸窯跡群」（同成社　2005年）
・中世土器研究会編「概説　中世の土器・陶磁器」（真陽社　1995年）

鏡については、東京国立博物館井上洋一氏・京都国立博物館久保智康氏・國學院大學内川隆志氏からご教示を得た。



第37図　包含層・表土出土遺物実測図（1：4，1：2）

報告番号	実測番号	種類	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量 (cm)			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
						口径	器高	底径						
1	048-01	縄文土器	深鉢	J-D8	SK50	32.4	44.1	3.55	外：条痕状具のちナデ・ナデ 内：条痕状具のちナデ・ナデ	黒褐10YR3/2 にぶい黄褐 10YR5/3	粗 (~2mm砂)	良	3/12	内・外面スス付着
2	061-01	弥生土器	壺	I-Q11	SK210	20.7	59.8	6.5	外：ヨコナデ・ナデ・貝殻条痕 (3本/cm) 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	明褐 7.5YR5/6	やや粗 (~6mm砂)	良	5/12	貼付突帯
3	049-06	縄文土器	深鉢	I-M8	SK158	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	粗 (~1mm砂)	良	口縁部小片	
4	049-04	縄文土器	深鉢	H-T25	SD167	—	—	—	外：条痕文 内：ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	粗 (~1mm砂)	良	体部片	
5	045-07	縄文土器	深鉢	西区	包含層	—	—	—	外：ヨコナデ・条痕・斜条痕 内：条痕(板状具？)	橙 5YR6/6	やや粗 (~5mm砂)	良	口縁部小片	石英・長石等(3mm)含
6	053-06	縄文土器	注口土器	I-U1	包含層	6.7	—	—	外：ナデ・ミガキ？ 内：ナデ	灰 5Y5/1	やや粗 (~3mm砂)	良	口縁部2/12	ミガキ後縄文様・沈線・浮文1個残
7	060-06	縄文土器	深鉢	I-P14	包含層	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙 7.5YR7/3	やや粗 (~3mm砂)	良	口縁部小片	貼付突帯
8	059-01	石製品	石鏃	N-B10	Pit3	—	—	—						全体に打製成形
9	028-07	須恵器	杯身	N-C8	SD116	—	(3.3)	—	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	灰黄褐 10YR4/2	密	良	口縁部小片	
10	037-06	須恵器	杯蓋	N-G5	SK123	15.1	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密 (~1mm砂)	良	口縁部1/12	
11	057-01	製塩土器		N-A6	SK200 Pit2	—	—	—	外：ユビオサエ・ナデ・籾殻痕 内：ユビオサエ・ナデ	にぶい橙 5YR6/4	粗 (~1mm砂)	良	口縁部 ~底部片	取り上げNo.7
12	057-03	製塩土器		N-A6	SK200	—	—	—	外：ユビオサエ・ナデ・籾殻痕 内：ユビオサエ・ナデ	にぶい橙 5YR7/4	粗 (~1mm砂)	良	口縁部 ~底部片	取り上げNo.6
13	057-04	製塩土器		N-A6	SK200	—	—	—	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	にぶい橙 5YR6/4	粗 (~1mm砂)	良	口縁部小片	
14	057-05	製塩土器		N-A6	SK200	—	—	—	外：ユビオサエ・ナデ・籾殻痕 内：ユビオサエ・ナデ	橙 5YR6/6	粗 (~1mm砂)	良	底部小片	取り上げNo.12
15	057-02	製塩土器		N-A6	SK200 西半	—	—	—	外：ユビオサエ・ナデ 内：ユビオサエ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	粗 (~1mm砂)	良	口縁部片	
16	057-06	土師器	甕	N-A6	SK200	18.6	—	—	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ ・ハケ (5本/cm) 内：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ ・ハケ(4本/cm)	にぶい黄褐 10YR5/3	やや密 (~2mm砂)	良	口縁部1/12	外面スス付着
17	057-07	土師器	甕	N-A6	SK200	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗 (~2mm砂)	良	口縁部小片	取り上げNo.2・外面スス付着
18	057-08	土師器	杯	I-X10	SK205	13.4	3.3	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ ・ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	密	良	全体1/2	取り上げNo.1・内外面スス付着・外面油煙痕
19	044-01	陶器	山茶椀	J-F8	SB63 Pit3	15.0	—	—	外：ロクロナデ・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 7.5Y8/1	密 (~2mm砂)	良	口縁部2/12	
20	028-08	陶器	山茶椀	N-A4	(SB106) Pit2	—	—	8.4	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	底部6/12	取り上げNo.9・内面使用による摩耗
21	029-02	陶器	山茶椀	N-A4	(SB106) Pit2	16.9	4.5	8.4	外：ロクロナデ・糸切り後工具ナデ・籾殻痕 内：ロクロナデ・摩耗・ナデ・重ね焼痕・自然釉	灰白 5Y7/1	密	良	全体9/10	取り上げNo.2
22	029-01	陶器	山茶椀	N-A4	(SB106) Pit2	16.7	5.4	7.1	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	やや密 (~1mm砂)	良	全体9/10	取り上げNo.12・13・外面墨書
23	043-04	陶器	山茶椀	M-L20	SB128 Pit3	17.8	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 2.5Y8/1	密 (~1mm砂)	良	口縁部2/12	
24	043-03	陶器	山茶椀	M-L20	SB128 Pit3	15.2	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y8/1	密 (~1mm砂)	良	口縁部1/12	
25	042-04	土師器	杯	M-125	SB130 Pit1	16.2	3.4	—	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	灰黄 2.5Y6/2	密	良	口縁部2/12	
26	044-03	土師器	皿	N-H1	SB130 Pit2	9.4	—	—	外：ヨコナデ・オサエ・ナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密 (~1mm砂)	良	口縁部4/12	
27	042-02	土師器	鍋	M-F22	SB131 Pit1	18.7	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ヨコナデ	灰白 2.5Y8/2	やや密 (~1mm砂)	良	口縁部1/12	内面スス付着
28	041-06	土師器	鍋	M-F22	SB131 Pit1	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	密	良	口縁部小片	外面スス付着
29	033-06	陶器	鉢	J-G9	SK55	—	—	—	外：ロクロナデ・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	やや密	良	口縁部小片	取り上げNo.3
30	033-07	土師器	羽釜	J-G9	SK55	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	浅黄 2.5Y7/3	密	良	口縁部小片	外面スス付着
31	033-04	陶器	山茶椀	J-G9	SK55	—	—	7.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	やや密	良	底部4/12	取り上げNo.2
32	033-05	陶器	山茶椀	J-G9	SK55	—	—	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密	良	底部完形	取り上げNo.1・底部内面摩耗・内面に墨？
33	037-05	陶器	山茶椀	M-G22	SK122	—	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/2	密	良	口縁部小片	
34	038-07	ロクロ土師器	椀	M-L21	SK126	—	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗 (~3mm砂)	やや不良	口縁部小片	

第９表　遺物観察表①

報告番号	実測番号	種別	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	現存	備考
						口径	器高	底径						
35	038-01	陶器	山茶椀	M-L21	SK126	16.7	5.0	8.8	外：ロクロナデ・ナデ・刷毛目 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密 （～2mm径）	良	4/12	取り上げNo.2・底部内面墨跡
36	038-02	陶器	山茶椀	M-L21	SK126	16.6	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密 （～1mm径）	良	口縁部3/12	
37	038-04	陶器	山茶椀	M-L21	SK126	—	—	8.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・刷毛目 内：ロクロナデ	灰白 2.5YR/2	やや密 （～3mm径）	良	底部完形	内・外面スス付着
38	038-05	陶器	山茶椀	M-L21	SK126	—	—	7.6	外：ロクロナデ・刷毛目 内：ロクロナデ	灰白 2.5YR/1	やや粗 （～3mm径）	良	底部11/12	内面スス付着
39	038-03	陶器	小皿	M-L21	SK126	8.8	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5YR/1	やや密 （～1mm径）	良	口縁部2/12	
40	038-06	陶器	山茶椀	M-N21	SK126	8.7	2.7	4.1	外：ロクロナデ・刷毛目 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	やや密 （～2mm径）	良	11/12	取り上げNo.1・外面スス付着
41	038-09	陶器	山茶椀	M-W21 ・22	SK127	16.5	5.1	8.1	外：ロクロナデ・砂粒痕 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密 （～3mm径）	良	2/12	底部内面墨跡
42	038-08	陶器	山茶椀	M-W21 ・22	SK127	—	—	7.9	外：ロクロナデ・刷毛痕 内：ロクロナデ	灰白 5YR8/1	やや密 （～2mm径）	良	底部1/12	底部内面墨跡
43	025-01	土師器	鍋	J-12	SD1	26.4	—	—	外：ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内：ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密	良	口縁部3/12	口縁部スス剥離・外面スス付着
44	007-07	土師器	小皿	J-12	SD1	8.6	1.5	—	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	灰白 10YR8/2	密	良	1/2 （中心部欠損）	
45	007-02	陶器	小皿	J-12	SD1	9.2	1.85	—	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 にぶい黄橙 10YR7/3	密 （～3mm径）	不良	1/12完形	
46	007-06	陶器	小皿	J-12	SD1	8.6	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	口縁部1/4	
47	003-01	陶器	小皿	J-11	SD1	8.4	2.1	5.3	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 7.5Y7/1	密 （1mm以下の白色粒）	良	口縁部7/12 底部12/12	
48	011-01	陶器	小皿	J-13	SD1	8.4	2.3	3.6	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・指圧痕	灰白 5YR7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	口縁部1/12 底部3/12	
49	017-01	陶器	小皿	J-15	SD1	8.2	2.1	5.1	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・器具によるナナデ	明褐灰 7.5YR7/2	密 （2mm以下の白色粒）	良	口縁部9/12 底部12/12	
50	007-01	陶器	小皿	J-12	SD1	8.0	2.2	—	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 にぶい黄橙 10YR7/3	密 （～1mm径）	良	口縁部1/2 底部完形	
51	013-04	陶器	小皿	J-14	SD1	7.6	2.0	—	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白5Y7/1 灰オリーブ 7.5Y6/2	密 （～2mm径）	良	口縁部1/6 底部1/3	
52	003-02	陶器	小皿	J-11	SD1	7.4	2.1	4.2	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	明褐灰 5YR7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	口縁部3/12 底部12/12	
53	001-03	陶器	小皿	I-H24	SD1	—	—	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	明褐灰 7.5YR7/1	密	良	底部2/12	
54	014-04	陶器	山茶椀	J-14	SD1	15.0	5.3	6.6	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	密 （～3mm径）	良	1/3	底部外面墨書
55	017-04	陶器	山茶椀	東区	SD1	16.2	5.2	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・刷毛痕 内：ロクロナデ・工具によるナナデ ・自然釉	明褐灰 7.5YR7/1	密 （～2mm径）	良	口縁部1/12 高台2/12	底部墨書？
56	014-02	陶器	山茶椀	J-14	SD1	—	—	7.2	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 黒（スス） 2.5Y2/1	密 （～2mm径）	良	体部1/2 底部1/2	底部外面墨書
57	006-06	陶器	山茶椀	J-12	SD1	—	—	6.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・刷毛痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 にぶい黄橙 10YR7/3	密 （～1mm径）	良	底部1/4	底部墨書
58	006-04	陶器	山茶椀	J-12	SD1	16.4	5.9	4.2	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 体部に工具で突いたような痕 内：ロクロナデ・赤彩有り	灰黄2.5Y7/2 にぶい黄橙 10YR7/3	密 （～1mm径）	良	口縁部・体部1/2 底部完形	
59	014-01	陶器	山茶椀	J-14	SD1	16.0	6.0	8.2	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 ・刷毛痕 内：ロクロナデ・指圧痕？	灰白5Y7/2 黒（一部N2/）	密 （～2mm径）	良	口縁部1/3 底部1/2	
60	006-03	陶器	山茶椀	J-12	SD1	16.0	4.8	8.0	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密 （～2mm径）	良	1/4	
61	006-02	陶器	山茶椀	J-11	SD1	15.4	5.1	6.8	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 ・刷毛痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 （～3mm径）	良	口縁部・体部1/2 底部完形	
62	013-03	陶器	山茶椀	J-13	SD1	15.4	4.8	6.7	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰 5Y6/1	密 （～2mm径）	良	口縁部1/14 底部完形	
63	015-01	陶器	山茶椀	J-14	SD1	15.3	5.4	7.0	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 黒褐2.5Y3/1	密 （～2mm径）	良	口縁部1/2 底部完形	
64	013-01	陶器	山茶椀	J-14	SD1	15.2	5.1	7.6	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 にぶい黄橙 10YR7/3	密	良	口縁部3/12 底部完形	
65	008-02	陶器	山茶椀	J-13	SD1	15.2	5.0	6.8	外：ロクロナデ・工具？によるナデ ・糸切り痕・刷毛痕 内：ロクロナデ・工具によるナナデ	明褐灰 5YR7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	口縁部1/12 高台6/12	
66	002-01	陶器	山茶椀	I-H25	SD1	15.0	4.7	7.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・刷毛痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	口縁部2/12 高台12/12	
67	005-02	陶器	山茶椀	I-H24	SD1	15.0	5.4	8.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・刷毛痕 内：ロクロナデ	明褐灰 5YR7/1	密 （3mm以下の白色粒）	良	口縁部4/12 高台1/12	
68	010-04	陶器	山茶椀	J-13	SD1	15.0	5.2	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・刷毛痕 内：ロクロナデ	明褐色 5YR7/1	密 （4mm以下の砂）	良	口縁部2/12 高台4/12	

第10表　遺物観察表②

報告番号	実測番号	種別	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
						口径	器高	底径						
69	001-01	陶器	山茶椀	I-H25	SD1	15.0	5.1	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・中央部に圧痕	灰白 10YR7/1	密 （～3mm程）	良	口縁部1/12 底部8/12	
70	006-01	陶器	山茶椀	J-12	SD1	15.0	5.1	6.2	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 2.5Y7/1	密 （～3mm程）	良	口縁部1/12 ほぼ完形	
71	008-01	陶器	山茶椀	J-12	SD1	14.8	5.0	7.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・中央部に指圧痕	灰白 7.5Y7/1	密 （5mm以下の小石・砂）	良	口縁部3/12 高台6/12	
72	002-02	陶器	山茶椀	I-H25	SD1	14.6	5.2	6.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・指圧痕	灰白 2.5Y7/1	密 （～3mm程）	良	口縁部2/12 高台12/12	
73	013-06	陶器	山茶椀	J-14	SD1	14.5	5.4	7.5	外：ロクロナデ・ヨコナデ 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 2.5Y7/1	密 （～2mm程）	良	1/2	
74	005-01	陶器	山茶椀	I-H24	SD1	14.2	5.8	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	口縁部1/12 高台12/12	外面スス付着
75	014-03	陶器	山茶椀	J-14	SD1	16.6	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 黒（ス） 2.5Y2/1	密 （～3mm程）	やや不良	口縁部1/11	
76	013-07	陶器	山茶椀	J-14	SD1	16.6	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 （～1mm程）	良	口縁部1/9	
77	007-03	陶器	山茶椀	J-12	SD1	16.6	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 2.5Y7/1	密 （～5mm程）	良	口縁部1/6	
78	013-02	陶器	山茶椀	J-14	SD1	16.4	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 に近い黄橙 10YR7/3	密 （～2mm程）	良	口縁部1/4	
79	013-05	陶器	山茶椀	J-14	SD1	16.0	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	口縁部1/7	
80	006-05	陶器	山茶椀	J-12	SD1	16.0	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 に近い黄橙 10YR7/3	密 （～1mm程）	良	口縁部1/7	
81	007-06	陶器	山茶椀	J-11	SD1	－	－	8.6	外：ロクロナデ・ヨコナデ・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや粗 （～2mm程）	良	底部1/3	
82	004-01	陶器	山茶椀	I-H24	SD1	－	－	8.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・使用痕？	明褐灰 5YR7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	底部4/12	
83	004-03	陶器	山茶椀	J-11	SD1	－	－	8.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・中央部に指圧痕	明褐灰 5YR7/1	密 （5mm以下の小石・砂）	良	底部12/12	
84	019-02	陶器	山茶椀	J-14	SD1	－	－	8.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・工具によるナデ・指圧痕	灰白 5Y7/1	密 （5mm以下の砂）	良	底部3/12	
85	007-04	陶器	山茶椀	J-12	SD1	－	－	7.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 に近い黄橙 10YR7/3	やや粗 （～3mm程）	良	底部1/3	
86	009-03	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	7.2	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	明褐灰 7.5YR7/1	密 （3mm以下の砂）	良	底部6/12	
87	009-04	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	7.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	明褐灰 7.5YR7/1	密 （3mm以下の砂）	良	底部12/12	
88	011-02	陶器	山茶椀	J-12	SD1	－	－	7.1	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5YR7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	高台7/12	
89	018-01	陶器	山茶椀	東区	SD1	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：工具によるナデ	灰白 10YR7/1	密 （4mm以下の白色粒）	良	高台7/12	内面に墨痕・転用硯？
90	009-01	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 （5mm以下の砂）	良	底部12/12	
91	016-02	陶器	山茶椀	J-15	SD1	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	底部6/12	
92	011-03	陶器	山茶椀	J-12	SD1	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・工具によるナデ	灰白 5YR7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	高台6/12	
93	009-02	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・指圧痕？	明褐灰 5YR7/1	密 （3mm以下の砂）	良	底部12/12	
94	004-04	陶器	山茶椀	I-H24	SD1	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・自然釉	明褐灰 7.5YR7/1	密 （3mm以下の白色粒）	良	底部4/12	
95	016-04	陶器	山茶椀	J-15	SD1	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	底部12/12	内面スス付着
96	010-02	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	6.9	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・指圧痕？	明褐色 5YR7/1	密 （3mm以下の砂）	良	底部6/12	
97	003-04	陶器	山茶椀	I-H24	SD1	－	－	6.9	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・指による様き取り痕	灰白 5Y7/1	密 （7mm以下の小石・砂）	良	底部5/12	
98	010-03	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	6.8	外：ロクロナデ・工具によるナデ？・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・自然釉	明褐色 5YR7/1	密 （7mm以下の小石・砂）	良	底部3/12	内面スス付着
99	017-02	陶器	山茶椀	J-15	SD1	－	－	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・工具によるナデ	灰白 5Y7/1	密 （3mm以下の白色粒）	良	底部6/12	
100	018-02	陶器	山茶椀	東区	SD1	－	－	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・砂痕 内：工具によるナデ・自然釉	灰白 10YR7/1	密 （2mm以下の白色粒）	良	高台12/12	
101	010-01	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・中央部に指圧痕？ ・自然釉	明褐灰 5YR7/1	密 （3mm以下の砂）	良	底部7/12	
102	017-03	陶器	山茶椀	東区	SD1	－	－	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・工具によるナデ	灰白 10YR7/1	密 （3mm以下の白色粒）	良	底部12/12	

第11表　遺物観察表③

報告番号	実測番号	種類	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）口径	器高	底径	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
103	019-01	陶器	山茶椀	J-14	SD1	－	－	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	密 (3mm以下の白色粒)	良	底部5/12	
104	019-03	陶器	山茶椀	J-14	SD1	－	－	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕・自然釉 内：ロクロナデ・工具によるナナデ	灰白 5Y7/1	密 (7mm以下の白色粒)	良	底部3/12	
105	012-01	陶器	山茶椀	J-12	SD1	－	－	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・工具によるナナデ・自然釉	灰白 5YR7/1	密 (7mm以下の小石・砂)	良	高台12/12	
106	012-02	陶器	山茶椀	J-12	SD1	－	－	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：工具によるナナデ・指圧痕？	明黄灰 5YR7/1	密 (6mm以下の白色粒)	良	高台12/12	外面スス付着
107	016-01	陶器	山茶椀	J-14	SD1	－	－	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 (6mm以下の白色粒)	良	底部12/12	
108	011-04	陶器	山茶椀	J-13	SD1	－	－	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：工具によるナナデ	灰白 5YR7/1	密 (3mm以下の白色粒)	良	高台12/12	
109	016-03	陶器	山茶椀	J-15	SD1	－	－	6.5	外：ロクロナデ・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 (3mm以下の白色粒)	良	底部12/12	底部墨書？
110	019-04	陶器	山茶椀	J-14	SD1	－	－	6.4	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・工具によるナナデ	灰白 5Y7/1	密 (3mm以下の砂)	良	底部5/12	
111	004-02	陶器	山茶椀	J-11	SD1	－	－	6.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・中央部に使用痕？	明赤灰 2.5YR7/1	密 (7mm以下の小石・砂)	良	底部12/12	
112	001-02	陶器	山茶椀	I-H23	SD1	－	－	6.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 10YR7/1	密	良	底部9/12	
113	003-03	陶器	山茶椀	I-H25	SD1	－	－	6.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・指圧痕	灰白 7.5Y7/1	密 (2mm以下の白色粒)	良	底部12/12	
114	007-05	陶器	山茶椀	J-11	SD1	－	－	6.2	外：ロクロナデ・ヨコナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰黄2.5Y7/2 黒（スス） 2.5Y2/1	密 (～5mm砂)	良	底部1/3	外面一部スス付着
115	020-04	陶器	甕	J-13	SD1	－	－	－		表：にぶい黄橙 10YR6/3 裏：灰オリーブ 5Y6/2	密	良	破片	
116	020-03	陶器	甕	I-H24	SD1	－	－	－		表：灰オリーブ 7.5Y6/2 裏：灰白10Y7/2	密	良	破片	
117	020-02	陶器	甕	J-12	SD1	－	－	－		表：にぶい黄橙 10YR6/3 裏：灰オリーブ 5Y6/2	密	良	破片	
118	020-01	陶器	甕	I-H23	SD1	－	－	－		表：灰オリーブ 7.5Y6/2 裏：灰白10Y7/2	密	良	破片	
119	027-01	陶器	甕	J-14	SD1	－	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰 5Y5/1	密	良	体部片	擬美系・押印文
120	027-02	陶器	甕	J-14	SD1	－	－	－	外：ロクロナデ 内：ユビオサエ後ロクロナデ	にぶい橙 7.5YR5/4	やや密	良	体部片	擬美系・押印文
121	028-02	陶器	山茶椀	J-W5	SD21	15.8	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰黄 2.5Y7/2	密	良	口縁部1/12	
122	023-02	陶器	山茶椀	J-W5	SD21	14.6	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	明褐灰 7.5YR7/2	密 (2mm以下の白色粒)	良	2/12	
123	028-01	陶器	山茶椀	J-W3	SD21	－	－	7.1	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密 (～5mm砂)	良	底部4/12	内面使用による摩耗・底部墨書
124	023-03	陶器	小皿	J-W3	SD21	4.0	－	－	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	明赤灰 2.5YR7/2	密	良	2/12	
125	023-05	黒色土器	椀	J-W2	SD21	－	－	8.0	外：ナデ・ヘラ状工具のあたり 内：ヘラミガキ？	外：浅黄 2.5Y8/3 内：黒7.5Y2/1	やや密	良	2/12	
126	028-03	陶器	山茶椀	東区	SD28	16.0	5.4	6.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	粗 (～7mm砂)	良	底部完形	底部内面摩耗
127	022-04	陶器	山茶椀	J-W8	SD28	16.0	－	－	外：ロクロナデ 内：工具によるナナデ	灰白 7.5Y7/1	密 (2mm以下の白色粒)	良	口縁部2/12	
128	022-05	陶器	山茶椀	J-W7	SD28	15.0	－	－	外：ロクロナデ・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 7.5YR8/1	密 (4mm以下の白色粒)	良	口縁部2/12	
129	023-01	陶器	山茶椀	J-A5	SD28	15.0	－	－	外：ロクロナデ・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	外：明褐灰 5YR7/1 内：灰オリーブ 5Y6/2	密 (2mm以下の白色粒)	良	口縁部2/12	
130	022-06	陶器	山茶椀	J-W8	SD28	14.2	－	－	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 7.5YR8/1	密 (2mm以下の白色粒)	良	口縁部2/12	
131	021-02	陶器	山茶椀	J-W6	SD28	－	－	7.3	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・工具によるナナデ	灰白 10YR7/1	密 (3mm以下の砂)	良	底部5/12	
132	021-03	陶器	山茶椀	J-A5	SD28	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・工具によるナナデ	灰白 7.5YR8/1	密 (3mm以下の白色粒)	良	底部4/12	
133	021-06	陶器	山茶椀	J-A4	SD28	－	－	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ・工具によるナナデ・指圧痕	明褐灰 7.5YR7/1	密 (2mm以下の砂)	良	底部2/12	
134	023-04	陶器	山茶椀	J-A5	SD28	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・静止痕 内：ロクロナデ	灰白 7.5YR8/2	密	良	2/12	底部墨書
135	024-02	土師器	鍋	J-B7	SD29	23.0	－	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：黒N2/1 内：黒褐 7.5YR3/1	やや密	良	1/12	
136	028-05	陶器	山茶椀	J-F11	SD29	16.5	(5.9)	－	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰 5Y6/1	やや密	良	口縁部3/12	内面使用による摩耗・外面スス付着

第12表　遺物観察表④

報告番号	実測番号	種別	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
						口径	器高	底径						
137	028−06	陶器	山茶椀	J−F11	SD29	−	−	6.3	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	密	良	底部6/12	内面使用による摩耗
138	022−01	陶器	山茶椀	J−B7	SD29	−	−	7.4	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ・工具によるサナデ	明赤灰 2.5YR7/2	密 (2mm以下の白色粒)	良	5/12	
139	028−04	陶器	山茶椀	J−F11	SD29	−	−	7.0	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	やや粗 (～1mm砂)	良	底部完形	内面使用による摩耗
140	021−04	陶器	山茶椀	J−B7	SD29	−	−	6.6	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ・工具によるサナデ・指圧痕・自然釉	灰白 7.5YR8/1	密 (2mm以下の白色粒)	良	3/12	
141	021−01	陶器	山茶椀	J−B7	SD29	−	−	6.4	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	明褐灰 5YR7/1	密 (2mm以下の白色粒)	良	底部12/12	内面に墨痕
142	022−02	陶器	小皿	J−F11	SD29	8.4	2.5	4.6	外：ロクロナデ・工具によるサナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/1	密 (2mm以下の白色粒)	良	口縁部6/12 底部6/12	
143	022−03	陶器	小皿	J−G11	SD29	8.2	2.1	4.2	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y8/1	密 (2mm以下の白色粒)	良	口縁部5/12 底部5/12	
145	049−01	陶器	山茶椀	I−M5	SD154	14.6	−	−	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや粗 (～2mm砂)	良	口縁部1/12	
146	049−02	陶器	山茶椀	I−M5	SD154	−	−	7.9	外：ロクロナデ・糸切り後ナデ・削整痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや粗 (～1mm長石)	良	底部3/12	底部内面摩耗
147	049−03	陶器	山茶椀	I−P3	SD155	−	−	7.4	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密 (～2mm砂)	良	底部5/12	底部内面摩耗・内面に墨？
148	058−02	灰釉陶器	椀	I−T10	SD299	15.6	−	−	外：ロクロナデ・ロクロケズリ・施釉削整 内：ロクロナデ・施釉刺離	灰黄 2.5Y6/2	やや密	良	口縁部2/12	
149	034−02	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	13.5	5.0	5.8	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや粗 (～5mm砂)	良	口縁部2/12	取り上げ№.1・底部内面摩耗・外面スス付着
150	034−05	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	14.6	5.3	6.4	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや粗 (～1mm砂)	良	全体2/3	取り上げ№.3・底部内面摩耗
151	036−05	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	14.7	5.4	6.4	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰黄 2.5Y7/2	密 (～2mm砂)	良	11/12	取り上げ№.1
152	034−04	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	15.2	5.3	−	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや粗 (～3mm砂)	良	全体9/10	取り上げ№.2・内面使用による摩耗
153	036−04	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	15.2	4.9	7.0	外：ロクロナデ・糸切り底・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密 (～4mm小石)	良	1/3ほぼ完形	取り上げ№.4
154	033−09	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	15.5	5.9	8.8	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	粗 (～2mm砂)	良	口縁部2/12	底部内面摩耗
155	034−06	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	15.2	5.2	−	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 (～2mm砂)	良	全体2/3	内面使用による摩耗・底部墨書「大」
156	036−01	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	15.8	−	−	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y8/2	密 (～1mm砂)	良	口縁部2/12	
157	034−03	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	−	−	7.6	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 (～1mm砂)	良	口縁部4/12	内面使用による摩耗
158	036−02	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	−	−	6.0	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 (～3mm砂)	良	底部3/12	底部内面摩耗
159	034−01	陶器	山茶椀	J−A12	SX60	−	−	5.9	外：ロクロナデ・糸切り底・削整痕 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	やや粗 (～2mm砂)	良	底部3/12	底部内面摩耗
160	039−01	陶器	小皿	J−J24	SX76	7.8	2.0	4.3	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密	良	完形	取り上げ№.1・内面摩耗
161	039−02	陶器	小皿	J−J24	SX76	7.6	2.1	4.6	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密 (1mm大砂)	良	完形	取り上げ№.2・口縁上か所打欠き小？
162	039−03	陶器	小皿	J−J24	SX76	8.6	2.7	4.8	外：ロクロナデ・糸切り底・撫スク痕3ヵ所有り 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密 (0.4cm～0.7cm大破石)	良	完形	取り上げ№.3・口縁上か所打欠き
163	039−04	陶器	小皿	J−J24	SX76	7.8	2.1	3.8	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・ナデ・一方向ナデ	外：灰黄2.5Y7/2 内：灰白～灰黄 2.5Y8/1～2.5Y7/2	密 (1mm大微小礫)	良	完形	取り上げ№.4
164	039−05	陶器	小皿	J−J24	SX76	8.0	2.4	4.4	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密 (0.1～0.15cm大微細礫)	良	完形	取り上げ№.5
165	039−06	陶器	小皿	J−J24	SX76	8.2	2.0	4.4	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	外：灰白5Y7/1 内：灰白7.5Y7/2	密 (1mm大微小礫)	良	完形	取り上げ№.6・内面全面に炭小ぶり
166	039−07	陶器	小皿	J−J24	SX76	8.3	2.4	4.4	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰白N7/	密 (0.5～1mm大砂)	良	完形	取り上げ№.7
167	039−08	陶器	小皿	J−J24	SX76	8.2	2.5	4.2	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白 2.5Y7/1	密 (1～2mm大砂)	良	完形	取り上げ№.8
168	039−09	陶器	小皿	J−J24	SX76	8.4	2.1	5.0	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白 2.5Y7/1	密 (0.5～1mm大微小礫)	良	完形	取り上げ№.9・内・外面一部炭小ぶり
169	039−10	陶器	小皿	J−J24	SX76	8.0	2.1	4.0	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白 5YR/1	密 (0.5～1mm大微小礫)	良	完形	取り上げ№.11・口縁上か所打欠き
170	039−11	陶器	山茶椀	J−J24	SX76	15.4	5.6	7.0	外：ロクロナデ・ナデ	外：灰白 2.5Y7/1～灰N6/ 内：灰黄2.5Y7/2	密 (0.5～1mm大微小礫)	良	完形	取り上げ№.10

第13表　遺物観察表⑤

報告番号	実測番号	種類	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）口径	器高	底径	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
175	040-01	土師器	皿	I-K24	SX78	7.7	1.7	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 (～1mm砂)	良	11/12	取り上げNo.1・口縁1か所打欠き
176	040-03	土師器	皿	I-K24	SX78	7.8	1.7	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密 (～5mm茶褐色粒)	良	11/12	取り上げNo.3・口縁1か所打欠き
177	040-02	土師器	皿	I-K24	SX78	7.9	1.6	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密 (～3mm砂)	良	ほぼ完形	取り上げNo.2・口縁1か所打欠き
178	040-07	土師器	皿	I-K24	SX78	8.0	1.6	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密 (～1mm砂)	良	ほぼ完形	取り上げNo.8
179	040-04	土師器	皿	I-K24	SX78	8.0	1.8	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・工具ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密 (～1mm砂)	良	ほぼ完形	取り上げNo.4・6・7・口縁1か所打欠き
180	040-05	土師器	皿	I-K24	SX78	8.1	1.6	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 (～1mm砂)	良	完形	取り上げNo.5
181	040-10	土師器	皿	I-K24	SX78	8.5	1.4	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 (～1mm砂)	良	口縁部2/12	取り上げNo.10
182	040-09	土師器	皿	I-K24	SX78	8.7	1.7	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密 (～2mm砂)	良	11/12	取り上げNo.11・口縁1か所打欠き
183	040-08	土師器	皿	I-K24	SX78	8.9	1.7	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密 (～1mm砂)	良	完形	取り上げNo.9
184	040-06	土師器	皿	I-K24	SX78	8.9	1.8	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 (～2mm砂)	良	11/12	取り上げNo.7・10・口縁1か所打欠き
185	040-15	陶器	山茶椀	I-K25	SX79	14.9	5.2	6.7	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・仕上げナデ	灰白 5Y8/2	やや粗 (～7mm砂)	良	完形	取り上げNo.5
186	040-16	陶器	山茶椀	I-K25	SX79	15.0	5.4	5.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	やや粗 (～4mm砂)	良	11/12	取り上げNo.6・口縁1か所打欠き
187	040-11	土師器	皿	I-K25	SX79	8.1	1.5	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 (～1mm砂)	良	完形	取り上げNo.1
188	040-12	土師器	皿	I-K25	SX79	8.3	1.3	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密 (～1mm砂)	良	完形	取り上げNo.2
189	040-13	土師器	皿	I-K25	SX79	8.4	1.4	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	良	完形	取り上げNo.3
190	040-14	土師器	皿	I-K25	SX79	8.5	1.3	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ・指圧痕 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ・工具痕	浅黄橙 10YR8/4	密	良	完形	取り上げNo.4
191	041-01	ロクロ土師器	椀	J-I1	SX80	14.4～15.5	3.6～4.2	5.8	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	橙 5YR7/6	密	良	完形	取り上げNo.1
192	041-02	ロクロ土師器	椀	J-I1	SX80	15.0	3.3～3.9	5.7	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	密	良	完形	取り上げNo.2
193	041-03	陶器	山茶椀	M-C24	SX110	17.1	5.4	9.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	完形	取り上げNo.1
194	030-01	白磁	椀	J-P4	SK5	13.5	−	−	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	素地：灰白 10Y8/1 釉：灰白 10Y7/1	密	良	口縁部1/2	
195	030-03	土師器	皿	J-P5	SK6	15.0	−	−	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	密	良	口縁部1/12	
196	030-05	陶器	山茶椀	J-P5	SK6	14.4	4.9	6.3	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・ナデ	灰白 5Y7/1	粗 (～7mm砂)	良	全体9/10	底部内面摩耗
197	030-02	陶器	山茶椀	J-P5	SK6	13.7	−	−	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	密	良	口縁部2/12	
198	030-04	土師器	鍋	J-06	SK10	24.8	−	−	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	密	良	口縁部1/12	
199	024-01	土師器	鍋	J-N7	SK25	27.6	−	−	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・工具ナデ一部ハケメ状(7本/1cm)	外：橙2.5YR7/6 内：にぶい橙 5YR7/4	やや密	良	2/12	
200	021-05	陶器	山茶椀	J-N7	SK25	16.2	5.1	8.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・工具による？ナデ	灰白 2.5Y7/1	密 (3mm以下の白色粒)	良	口縁部4/12 底部12/12	取り上げNo.2・外面スス付着・内面墨付着
201	030-06	陶器	小皿	J-N10	SK30	−	−	4.6	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 2.5Y7/1	密	良	底部完形	
202	032-04	土師器	皿	J-14	SK34	8.2	1.6	−	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 (～2mm砂)	良	全体1/4	
203	030-07	陶器	山茶椀	J-14	SK34	15.6	−	−	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	密	良	口縁部2/12	外面全面スス付着
204	032-02	陶器	山茶椀	J-14	SK34	−	−	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密 (～2mm砂)	良	底部完形	内面使用による摩耗
205	032-01	陶器	山茶椀	J-14	SK34	−	−	6.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	やや密 (～4mm砂)	良	底部完形	内面使用による摩耗
206	032-03	陶器	山茶椀	J-14	SK34	−	−	6.4	外：ロクロナデ・ナデ・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	やや粗 (～6mm砂)	良	底部7/12	
207	031-01	陶器	甕	J-14	SK34	−	−	−	外：ロクロナデ・自然釉 内：ナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	密	良	体部片	渥美系・押印文
208	031-02	陶器	甕	J-14	SK34	−	−	−	外：ロクロナデ・自然釉 内：ユビオサエ後ナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	やや密	良	体部片	渥美系・押印文

第14表　遺物観察表⑥

報告番号	実測番号	種別	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
						口径	器高	底径						
209	032-05	陶器	小皿	J-L10	SK36	8.0	2.1	4.1	外：ロクロナデ・糸切り底・自然釉 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密	良	全体1/4	
210	033-02	陶器	小皿	J-B13	SK42	8.1	2.0	4.2	外：ロクロナデ・ナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 （～1mm程）	良	全体4/5	底部内面摩耗
211	033-01	陶器	小皿	J-B13	SK42	8.2	2.0	4.6	外：ロクロナデ・ナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	口3/5完形	底部内面摩耗
212	033-03	陶器	山茶椀	J-B13	SK42	15.4	—	—	外：ロクロナデ・自然釉 内：ロクロナデ	灰白 2. 5Y7/1	密 （～2mm程）	良	口縁部1/12	外面スス付着
213	033-08	陶器	小皿	J-D11	SK57	—	—	—	外：ロクロナデ・ナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	黄灰 2. 5Y7/2	密	良	底部完形	底部内面摩耗・黒斑
214	035-01	土師器	鍋	I-G24	SK69	27.2	—	—	外：ロクロナデ・オサエ・ナデ 内：ナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8/4	密 （～1mm程）	良	口縁部2/12	外面スス付着
215	035-03	陶器	山茶椀	I-G24	SK69	15.2	5.1	7.4	外：ロクロナデ・糸切り底・灰釉底自然釉 内：ロクロナデ	灰白 10YR7/1	密 （～3mm程）	良	全体1/3	底部内面摩耗
216	035-05	陶器	山茶椀	I-G24	SK69	—	—	5.9	外：ロクロナデ・糸切り底・灰釉底 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 2. 5Y8/1	密 （～1mm程）	良	底部完形	重ね焼痕
217	035-04	陶器	山茶椀	I-G24	SK69	—	—	5.8	外：ロクロナデ・糸切り底・灰釉底 内：ロクロナデ	灰白 2. 5Y7/1	密 （～2mm程）	良	底部1/2	底部内面摩耗・外面スス付着
218	036-03	陶器	山茶椀	I-G24	SK69	—	—	7.4	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・自然釉	黄灰 2. 5Y7/1	密 （～2mm程）	良	底部5/12	
219	035-02	陶器	山茶椀	J-E2	SK74	—	—	7.2	外：ロクロナデ・糸切り底？・灰釉底 内：ロクロナデ	灰黄 2. 5Y7/2	密	良	底部3/12	内面 摩耗・外面スス付着
220	037-04	陶器	山茶椀	I-025	SK83	13.6	5.3	5.7	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白 2. 5Y8/1	粗 （～6mm程）	良	11/12	底部内面摩耗・底部外面墨書？
221	037-01	陶器	山茶椀	I-025	SK83	14.4	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 2. 5Y8/1	やや粗 （～3mm程）	良	口縁部4/12	内面スス付着
222	037-02	ロクロ土師器	皿	N-C2	SK111	8.9	(1.9)	5.0	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや粗 （～3mm程）	良	口縁部9/12	
223	037-03	陶器	山茶椀	N-C3	SK112	—	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密 （～2mm程）	良	口縁部小片	
224	037-07	陶器	甕	M-I23	SK124	—	—	—	外：タタキ・タタキ後ナデ・ケズリ・ナデ 内：ナデ・自然釉	黄灰 2. 5Y6/1	密	良	底部小片	越美系
225	049-05	陶器	山茶椀	I-B15	SK151	—	—	8.0	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	底部2/12	内面使用による摩耗
226	049-08	陶器	山茶椀	I-K10	SK161	—	—	8.6	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	密	良	底部6/12	底部内面摩耗
227	050-04	土師器	皿	I-R8	SK163	16.8	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	密	良	口縁部2/12	取り上げ№ 8・9・外面スス付着
228	050-03	土師器	鍋	I-R8	SK163	19.6	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ・工具ナデ	灰黄 2. 5Y7/2	やや粗 （～1mm程）	良	口縁部2/12	取り上げ№ 2・12・内・外面スス付着
229	050-01	陶器	山茶椀	I-R8	SK163	17.8	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	口縁部1/12	取り上げ№ 6
230	049-07	陶器	山茶椀	I-R8	SK163	—	—	7.8	外：ロクロナデ・糸切り底・灰釉底 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	密	良	底部2/12	
231	050-02	陶器	山茶椀	I-R8	SK163	—	—	8.5	外：ロクロナデ・糸切り底 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	やや密	良	底部10/12	取り上げ№ 4・5・7・10・底部内面摩耗
232	051-01	土師器	甕	I-W7	SK174	13.6	—	—	外：ヨコナデ・ハケメ（6本/cm）・ユビオサエ 内：ヨコナデ・ハケメ（7本/cm）・ケズリ（5本/cm）	浅黄橙 7. 5YR8/4	やや密 （～2mm程）	良	口縁部1/12	
233	050-08	土師器	甕	I-W7	SK174	12.0	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	褐灰 10YR4/1	密	良	口縁部7/12	
234	050-05	土師器	甕	I-W7	SK174	11.2	—	—	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 （～1mm程.石）	良	口縁部1/12	
235	050-07	製塩土器		I-W7	SK174	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ	橙 5YR6/6	粗 （～1mm程）	良	底部片	
236	051-03	須恵器	甕	I-W7	SK174	—	—	—	外：ロクロナデ・ユビオサエ後工具調整・自然釉 内：ロクロナデ	灰白 2. 5Y7/1	やや密 （～1mm程）	良	口縁部小片	内・外面黄土
237	051-02	灰釉陶器	椀	I-W7	SK174	—	—	—	外：ロクロナデ・灰釉つけがけ 内：ロクロナデ・灰釉つけがけ	灰白 2. 5Y8/2	やや密 （～1mm程）	良	口縁部小片	
238	050-06	黒色土器	椀	I-W7	SK174	19.8	—	—	外：ミガキ？剥離？ 内：ミガキ	灰黄褐 10YR5/2	密	良	口縁部1/12	
239	051-05	土師器	甕	I-Y4	SK175	25.2	—	—	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケメ（6本/cm） 内：ヨコナデ・ハケメ（7～8本/cm）	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 （～3mm程）	良	口縁部2/12	内・外面スス付着
240	051-04	土師器	甕	I-Y4	SK175	24.0	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙 7. 5YR7/4	やや粗 （～6mm程）	良	口縁部1/12	外面一部スス付着
241	055-03	土師器	甕	I-K17	NR152 黄灰粘砂	14.0	—	—	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7. 5YR8/4	密	良	口縁部4/12	
242	055-08	土師器	甕	I-F12	NR152 西岸位置	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密	良	口縁部小片	
243	056-05	土師器	杯	I-J13	NR152 褐灰砂	11.6	3.3	—	外：ユビオサエ後ナデ・ナデ 内：ヨコナデ	橙 7. 5YR6/6	密	良	3/12	

第15表　遺物観察表⑦

報告番号	実測番号	種類	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
						口径	器高	底径						
244	055-02	土師器	羽釜	I-I16	NR152 上面包含層	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・工具ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密	良	口縁部小片	
245	054-01	土師器	皿	I-K13	NR152 褐灰砂	—	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ 内：ヨコナデ・ナデ・ミガキ	橙 7.5YR6/6	密	良	口縁部小片	
246	054-05	ロクロ 土師器	椀	I-F14	NR152 灰白粗砂	—	—	5.6	外：ロクロナデ・ナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良	底部5/12	
247	055-05	ロクロ 土師器	椀	I-F15	NR152 黄白砂直上	—	—	5.1	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰黄褐 10YR5/2	密	良	底部完形	
248	055-01	灰釉陶器	皿	I-H17	NR152 上面包含層	11.6	2.2	6.0	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰黄 2.5Y7/2	密	良	3/12	施釉
249	054-08	灰釉陶器	皿	F区	NR152 29m付近	—	—	5.5	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	底部5/12	施釉ハケ塗り・底部墨書
250	056-02	黒色土器	椀	I-K13	NR152 褐灰砂	14.8	—	—	外：ヨコナデ？ 内：ヨコナデ後ミガキ	外：明褐 7.5YR5/6 内：暗灰N3/	密	良	口縁部1/12	外面摩耗
251	054-02	青磁	椀	I-K15	NR152 上面包含層	14.4	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	素地：灰白 10Y7/1 釉：明緑灰 7.5GY7/1	密	良	口縁部1/12	内面に施文
252	056-03	白磁	皿	I-J12	NR152	—	—	—	外：ロクロナデ・ロクロケズリ 内：ロクロナデ	素地：灰白 5Y8/1 釉：灰白5Y7/2	密	良	底部4/12	内面に施文
253	054-03	陶器	山茶椀	I-K17	NR152	—	—	—	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・ナデ・自然釉	灰白 5Y7/1	密 (～2mm砂)	良	底部4/12	底部墨書「天」
254	054-07	陶器	山茶椀	I-J15	NR152 灰褐砂	—	—	7.6	外：ロクロナデ・ナデ 内：ロクロナデ	灰白 7.5Y7/1	密	良	底部3/12	
255	055-06	陶器	山茶椀	I-H16	NR152 上面包含層	—	—	6.0	外：ロクロナデ・糸切り後ナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	底部完形	底部内面摩耗
256	055-04	陶器	山茶椀	I-F15	NR152 黄白砂直上	—	—	6.8	外：ロクロナデ・糸切り後ナデ 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y8/1	密	良	底部4/12	外面スス付着
257	054-06	陶器	山茶椀	I-G12	NR152 褐灰砂質土	—	—	6.9	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密	良	底部5/12	
258	054-04	陶器	山茶椀	I-H18	NR152 氾濫	—	—	6.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・重ね焼痕・自然釉	灰白 5Y7/1	密	良	底部完形	焼きぶくれ有り
259	056-04	陶器	山茶椀	I-J13	NR152 褐灰砂	—	—	—	外：ロクロナデ・糸切り後ナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	底部5/12	底部内面摩耗
260	055-07	陶器	山茶椀	I-G14	NR152 褐灰砂	—	—	5.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密 (～2mm砂)	良	底部10/12	
261	056-01	陶器	小皿	I-I14	NR152 褐灰砂	7.6	1.7	—	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 7.5Y7/1	密	良	2/12	
262	055-09	陶器	小皿	I-I14	NR152 褐灰砂	7.8	2.05	5.2	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 7.5Y7/1	密	良	4/12	
263	044-05	土師器	杯	J-D7	Pit1	12.0	—	—	外：ヨコナデ・オサエ・ナデ 内：ヨコナデ・オサエ・ナデ	橙 5YR6/6	密 (～1mm砂)	良	口縁部1/12	
264	044-04	土師器	皿	J-F12	Pit1	10.0	1.8	6.0	外：ヨコナデ・オサエ・ナデ 内：ヨコナデ・オサエ・ナデ	橙 7.5YR7/6	密 (～1mm砂)	良	全体1/2	
265	044-02	ロクロ 土師器	皿	J-E13	Pit2	8.6	1.65	5.6	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	密 (～7mm小石)	良	全体1/2	
266	043-06	陶器	山茶椀	J-B12	Pit1	17.0	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白2.5Y7/1 オリーブ灰 10Y6/2	密	良	口縁部1/12	
267	043-07	陶器	山茶椀	J-F7	Pit1	15.8	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/1	密 (～1mm砂)	良	口縁部2/12	
268	044-06	土師器	甕	N-C6	Pit1	9.2	—	—	外：ヨコナデ・縦ハケ(4本/cm) 内：ヨコナデ・工具ナデ	にぶい橙 5YR7/4	密	良	口縁部1/12	内・外面スス付着
269	041-07	土師器	杯	N-A5	Pit3	12.5	3.5	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ヨコナデ・工具痕	明赤褐 5YR5/6	密	良	全体3/5	取り上げNo.2・3・底部内面スス付着。灯明皿として使用
270	042-03	土師器	皿	M-H24	Pit1	8.7	1.6	—	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	密	良	口縁部5/12	
271	042-01	灰釉陶器	三耳壺	N-A4	Pit3	25.0	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	素地：灰黄 2.5Y6/2 釉：灰オリーブ 7.5Y6/2	密	良	体部片	
272	043-05	陶器	山茶椀	J-B12	Pit5	—	—	—	外：ロクロナデ・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y8/1	密 (～1mm砂)	良	口縁部小片	
273	043-02	陶器	山茶椀	N-F5	Pit1	16.6	5.5	8.8	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 10YR7/1	密 (～1mm砂)	良	全体1/3	底部内面摩耗
274	043-01	陶器	山茶椀	M-L19	Pit1	17.0	5.4	8.4	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 (～2mm砂)	良	全体1/3	底部内面摩耗
275	042-05	陶器	山茶椀	M-L20	Pit1	17.0	4.7	8.5	外：ロクロナデ・ナデ・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや密	良	口縁部1/12	底部内面摩耗
276	041-05	陶器	山茶椀	M-L21	Pit2	14.6	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	口縁部1/12	
277	041-04	陶器	小皿	M-L21	Pit2	—	—	4.5	外：ロクロナデ・糸切り後ナデ 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	やや密 (～2mm砂)	良	底部完形	底部内面摩耗

第16表　遺物観察表⑧

報告番号	実測番号	種別	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
						口径	器高	底径						
278	053-03	土師器	甕	N-M6	P115	19.1	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ後粗いハケ状工具（3本/cm） 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	灰白 10YR8/2	やや粗 （～1mm程）	良	口縁部1/12	外面スス付着
279	053-05	土師器	甕	N-M6	P114	—	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	灰白 10YR8/2	やや粗 （～1mm程）	良	口縁部小片	
280	053-04	製塩土器		N-M6	P114	—	—	—	外：ケズリ 内：ナデ	橙 2.5YR6/6	粗 （～3mm程）	良	底部小片	
281	052-08	土師器	椀	I-I6	P113	12.8	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ 内：ヨコナデ	橙 5YR6/6	やや密 （～1mm程）	良	口縁部1/12	
282	053-02	土師器	椀	N-M5	P114	11.8	—	—	外：ヨコナデ・剥離 内：ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや粗 （～1mm程）	良	口縁部1/12	
283	052-05	黒色土器	椀	I-I6	P118	13.5	4.1	8.0	外：ヨコナデ・ケズリ？・ナデ 内：ヨコナデ・ミガキ	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：黒 7.5YR1.7/1	やや粗 （～3mm程）	良	2/12	
284	052-06	黒色土器	椀	I-I6	P117	14.2	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ・ハケ後ミガキ	黒 7.5Y2/1	密	良	口縁部1/12	
285	052-03	灰釉陶器	椀	I-I6	P111	14.8	4.2	5.6	外：ロクロナデ・糸切り痕・釉つけがけ 内：ロクロナデ・釉つけがけ	浅黄橙 10YR8/3	密 （～1mm程）	良	1/12	外面スス付着
286	052-04	灰釉陶器	椀	I-I6	P116	—	—	8.7	外：ロクロナデ・糸切り痕・釉つけがけ 内：ロクロケズリ後ロクロナデ・釉つけがけ	灰白 5Y8/1	密	良	底部4/12	
287	052-01	灰釉陶器	皿	I-W7	P111	—	—	13.8	外：ロクロナデ・ロクロケズリ・自然釉 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/1	やや密 （～1mm程）	良	底部2/12	
288	053-01	灰釉陶器	皿	N-A5	P115	12.5	—	—	外：ロクロナデ・釉つけがけ 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密 （～1mm程）	良	口縁部2/12	
289	052-07	灰釉陶器	椀	I-I6	P110	—	—	6.4	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ・灰釉つけがけ	灰白 2.5Y8/2	やや密 （～3mm程）	良	底部7/12	
290	052-02	石製品	砥石	I-I6	P112	—	—	—						187.0g
291	058-04	土師器	杯	I-K10	P111 攪上	12.0	3.3	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ・ナデ・工具ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	粗 （～5mm程）	良	口縁部5/12	外面粘土痕
292	058-03	土師器	甕	I-Y7	P113	14.0	—	—	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ（5本/cm） 内：ヨコナデ・工具ナデ	にぶい褐 7.5YR6/3	密	良	口縁部2/12	外面スス付着
293	058-01	土師器	長胴甕	I-X11	Pit	21.8	—	—	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ（4本/cm） 内：ヨコナデ・ハケ（6本/cm）	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 （～3mm程）	良	口縁部1/12	内面スス付着
294	053-08	土師器	須恵鍋	I-W6	包含層	17.4	—	—	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	にぶい褐 7.5YR5/3	やや粗 （～3mm程）	良	口縁部1/12	外面スス付着
295	060-05	土師器	甕	I-X12	包含層	13.6	—	—	外：ヨコナデ・オサエ・ナデ 内：ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR7/3	密 （～2mm程）	良	口縁部1/12	
296	045-05	土師器	杯	西区	包含層	14.0	—	—	外：ヨコナデ・ケズリ？ 内：ヨコナデ・オサエ・ナデ	橙 7.5YR6/6	密 （～1mm程）	良	口縁部1/12	内面に婦文（放射状？）
297	058-05	土師器	杯	I-Y14	包含層	11.6	3.4	—	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	黒 5Y2/1	密	良	口縁部1/12	内・外面スス付着
298	045-04	土師器	皿	西区	包含層	9.8	—	—	外：ヨコナデ・オサエ・ナデ 内：ヨコナデ・オサエ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	良	口縁部2/12	
299	058-06	灰釉陶器	浄瓶	I-X11	包含層	—	—	—	外：ロクロナデ	釉：オリーブ黄 5Y6/3	密	良	頸部小片	
300	026-02	黒色土器	椀	西区	T33 包含層	17.6	4.3	—	外：ヨコナデ・ミガキ 内：ヨコナデ・ミガキ	橙 7.5YR6/6	密	良	口縁部1/12	
301	053-07	黒色土器	椀	I-I6	包含層	15.7	—	—	外：ヨコナデ・ミガキ 内：ヨコナデ・ミガキ	外：にぶい赤褐 5YR5/4 内：暗灰 10YR4/1	やや粗 （～3mm程）	良	口縁部1/12	
302	060-03	陶器	山茶椀	N-C10	包含層	14.4	5.8	7.2	外：ロクロナデ・ナデ・胴箆痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	密	良	全体1/4	底部内面摩耗
303	045-01	陶器	山茶椀	東区	包含層	—	—	6.8	外：ロクロナデ・糸切り痕・自然釉 内：ロクロナデ・自然釉	灰白 5Y8/1	密 （～2mm程）	良	底部1/4	底部内面摩耗
304	060-02	陶器	山茶椀	I-Q14	包含層	—	—	7.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・自然釉 内：ロクロナデ	淡黄 2.5Y8/2	密 （～1mm程）	良	高台部 11/12	
305	060-04	陶器	山茶椀	N-R10	包含層	—	—	8.0	外：ナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/1	密	良	高台部5/12	底部内面摩耗
306	045-02	陶器	山茶椀	東区	包含層	—	—	6.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・胴箆痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	密 （～2mm程）	良	底部完形	底部内面摩耗
307	045-03	陶器	山茶椀	東区	包含層	—	—	6.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・胴箆痕 内：ロクロナデ	灰白 7.5YR8/1	やや粗 （～2mm程）	良	底部1/2	底部内面摩耗
308	044-07	陶器	山茶椀	東区	包含層	—	—	5.6	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 7.5Y7/1	密 （～1mm程）	良	底部2/12	
309	044-08	陶器	小皿	東区	包含層	8.4	2.1	4.4	外：ロクロナデ・ナデ 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/1	密 （～1mm程）	良	全体1/6	
310	026-01	陶器	小皿	東区	T13 包含層	7.8	2.1	—	外：ロクロナデ・糸切り痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y7/1	やや密	良	全体1/3	
311	060-01	青磁	椀	I-K14	包含層	—	—	5.2	外：ロクロナデ	素地：灰白 7.5Y7/1 釉：オリーブ灰 10Y6/2	密	良	高台部2/12	底部外面露胎・内面蛇卒文

第17表　遺物観察表⑨

報告番号	実測番号	種類	器種等	出土位置グリッド	出土遺構等	法量（cm）			調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
						口径	器高	底径						
312	045-06	石製品	砥石	J-D15 J-E15東	包含層	－	－	－						
313	047-04	陶器	山茶椀	西区	表土	－	－	7.0	外：ロクロナデ・ナデ・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや粗 (～6mm砂)	良	底部完形	底部内面摩耗・底部外面墨書？
314	047-01	陶器	山茶椀	西区	表土	16.3	5.6	8.5	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 7.5Y8/1	やや粗 (～2mm砂)	良	7/12	底部内面摩耗
315	047-03	陶器	山茶椀	西区	表土	14.9	5.2	7.1	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/1	やや粗 (～4mm砂)	良	2/12	
316	046-05	陶器	山茶椀	西区	表土	－	－	7.2	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白 5Y7/2	やや密 (～1mm砂)	良	底部5/12	
317	046-06	陶器	山茶椀	西区	表土	－	－	6.8	外：ロクロナデ・ナデ 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白 5Y7/2	やや粗 (～4mm砂)	良	底部完形	底部内面摩耗
318	046-02	陶器	山茶椀	西区	表土	－	－	7.0	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y8/2	やや粗 (～4mm砂)	良	底部完形	底部内面摩耗
319	046-04	陶器	山茶椀	東区	表土	－	－	6.4	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y7/1	やや粗 (～2mm砂)	良	底部3/12	底部内面摩耗
320	046-07	陶器	山茶椀	東区	表土	－	－	6.7	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ・一方向ナデ	灰白 2.5Y7/1	やや粗 (～3mm砂)	良	底部5/12	
321	046-03	陶器	山茶椀	東区	表土	－	－	5.9	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 5Y8/1	やや粗 (～1mm砂)	良	底部完形	外面スス付着？
322	046-01	陶器	山茶椀	西区	表土	－	－	6.2	外：ロクロナデ・ナデ・籾殻痕 内：ロクロナデ・ナデ	灰白 2.5Y8/1	やや密 (～2mm砂)	良	底部完形	内面スス付着・底部内面摩耗
323	047-02	陶器	山茶椀	西区	表土	－	－	5.9	外：ロクロナデ・糸切り痕・籾殻痕 内：ロクロナデ	灰白 2.5Y8/2	やや粗 (～3mm砂)	良	底部完形	底部内面摩耗
324	046-08	陶器	小皿	西区	表土	－	－	4.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ・ナデ	灰白 5Y8/1	やや密	良	底部7/12	

第18表　遺物観察表⑩

報告番号	実測番号	種類	器種等	出土位置・グリッド	出土遺構	大きさなど	備考
144	062-04	鉄製品	軸受	J-G11	SD29	口径1.1cm・全長3.0cm・厚さ1.02mm・底径0.55cm	
171	063-01	青銅製品	和鏡	I-J24	SX76	直径10.8cm・厚さ0.17cm	「網代双鳥鏡」あるいは「伏籠双鳥鏡」
172	062-02	鉄製品	和鋏	I-J24	SX76	残存長11.6cm・巾2.2cm 握手厚さ0.35cm・刃部厚さ0.25cm	取り上げNo.13・14②
173	062-01	鉄製品	毛抜き	I-J24	SX76	完存 全長7.4cm・巾1.7cm・厚さ0.25cm～0.35cm	取り上げNo.14①
174	062-03	鉄製品	刀子	I-J24	SX76	残存長8.5cm・把(完存)7.8cm	取り上げNo.12
325	064-02	鉄製品	鉄鍋	F区　I-G10 F区　北東隅-表土	包含層 表土	残存長10.0cm・口唇部厚さ0.65cm 厚さ0.45cm～0.65cm・重さ58.08g	古鉄再生材か？
326	065-02	鉄製品	鉄鍋	西区　I-X7	包含層 SK174上面か	残存長3.0cm・巾3.2cm 口縁直下厚さ0.6cm・口縁厚さ0.4cm・重さ7.36g	
327	064-03	鉄製品	鎚片	F区　I-J13	包含層	残存長4.9cm・厚さ0.4cm×0.45cm・重さ3.38g	
328	065-01	鉄製品	曲刃鎌	G区　Tr8	SK上面	残存長大片10.6cm・小片3.2cm 刀厚0.08cm×0.25cm・重さ22.27g	切先と柄装着端部を欠損
329	064-04	鉄製品	和釘	F区　I-L17	NR152上面 包含層	残存長7.1cm・頭巾1.3cm 脚厚さ0.35cm×0.3cm・重さ3.66g	頭巻釘
330	064-01	鉄製品	和釘	F区　表土	NR152上面 西岸付近	残存長3.5cm・厚さ0.6cm×0.5cm・重さ2.59g	脚先片

第19表　遺物観察表（金属製品）

Ⅵ　自然科学分析

1　放射性炭素年代測定

（1）はじめに

三重県鈴鹿市に位置する釜垣内遺跡第２次調査で、出土した土器に付着した炭化物を試料として、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて、炭素安定同位体比（$\delta^{13}C$）と窒素安定同位体比（$\delta^{15}N$）、炭素窒素比（C/N）を求めた（炭素・窒素安定同位体比分析の項参照）。

（2）試料と方法

測定試料の情報、調製データは第20表のとおりである。

試料は、土坑ＳＫ50から出土した土器（深鉢:試料①）の胴部外面（PLD-24202）と胴下部内面（PLD-24203）より採取した付着炭化物２点である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

（3）結果

第21表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、第38図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（4）考察

ＳＫ50出土深鉢の胴部外面付着炭化物（PLD-24202）は、^{14}C年代が2970±20 yr BP、2σ暦年代範囲（確率95.4％）が1293-1124 cal BC（95.4％）であった。胴下部内面付着炭化物（PLD-24203）は、^{14}C年代が2980±20 yr BP、2σ暦年代範囲が1298-1127 cal BC（95.4％）であった。

別項において、炭素安定同位体比（$\delta^{13}C$）、窒素安定同位体比（$\delta^{15}N$）、炭素窒素比（C/N）から、付着炭化物は内外面ともC$_3$植物起源の可能性が高いと推定されている（炭素・窒素安定同位体比分析の項参照）。したがって、内外面とも海産物は含まれていない、あるいは含まれていてもわずかと考えられ、年代への海洋リザーバーの影響を考慮する必要は無い。

内外面の付着炭化物とも、よく一致した年代を示している。内外面の年代を、縄文土器編年と^{14}C年代・暦年較正年代との対応関係（小林，2008；工藤，2012；増子，2008；中村，2008；岡田，2008）に照らすと、縄文時代晩期前葉に相当する。

（パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・
山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・
Ineza Jorjoliani・中村賢太郎）

【参考文献】

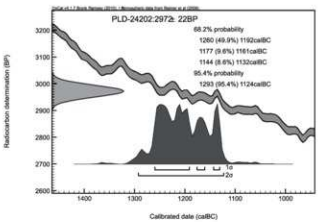
・Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
・小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.
・工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—. 373p, 神泉社.
・増子康眞 (2008) 晩期半截竹管文土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 774-781, アム・プロモーション.
・中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
・中村 豊 (2008) 西日本磨研土器 (滋賀里1～3式土器). 小林達雄編「総覧縄文土器」: 782-789, アム・プロモーション.
・岡田憲一 (2008) 回線文系土器 (宮滝式・元住吉山II式土器). 小林達雄編「総覧縄文土器」: 650-657, アム・プロモーション.
・Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50, 000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

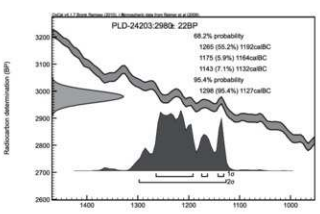
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24202	遺構：SK50 試料No.試料①	種類：土器付着炭化物 器種：深鉢 部位：胴部外面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理（アセトン） 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-24203	遺構：SK50 試料No.試料①	種類：土器付着炭化物 器種：深鉢 部位：胴下部内面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理（アセトン） 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第20表　測定試料および処理

測定番号	δ ^{13}C (‰)	層年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-24202 (外面)	-27.56±0.23	2972±22	2970±20	1260BC(49.9%)1192BC 1177BC(9.6%)1161BC 1144BC(8.6%)1132BC	1293BC(95.4%)1124BC
PLD-24203 (内面)	-25.71±0.24	2980±22	2980±20	1265BC(55.2%)1192BC 1175BC(5.9%)1164BC 1143BC(7.1%)1132BC	1298BC(95.4%)1127BC

第21表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果





第38図　層年較正結果

2　土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析

（1）はじめに

三重県鈴鹿市に位置する釜垣内遺跡第２次調査で出土した土器に付着した炭化物を対象として、炭素安定同位体比（$\delta^{13}C$）と窒素安定同位体比（$\delta^{15}N$）、炭素窒素比（C/N）を求めた。なお、同一試料で放射性炭素年代測定も行っている（放射性炭素年代測定の項参照）。

（2）試料および方法

試料は、土坑ＳＫ50から出土した土器（深鉢：試料①）の胴部外面（PLD-24202）と胴下部内面（PLD-24203）より採取した付着炭化物２点である。

測定を実施するにあたり、土器付着炭化物試料は、アセトン洗浄および酸・アルカリ・酸洗浄（HCl：1.2N, NaOH:1.0N）を施して試料以外の不純物を除去した後、測定を行った。

炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

炭素安定同位体比（$\delta^{13}C_{PDB}$）および窒素安定同位体比（$\delta^{15}N_{AIR}$）の測定には、質量分析計DELTA V（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比ではIAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比ではIAEA N1を使用した。測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO_2とN_2を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度1000℃、還元炉温度680℃、分離カラム温度45℃である。分離したCO_2およびN_2はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

（3）結果

第22表に、試料名と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。第39図は炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、第40図は炭素安定同位体比とC/N比の関係を示したものである。胴部外面（PLD-24202）の土器付着炭化物は、第39図ではC_3植物・草食動物より少し窒素安定同位体比の高い位置に、第40図ではC_3堅果類の位置にプロットされた。胴下部内面（PLD-24203）の土器付着炭化物は、第39図ではC_3植物の位置に、第40図ではC_3堅果類の位置にプロットされた。

（4）考察

試料について、得られた炭素と窒素の安定同位体比およびC/N比の値から、胴部外面（PLD-24202）および胴下部内面（PLD-24203）の付着炭化物は、主にC_3植物が炭化したものである可能性が高い。すなわち、胴部外面の付着炭化物は燃料材としてのC_3植物が燃やされた煤に由来すると考えられる。胴下部内面の付着炭化物は、食料としてC_3植物が土器で調理され炭化したと考えられる。

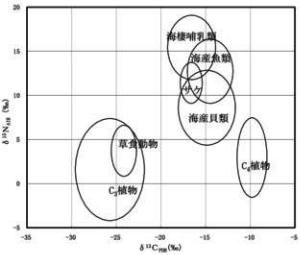
山形秀樹・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

【引用・参考文献】

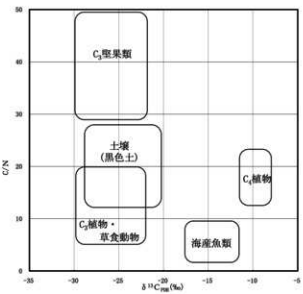
- 赤澤　威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元．田中　琢・佐原　眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」：132-143，クバプロ．
- 坂本　稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析．国立歴史民俗博物館研究報告，137，305-315．
- Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.
- 米田　穣（2008）丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析．豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」：261-263，豊田市教育委員会．
- 吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究．平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B（課題番号16300290）研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」，85-95．
- 吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器．新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」：87-99，新潟日報事業社．

測定番号	試料情報	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	$\delta^{15}N_{AIR}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
PLD-24202	遺構:SK50 試料番号:試料① 種類:土器付着炭化物 機種:深鉢 部位:胴部外面	−26.4	8.75	63.3	2.05	36.0
PLD-24203	遺構:SK50 試料番号:試料① 種類:土器付着炭化物 機種:深鉢 部位:胴下部内面	−23.2	1.13	63.0	2.50	29.4

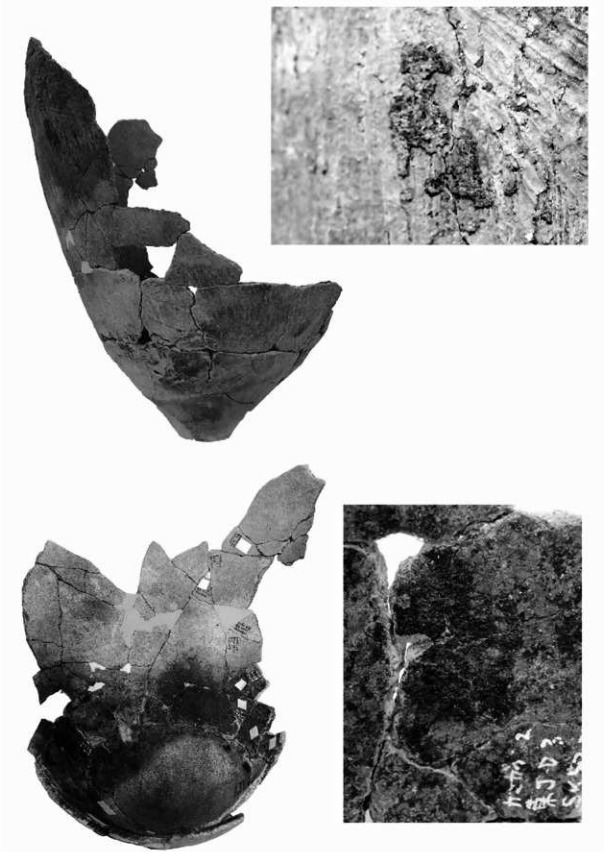
第22表　測定結果



第39図　炭素・窒素安定同位体比（吉田・西田(2009)に基づいて作製）



第40図　炭素安定同位体比とC/N比の関係（吉田・西田(2009)に基づいて作製）



第41図　土器付着炭化物（上段：外面、下段：内面）

3　土器内土壌のリン・カルシウム分析

（1）はじめに

鈴鹿市小岐須町地内に所在する釜垣内遺跡の縄文時代晩期の土坑ＳＫ210より出土した土器内の土壌について、蛍光X線分析によるリン・カルシウム分析を行い、骨などが存在した可能性について検討した。

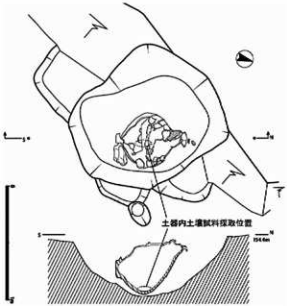
（2）試料と方法

分析対象となる試料は、土坑ＳＫ210の土器内の土壌（分析No. 1）である（第43図）。また、比較試料として土坑内土器外の土壌（分析No. 2）、土坑外の地山の土壌（分析No. 3）も同時に分析した。（第23表）。時期は、縄文時代晩期とみられている。

分析は、藤根ほか（2008）の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析によりリン、カルシウムを多く含む箇所を面的に検出し直接測定できるという利点がある。測定試料には、試料を乾燥後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20t・1分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である㈱堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム(Rh)ターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)である。また、試料ステージを走査させながら測定して元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン(P)のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間6000s、パルス処理時間P3に、ポイント分析では50kV、0.10～0.52mA（自動設定）、ビーム径100μm、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。



第42図　ＳＫ210土器内土壌試料採取位置

（3）結果

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各５ヶ所の位置を示した図を第43図に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した各元素半定量値を第24表に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを調整した。

分析NO.	出土遺構	採取位置	備考
1	ＳＫ210	土器内	
2		遺構内	比較試料
3	ＳＫ210近辺	地山	

第23表　分析対象一覧

分析の結果、土器内の土壌（分析No. 1）はリン（P_2O_5）が0.14～0.76%、カルシウム（CaO）が0.34～0.71%、比較試料となる遺構内土器外の土壌（分析No. 2）はリン（P_2O_5）が0.42～0.74%、カルシウム（CaO）が0.45～1.72%、同じく比較試料の土坑外地山の土壌（分析No. 3）はリン（P_2O_5）が0.15～0.60%、カルシウム（CaO）が0.34～2.70%の値を示した。

（4）考察

骨や歯は、ハイドロキシアパタイト$Ca_5(PO_4)_3OH$が主成分であり、すなわち蛍光X線分析ではリン（P）とカルシウム（Ca）が共に高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウムは鉱物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、炭化材なども蛍光X線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムからの検討では骨・歯以外の物質も多く検出されるため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には骨が存在していても、埋没中に分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない場合や、骨からビビアナイト$Fe_3(PO_4)_2 \cdot 8H_2O$が析出しているケースのように骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという場合もある。なお、骨や歯以外でリン、カルシウムがともに極めて多く含まれる物質としては、尿の析出物がある。また、植物灰などもカルシウムとともにリンが多少含まれる。そのため、遺構の性格については、他の自然科学分析の結果、および遺物の出土状況や類例など考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

今回分析した試料は、土器内の土壌である分析No. 1のリン含有量は最大でも0.76%と少なく、リンが明らかに多い箇所は検出されなかった。土器外の土壌である分析No. 2、3と比較しても、含有量にほとんど差はなく、土器内土壌のリン含有量が多いとは言い難い。

（5）おわりに

釜垣内遺跡の縄文時代晩期の土坑ＳＫ210より出土した土器内の土壌について分析を行った結果、リン・カルシウム共に明らかに多く含む箇所は見出せなかった。以上、自然科学的見地からは、骨・歯の存在を積極的に肯定できるデータは得られなかった。遺構の性格については、他の自然科学分析の結果および遺物の出土状況や類例など考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

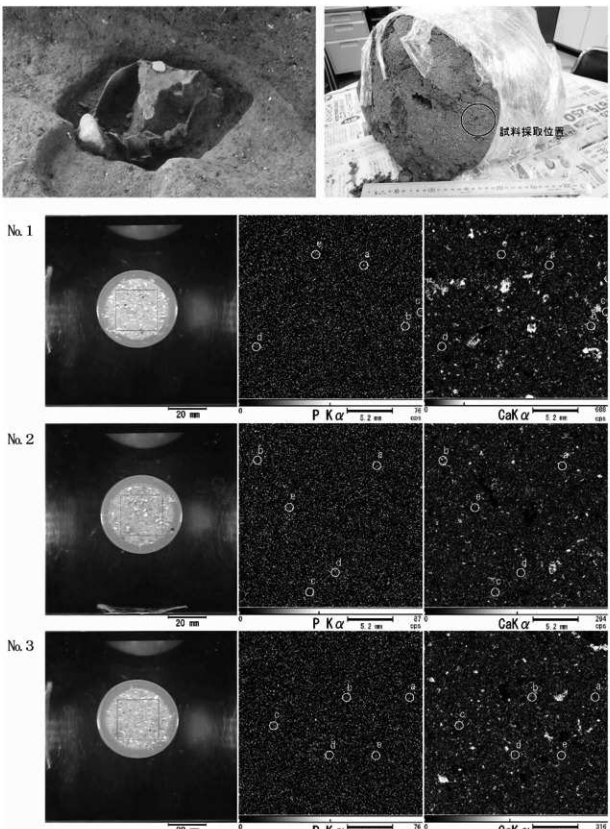
竹原弘展・小林克也・中村賢太郎
（パレオ・ラボ）

【引用文献】

・藤根　久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析．日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，108-109.

No.	ポイント	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2
1	a	0.22	24.26	63.69	**0.51**	0.29	2.51	**0.65**	0.71	0.09	7.00	0.01	0.02	0.00	0.05
	b	0.00	22.33	67.70	**0.14**	0.17	8.24	**0.65**	0.15	0.00	0.54	0.03	0.02	0.00	0.00
	c	0.00	23.25	65.90	**0.66**	0.29	1.89	**0.71**	1.02	0.50	5.71	0.02	0.02	0.00	0.01
	d	0.79	22.19	69.94	**0.76**	0.23	1.16	**0.34**	0.58	0.12	3.85	0.02	0.01	0.00	0.01
	e	0.42	25.85	61.37	**0.64**	0.29	1.91	**0.50**	1.09	0.50	7.40	0.02	0.02	0.00	0.01
2	a	0.34	24.86	63.71	**0.45**	0.29	1.97	**1.72**	0.70	0.41	5.51	0.01	0.02	0.00	0.02
	b	1.59	24.53	62.80	**0.47**	0.36	1.58	**0.53**	0.89	0.12	6.95	0.02	0.01	0.01	0.15
	c	0.63	27.71	60.84	**0.42**	0.29	2.08	**0.45**	0.88	0.29	6.38	0.01	0.00	0.00	0.01
	d	1.42	26.58	59.86	**0.66**	0.27	2.01	**1.02**	1.05	0.64	6.44	0.01	0.02	0.00	0.02
	e	0.00	27.66	59.12	**0.74**	0.29	1.94	**0.54**	0.90	0.65	8.12	0.01	0.02	0.00	0.01
3	a	1.50	26.57	60.93	**0.60**	0.31	1.98	**0.68**	0.80	0.34	6.25	0.01	0.01	0.00	0.01
	b	0.75	24.50	67.15	**0.15**	0.19	2.13	**0.34**	0.75	0.09	3.87	0.01	0.01	0.00	0.04
	c	0.13	25.01	66.35	**0.28**	0.26	1.66	**0.73**	0.58	0.09	4.88	0.00	0.01	0.00	0.01
	d	0.22	26.19	63.99	**0.57**	0.28	1.07	**2.70**	0.66	0.35	3.93	0.01	0.02	0.00	0.02
	e	0.14	26.63	64.53	**0.44**	0.28	3.00	**0.66**	0.64	0.37	3.25	0.03	0.02	0.00	0.01

第24表　半定量分析結果（mass%）



第43図　出土状況、土器内土壌試料採取位置とプレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図

4　炭化材の樹種同定

（1）はじめに

御幣川と鏑川に挟まれた扇状地上に立地する釜垣内遺跡の第５次調査で出土した炭化材について、樹種同定を行った。

（2）試料と方法

試料は、古代の焼成土坑と考えられているＳＫ205から６点、古代の焼土を伴う柱穴Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ１から５点の、計11点の出土炭化材である。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（3）結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属１分類群、広葉樹ではエノキ属とスダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属と呼ぶ）の３分類群の、計４分類群がみられた。スダジイとアカガシ亜属が各４点、モミ属が２点、エノキ属が１点であった。同定結果を第25表に、一覧を第26表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属　*Abies*　マツ科　第44図　1a-1c (No. 8)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～８列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、１分野に２～４個みられる。また、放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) エノキ属　*Celtis*　アサ科　第44図　2a-2c (No. 9)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１～３列が方形となる異性で、幅１～５列となる。放射組織には精細胞がみられる。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとまって生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(3) スダジイ　*Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba　ブナ科　第44図　3a-3c (No. 4)、4a-4c (No. 5)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

樹種/遺構	ＳＫ205	Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ1	合計
モミ属	2		2
エノキ属	1		1
スダジイ	2	2	4
コナラ属アカガシ亜属	1	3	4
合計	6	5	11

第25表　出土炭化材の樹種同定結果一覧

(4) コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　第44図　5a-5c (No. 7)、6a (No. 参考１)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加工は困難である。

（4）考察

古代の焼成土坑と考えられているＳＫ205では、

モミ属とスダジイが各２点、エノキ属とアカガシ亜属が各１点みられた。また、焼土を伴う柱穴Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ１では、アカガシ亜属が３点とスダジイが２点みられた。試料はいずれも燃料材の残渣の可能性が考えられている。

モミ属は燃料材としてみると広葉樹よりも火付きが良く、エノキ属とスダジイ、アカガシ亜属は薪炭材として普通に利用される樹種である（伊東ほか，2011）。また、これらの樹種はいずれも遺跡周辺に普通に生育する樹種である（伊東ほか，2011）。よって、燃料材には遺跡周辺の森林から薪炭材に適した樹種を選択的に伐採され、利用されていた可能性が考えられる。

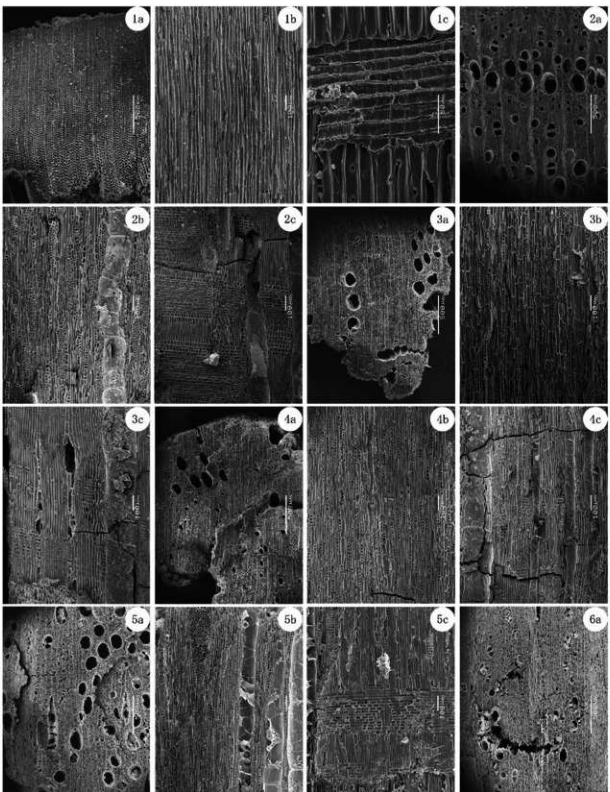
小林克也（パレオ・ラボ）

【引用文献】

・伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.

試料No.	遺構名	遺物No.	器種	樹種	備考	時期
4	ＳＫ205	炭化材①	燃料材？	スダジイ		古代
5	ＳＫ205	炭化材②	燃料材？	スダジイ		古代
6	ＳＫ205	炭化材③	燃料材？	モミ属		古代
7	ＳＫ205	炭化材④	燃料材？	コナラ属アカガシ亜属		古代
8	ＳＫ205	炭化材⑤	燃料材？	モミ属		古代
9	ＳＫ205	炭化材⑥	燃料材？	エノキ属		古代
12	Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ11	炭化材③	燃料材？	コナラ属アカガシ亜属		古代
13	Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ11	炭化材④	燃料材？	スダジイ		古代
参考１	Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ11		燃料材？	コナラ属アカガシ亜属	No．３炭化材の表面から剥離	古代
参考２	Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ11		燃料材？	コナラ属アカガシ亜属	底部付近採取炭化材	古代
参考３	Ｆ区Ｌ20Ｐｉｔ11		燃料材？	スダジイ	No．３・No．４間の底部付近	古代

第26表　釜垣内遺跡（第５次）出土炭化材の樹種同定結果一覧



1a–1c. モミ属(No. 8)、2a–2cエノキ属(No. 9)、3a–3c. スダジイ(No. 4)、4a–4cスダジイ(No. 5)、
5a–5c. コナラ属、アカガシ亜属(No. 7)、6a. コナラ属アカガシ亜属(No参考1)
a. 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第44図　釜垣内遺跡（第5次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

5　焼土の材質分析

（1）はじめに

鈴鹿市小岐須町に所在する釜垣内遺跡の第５次調査で検出された焼土について、薄片の偏光顕微鏡観察とＸ線回折分析を行い、受熱の痕跡について調べた。

（2）試料と方法

試料は、釜垣内遺跡の５次調査で検出された焼土３点である（第27表、第45図-1a～3a）。

方法は、焼土の薄片を作製して偏光顕微鏡観察を行い、粘土および砂粒の特徴について調べ、各粒子の受熱痕跡について検討した。また、Ｘ線回折分析も行い、生成する鉱物の有無について検討した。

［薄片観察］

試料を以下の方法で処理し、薄片を作製した。

(1)試料は、受熱した痕跡の赤色あるいは白色部分をブロック状に採取した後、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ、固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドグラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

これら薄片は、偏光顕微鏡を用いて観察し、薄片全面にみられた微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

［放散虫化石］

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μm程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

［植物珪酸体化石］

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μm前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

［胞子化石］

胞子は、直径約10～30μm程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

［長石類］

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。

［ガラス質］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

［片理複合石英類］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩などと考えられる。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

［複合石英類］

複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.10mmのものを中型、0.10mm以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

［斑晶質・完晶質］

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

［流紋岩質］

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

［凝灰岩質］

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

［不明粒子］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

［X線回折分析］

採取した試料は、恒温乾燥器を用いて70℃で十分に乾燥させ、アルミナ製乳鉢でよく粉砕した。粉末試料をアルミニウム試料板に充填して、不定方位試料とした。

分析装置は、株式会社リガク製X線回折装置Mini Flex600を使用した。装置は、X線管が銅（Cu）ターゲット、検出器が一次元半導体検出器（D/teX Ultra）を使用している。測定条件は、40kV、15mA、走査速度２deg/min、ステップ幅0.02deg、走査範囲３～65deg、蛍光X線軽減モードに設定し、回転試料台で試料を回転させつつ測定した。

（３）結果および考察

以下に、焼土薄片の偏光顕微鏡による観察結果について述べる。

焼土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査し、記載した（第28表）。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、第28表における不等号は、おおまかな量比を示す。

(1) 焼土を構成する材料と受熱の痕跡

以下に、各焼土中に含まれる微化石類、岩石群、鉱物群、および受熱の痕跡を示す粒子について述べる。第29表には、焼土中の各分類群の量比の概略についてまとめた。◎が非常に多い、○が多い、△が検出、未記入が未検出を示す。なお、砂粒は第30表の組み合わせに従って分類した。

[分析No. 1 (焼土①)]

焼土は、粘土中の微化石類を観察した結果、珪藻化石などの水成起源を指標する微化石類を含んでいなかった。したがって、水成粘土以外の粘土と推定される（第29表）。なお、イネ科植物の葉身などで形成される植物珪酸体化石は比較的多く含まれていた。

一方、砂粒組成は、主に複合石英類（大型）の深成岩類からなり、その他に複合石英類（微細）の堆積岩類や片理複合石英類の片岩類、火山ガラスを含む。鉱物では、深成岩類に伴うカリ長石（パーサイト）や石英、雲母類などを含む。

受熱の痕跡を示す粒子としては、長石が溶けて発泡・ガラス化した粒子がわずかに含まれていた（第47図-1a, 1b)。また、通常の火山ガラスの色調とは異なる淡褐色に濁った火山ガラスも含まれていた（第47図-1c)。黒色物が集合した複合粒子も見られた（第47図-1e)。

X線回折分析では、石英（Quartz)、長石類の正長石(Orthoclase)、アノーソクレース(Anorthoclase)、曹長石（Albite）が明瞭に検出された（第48図、第31表)。他に蛇紋石（Serpentine)、緑泥石（Chlorite）などの可能性のあるピークが検出されたが、高温焼成で生成する(的場・平賀, 1985) ムライト（Mullite）は検出されなかった。ムライト（Mullite）は1050℃以上で生成する（的場・平賀, 1985)。

長石類の溶融は、1100℃程度と考えられる。分析No. 1（焼土①）は、発泡ガラスが極少ないため、部分的な温度上昇あるいは短時間の受熱と考えられる。

[分析No. 2 (焼土②)]

焼土は、粘土中の微化石類を観察した結果、珪藻化石などの水成起源を指標する微化石類を含んでいなかった。したがって、水成粘土以外の粘土と推定される（第29表)。なお、イネ科植物の葉身などで形成される植物珪酸体化石は比較的多く含まれていた。

一方、砂粒組成は、主に複合石英類（大型）の深成岩類からなり、その他に複合石英類（微細）の堆積岩類や片理複合石英類の片岩類、火山ガラスを含む。鉱物では、深成岩類に伴うカリ長石（パーサイト）や石英、雲母類などを含む。

受熱の痕跡を示す粒子としては、通常の火山ガラスの色調とは異なる淡褐色に濁った火山ガラスが含まれていた（第47図-2a)。

X線回折分析では、石英（Quartz)、長石類の正長石(Orthoclase)、アノーソクレース(Anorthoclase)、曹長石（Albite）が明瞭に検出された（第49図、第31表)。他に、蛇紋石(Serpentine)、緑泥石(Chlorite)などの可能性のあるピークが検出されたが、高温焼成で生成するムライト（Mullite）は検出されなかった。

分析No. 1（焼土①）で観察されたような長石の発泡ガラスは含まれていなかったため、分析No. 2（焼土②）は1100℃よりも低い温度で焼けたと考えられる。

[分析No. 3 (焼土⑤)]

焼土は、粘土中の微化石類を観察した結果、珪藻化石などの水成起源を指標する微化石類を含んでいなかった。したがって、水成粘土以外の粘土と推定される（第29表)。なお、イネ科植物の葉身などで形成される植物珪酸体化石は比較的多く含まれていた。

一方、砂粒組成は、主に複合石英類（大型）の深成岩類からなり、その他に複合石英類（微細）の堆積岩類や片理複合石英類の片岩類、火山ガラスを含む。鉱物では、深成岩類に伴うカリ長石（パーサイト）や石英、雲母類などを含む。

受熱の痕跡を示す粒子は、通常の火山ガラスの色調とは異なる淡褐色に濁った火山ガラスが含まれていた（第47図-3b)。

X線回折分析では、石英（Quartz)、長石類の正長石(Orthoclase)、アノーソクレース(Anorthoclase)、曹長石（Albite）が明瞭に検出された（第48図、第31表)。他に、蛇紋石（Serpentine)、緑泥石(Chlorite)

などの可能性のあるピークが検出されたが、高温焼成で生成するムライト（Mullite）は検出されなかった。

分析No. 1（焼土①）で観察された長石のような発泡ガラスは含まれていなかったため、分析No. 3（焼土⑤）は1100℃よりも低い温度で焼けたと考えられる。

（4）おわりに

釜垣内遺跡の第5次調査で検出された焼土3点について、薄片の偏光顕微鏡による観察を行った。いずれの焼土も水成粘土以外の粘土であり、深成岩類を主体とした砂粒物からなる。

分析No. 1（焼土①）では長石が発泡またはガラス化した粒子が極少量検出され、1100℃程度の部分的な温度上昇あるいは短時間の受熱が推定された。なお、X線回折分析の結果、高温焼成（1050℃以上）で生成するムライトは検出されなかった。

分析No. 2（焼土②）と分析No. 3（焼土⑤）では、火山ガラスの濁りが観察されたが、焚火程度の温度と推定された。なお、X線回折分析の結果、高温焼成で生成するムライトは検出されなかった。

藤根　久・米田恭子・竹原弘展
（パレオ・ラボ）

【引用・参考文献】

・安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.
・小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.
・的場宏純・平賀章三（1985）粘土焼成における焼成時間効果―焼成温度推定における留意点―．奈良教育大学古文化財研究報告，14，17-24.
・白水晴雄（2000）粘土鉱物学―粘土科学の基礎―．185p，朝倉書店.

分析No.	遺構	種類	分析対象採取No.	時期	分析位置の特徴
1	F区L20Pit1	焼土	焼土①	古代	表面：浅黄色化、内部：黒味を帯びる
2			焼土②		表面：全体的にやや赤色化
3			焼土⑤		表面：全体的に赤色化

第27表　試料とその詳細

分析No.	採取No.	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	焼土①	250μm-1.29mm	5.48mm	植物珪酸体化石、胞子化石	複合石英類（大型）、石英・長石類）ガラス質）カリ長石（パーサイト）、複合石英類（中型）、角閃石類、斜長石（双晶）、斜方輝石、雲母類、ジルコン、複合石英類（微細）
2	焼土②	250μm-750μm	5.05mm	植物珪酸体化石、胞子化石	複合石英類（大型）、石英・長石類）ガラス質）カリ長石（パーサイト）、角閃石類、斜長石（双晶）、複合石英類（中型）、雲母類、複合石英類（微細）、ジルコン、片理複合石英類、ザクロ石
3	焼土⑤	200μm-700μm	5.85mm	植物珪酸体化石	複合石英類（大型）、石英・長石類）ガラス質、カリ長石（パーサイト））雲母類、角閃石類、斜長石（双晶）、片理複合石英類、ザクロ石、複合石英類（微細）

第28表　焼土中の微化石類と砂粒物の特徴

分析No.	種類	粘土の特徴								砂粒の特徴								鉱物の特徴							植物珪酸体化石	受熱の痕跡
		分類	放散虫化石	珪藻化石	珪藻化石	海水種	淡水種	不明種	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	石英	石英（双晶斜長石、累帯）	カリ長石（パーサイト）	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類		
1	焼土①	その他								△	B		◎	△				△	◎	△	○	△	△	△	○	一部長石の発泡・ガラス化、火山ガラスの濁り
2	焼土②	その他								△	B	△	◎	△				△	◎	△	○	△	△		△	○	火山ガラスの濁り
3	焼土⑤	その他									B	△	◎	△				△	◎	△	○	△	△		△	○	火山ガラスの濁り

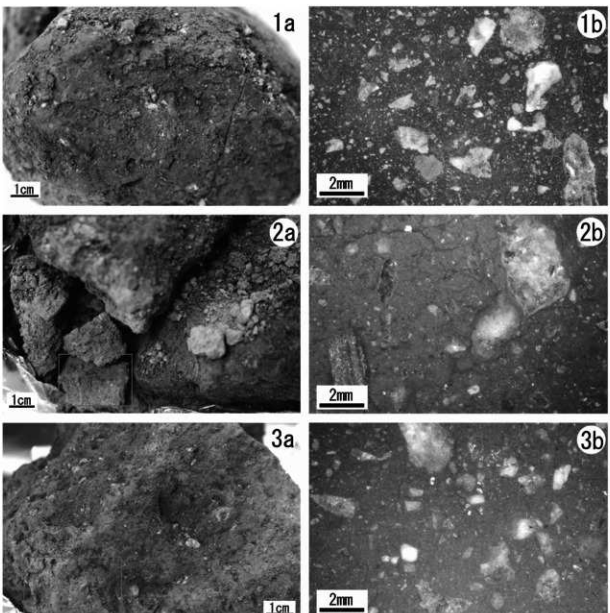
第29表　焼土中の粘土および砂粒組成の特徴

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

第30表　岩石片の起源と組み合わせ

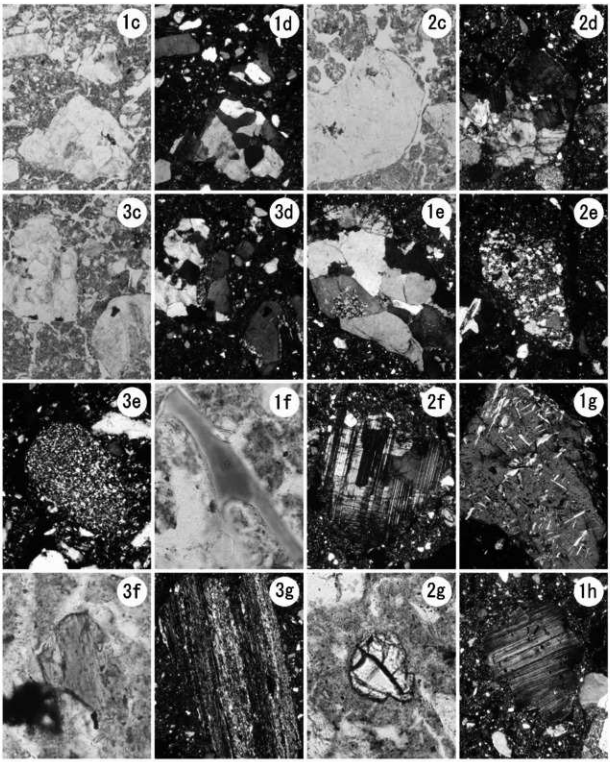
分析No.	分析試料	主な鉱物	その他の鉱物
1	焼土①	石英，正長石，アノーソクレース，曹長石	蛇紋石、緑泥石など
2	焼土②	石英，正長石，アノーソクレース，曹長石	蛇紋石、緑泥石など
3	焼土⑤	石英，正長石，アノーソクレース，曹長石	蛇紋石、緑泥石など

第31表　X線回折分析による検出鉱物



1．分析No. 1（焼土①）　2．分析No. 2（焼土②）　3．分析No. 3（焼土⑤）

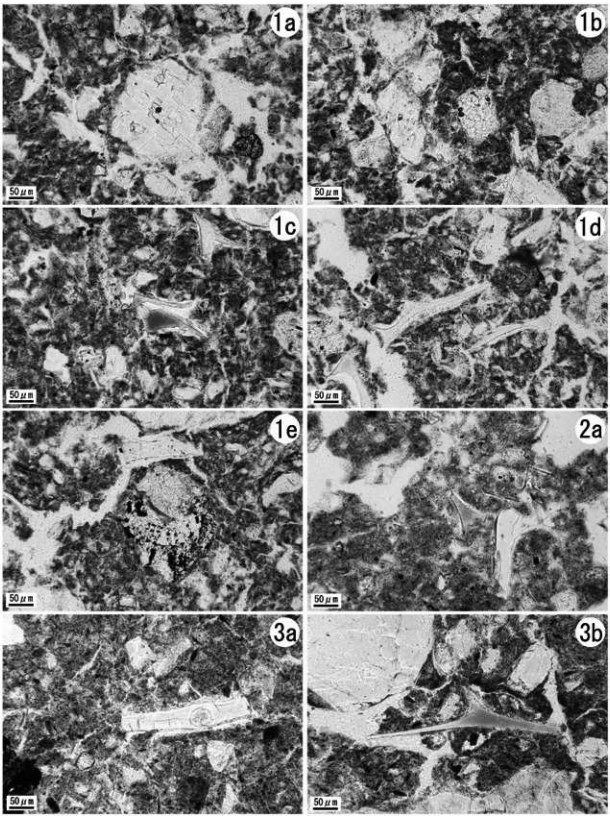
第45図　分析試料と断面写真（a：試料、b：切断面）※枠は分析位置



（スケール：1c，1d，2c，2d，3c，3d，1e，2e，2f，3g，1h：500μm、3e，1g：100μm、1f，3f，2g・50μm）

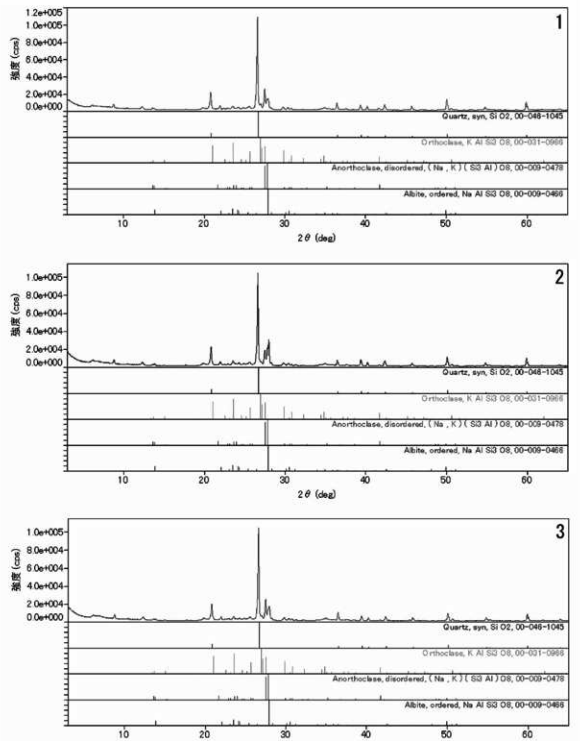
1c. 分析No. 1（解放ニコル）　1d. 分析No. 1（直交ニコル）　2c. 分析No. 2（解放ニコル）
2d. 分析No. 2（直交ニコル）　3c. 分析No. 3（解放ニコル）　3d. 分析No. 3（直交ニコル）
1e. 複合石英類（大型）　2e. 複合石英類（中型）　3e. 複合石英類（微細）　1f. ガラス質（濁り）
2f. 斜長石（双晶）　1g. カリ長石（パーサイト）　3f. 角閃石類　3g. 片理複合石英類
2g. ザクロ石　1h. 雲母類

第46図　胎土の偏光顕微鏡写真



1a. 斜長石内の一部ガラス化(焼土①)　1b. 長石類の発泡ガラス(焼土①)
1c. 濁り火山ガラス(焼土①)　1d. 通常火山ガラス(焼土①)　1e. 濁り粒子(焼土①)
2a. 濁り火山ガラス(焼土②)　3a. 通常火山ガラス(焼土⑤)　3b. 濁り火山ガラス(焼土⑤)

第47図　受熱の痕跡を示す粒子の顕微鏡写真



第48図　焼土のＸ線回折スペクトル図

6　炭化種実

（1）はじめに

三重県鈴鹿市小岐須町に所在する釜垣内遺跡は、御幣川と鍋川に挟まれた扇状地に立地する、縄文時代から中世の遺構が検出された集落跡である。ここでは、釜垣内遺跡第５次調査の古代の土坑から出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物や植生について検討した。

（2）試料と方法

試料は、土坑であるＳＫ200から肉眼で確認・採取された炭化種実である。遺構の時期は、古代と推定されている。

抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、三重県埋蔵文化財センターに保管されている。

（3）結果

同定の結果、木本植物のモモ炭化核とイチイガシ炭化子葉の２分類群が、各１点得られた。なお、イチイガシは１片に割れていた。同定結果を第32表に示す。

次に、炭化種実の記載を示し、図版に写真を掲載して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は、米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) **モモ**　*Amygdalus persica* L.　炭化核　バラ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。完形ならば下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。高さ17.6mm、幅14.5mm、厚さ12.6mm。

(2) **イチイガシ**　*Quercus gilva* Blume　炭化子葉　ブナ科

楕円体～長楕円体で、側面観は俵形。先端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な溝が１本確認できた。高さ11.8mm、幅8.7mm。

（4）考察

古代の土坑ＳＫ200から出土した炭化種実を同定した結果、栽培植物のモモと野生植物で利用可能なイチイガシが得られた。イチイガシは常緑広葉樹で生食可能なドングリ類である。ＳＫ200からは、焼土や炭とともに、製塩土器や土師器が出土している。このため、得られた炭化種実も何らかの要因で炭化し、他の遺物と共に土坑内に堆積したと考えられる。三重県における古代のイチイガシの出土例は少なく、多気郡多気町に位置する三定田遺跡の古墳時代から飛鳥時代の流路から出土した例が唯一である（パリノ・サーヴェイ株式会社，2008）。三定田遺跡ではイチイガシをはじめとしてカシ類が多産しており、周辺に生育していたと推定されている。釜垣内遺跡ではイチイガシの可食部分である子葉が炭化して出土しており、古代においてもイチイガシが利用された可能性を示す。

モモは、食用や祭祀用に用いられた後、遺構内に堆積した可能性などが考えられる。山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津（1999）によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代の核長は、2.36～2.66cmで、鎌倉期には大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期になると大型になり、平均核長2.69cm、最大で3.8cm程度の核がみられるとしている。今回の釜垣内遺跡の古代のモモは高さ1.76cmで、山梨県で出土している古代のモモと比較するとかなり小さい。

今回検討したのは肉眼で取り上げられた炭化種実のみであったが、栽培植物の果樹と堅果類が確認され、遺存状態も良好であった。今後、土壌中に含まれていると推定される微細な炭化種実もあわせて検討すれば、当時の食生活や周辺の植生について、より具体的に明らかにできると考えられる。

佐々木由香・バンダリ スダルシャン
（パレオ・ラボ）

	試料No.	2	3
	遺構名	ＳＫ200	
	時期	古代	
分類群	採取方法	肉眼確認・採取	
モモ	炭化核	1	
イチイガシ	炭化子葉		1

第32表　釜垣内遺跡（第５次）から出土した炭化種実

【引用文献】

・新津　健（1999）遺跡から出土するモモ核について―山梨県内の事例から―．山梨考古学論集Ⅳ，361-374，山梨県考古学協会．
・パリノ・サーヴェイ株式会社（2008）三定田遺跡の自然科学分析．三重県埋蔵文化財センター編「三定田遺跡発掘調査報告」：32-41，三重県埋蔵文化財センター．
・米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

1．モモ炭化核(No.２)、２．イチイガシ炭化子葉(No.３)

第49図　釜垣内遺跡（第５次）のＳＫ200から出土した炭化種実

Ⅶ　まとめ

1　ＳＸ76出土の和鏡について

土坑墓ＳＸ76から出土した網代双鳥鏡と呼ばれる和鏡についてまとめておきたい。

本遺跡出土の鏡は、青銅製で鏡径10.8cm、縁高0.7cmである。鈕座は捩菊低座鈕である。文様構成は外区に萩の花が描かれ、内区に網代が対になるように２個所細かく描かれる。また、双鳥も対になるように配置され、翼や尾が丁寧に描かれている。

この網代双鳥鏡に近似する出土例は、東京都利島村阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡[1]、静岡県熱海市伊豆山経塚[2]、岐阜県恵那市山岡町馬場山田（飯高経塚）[3]、三重県桑名市多度経塚[4]、京都府京丹後市左坂経塚[5]、兵庫県篠山市上板井経塚[6]である。全国で６遺跡７例あり、以下にその概略を記す。（第33表・第50・51図）

・東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡の例は、青銅製で鏡径8.4cm、縁高0.15cmである。鈕座は素鈕である。文様構成は、鏡背全体に網代が描かれ、その中に鳥が２羽存在する。製作年代は12世紀前半とされる。

・静岡県熱海市伊豆山神社経塚の例は、青銅製で鏡径10.2cm、縁高0.6cmである。鈕座は捩菊低座鈕である。文様構成は、外区に文様はなく、内区にも鳥が２羽描かれているだけである。網代の枠の外線とみられるものがある。経塚の造営時期は、鏡面に承安２年（1172年）の銘があり、陶器製外容器などの共伴遺物を含めて12世紀後半から13世紀前半の埋納とみられる。

・岐阜県恵那市山岡町馬場山田（飯高経塚）の例は、青銅製で鏡径10cm弱である。鈕座は捩菊低座鈕である。文様構成は、外区全体及び内区の３ヶ所に網代が描かれている。鳥は３羽が３ヶ所に描かれている。鳥の図柄は、やや不明瞭になっている。

・三重県多度経塚からは２面出土している。１面目は、青銅製で鏡径８cm、縁高0.2cmである。鈕座は素鈕である。文様構成は、鏡背の外区に網代の文様があり、内区に鳥が２羽描かれている。２面目は、白銅製で鏡径10.9cm、縁高0.8cmである。鈕座は、菊座である。文様構成は、内区に網代の文様があり、その上に鳥が２羽対になるように配置されている。これらの鏡は、過去に出土し、伝世品とされる。共伴遺物から12世紀から13世紀にかけてのものとみられる。

・京都府京丹後市左坂経塚の例は、青銅製で鏡径10.3cm、縁高は不明である。鈕座は、菊座である。文様構成は、外区に網代、内区に２ヶ所の網代と鳥が網代以外の箇所で２羽描かれている。共伴遺物から12世紀後半から13世紀前半とみられる。文様構成は、本遺跡出土例とよく似ている。

・兵庫県篠山市上板井経塚の例は、青銅製で鏡径8.4cm、縁高0.1cmである。鈕座は素鈕である。文様構成は、外区・内区の界線がなく、全体に網代がかかり、その中に鳥が２羽描かれている。経塚の造営年代は、共伴遺物から12世紀末～13世紀初頭とみられる。

本遺跡出土の鏡と他の７例の鏡と比較対照を試みたい。上板井経塚、阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡のものは、網代が鏡背全体にかかっている。多度経塚のもの内区及び外区の網代が全面にかかっているため、本遺跡出土鏡と文様の構図がやや異なる。文様構成からみてみると伊豆山経塚や左坂経塚と恵那市山岡町出土の例によく似るが、特に内区の網代が２ヶ所であることが伊豆山例と左坂例と共通する。描かれた網代も緻密かつ丁寧に表現されていること、双鳥が明瞭で精緻であること、伊豆山例と左坂例の外区は網代である一方、細かに萩の花が描かれていることを考えると本遺跡出土鏡のほうが古いかもしれない。これらの点から、出土鏡の製作年代は12世紀後半以前と考えてよいのではなかろうか。

また、共伴する山茶椀及び小皿は尾張型第５型式で12世紀後葉～13世紀初頭頃と判断している。そのため、本遺跡の出土鏡は被葬者の所持品である可能性が高い。

2　ＳＸ76の被葬者像について

土壙墓ＳＸ76の被葬者像について考えておきたい。出土品には、山茶椀１点・山皿10点・和鏡１点・和鉄１点・毛抜き１点といった優品の副葬品がある。以下に県内中世墓の例についていくつかみておきたい。

・四日市市上野遺跡[2]では、20基の中世墓が検出されている。その内の18基は副葬品がなく、２基に副葬品が伴う。その内のＳＫ04には灰釉陶器・緑釉陶器・刀子状鉄製品が副葬されており、時期は平安時代後期とみられる。また、もう１基のＳＫ05には土師器皿が３点副葬されており、時期は鎌倉時代前期とみられる。遺物が副葬されるものとされないものがあり、何らかの差異を表していると判断されている。

・津市千里ヶ丘遺跡[3]では、中世墓から短刀１点・山茶椀１点・土師器皿３点が出土している。時期は13世紀前後とみられる。

・津市松山遺跡[3]では、中世墓が５基確認されている。Ｂ区の中世墓から山茶椀１点が出土している。時期は平安時代末期から鎌倉時代初頭とみられる。Ｅ区においても中世墓があるが遺物は出土していない。Ｇ区では、中世墓が３基確認されている。その１基からは、白磁椀１点・山茶椀１点・山皿４点・鉄１点が出土している。時期は、遺物から13世紀前半とみられる。ほかの１基は土師器皿が確認されている。時期は12世紀後半とみられる。最後の１基は灰釉陶器長頸瓶が出土しており、時期は平安時代末期から鎌倉時代初頭とみられる。

・津市雲出島貫遺跡[3]では、中世墓１基（ＳＸ329）があり木棺墓と考えられている。この木棺墓からは、菊花双雀鏡１点・腰刀１点・青磁椀２点・白磁椀１点・白磁皿４点が出土している。時期は、遺物から12世紀末葉～13世紀前葉である。

・玉城町蚊山遺跡[3]では40基の中世墓とみられる遺構を確認している。これらは時期によってⅠ～Ⅳ期に分類されている。なかでも13世紀を前後するⅠ期だけをみると土師器小皿及び皿・山茶椀が出土している。

・松阪市服部遺跡[3]では２基の中世墓が確認されている。ＳＸ10では、青磁椀２点が出土している。ＳＸ８は土師器細片が出土している。時期は共に鎌倉時代前期とみられる。

これらの例から中世墓には、副葬品をもつものと副葬品もたないものがあることがわかる。その差異

第50図　出土鏡分布略図

は、両者を比較して、もつものに優位性があり、階層を表していると推測される。

また、和鉄・毛抜きを持つ中世墓は、被葬者が女性の可能性が高いとされている[8]。従って、中世墓ＳＸ76は、集落内の女性の有力者ないし有力者の配偶者像が考えられる。

なお、県外の千葉県香取市（旧佐原市）吉原三王遺跡[9]の例をみてみると、501号土坑墓から和鏡１面（山吹双鳥鏡）・鉄１点・毛抜き１点・白磁皿・青磁椀が出土している。貿易陶磁器を除いて、本遺跡の副葬品と構成が似ている。吉原三王遺跡の被葬者像は、下総国の一宮である香取神宮から1.5kmの場所に所在しており、神官と関わりのある有力者像が考えられている。本遺跡の場合は、北西方向に所在する「椿大神社」から至近距離にあるため、女性の有力者ないし有力者の配偶者は、神社に関わりのある人物である可能性も考えられる。（萩原）

3　時代別の概観について

今回の発掘調査では、縄文時代と奈良・平安時代、鎌倉時代以降の遺構や遺物を確認することができた。各時代の様相を概観して、まとめとする。

（1）縄文・弥生時代

確認した遺構としては、土器埋設遺構２基と陥し穴約20基（推定含む）がある（第52図）。土器埋設遺構の内、ＳＫ210に埋設された土器については、弥生時代前期に属する突帯文系土器の広口壺である。土器の残存状況も概ね良好であり、県内でも類例がなく、貴重な資料である。

また、陥し穴は、第２次調査Ｂ区を中心にまとまって検出された。この周辺には、底部に小穴はないが、形状などから陥し穴と判断した土坑もある。

遺物は、自然流路ＮＲ152の西側、第５次調査Ｈ区を中心にまとまって出土した（第53図）。この周辺が、居住エリアの可能性も考えられるが、竪穴住居や掘立柱建物、土坑などの明確な遺構は確認できなかったため、判然とはしない。

（2）奈良・平安時代

確認した遺構としては、溝・自然流路・土坑（焼土土坑を含む）やＰｉｔなどがある（第52図）。これらは、第２次調査Ｉ区から第５次調査Ｇ区周辺にまとまりを見せており、ＮＲ152が流れの方向を南から若干南東に変える西側に当たる。おそらく安定した地盤であったものと思われる。

出土遺物は、須恵器、灰釉陶器、土師器、ロクロ土師器、黒色土器、志摩式製塩土器など多種多様である。これらの土器の出土範囲は、調査区全体に広がりを見せるが、特に、志摩式製塩土器や黒色土器などについては、遺構がまとまる範囲と重なるように出土している（第53図）。

掘立柱建物や井戸などという集落を構成する遺構が明確でなく、遺構に伴う遺物も決して多いとは言えない。しかし、この時期の各種遺物が出土した発掘調査例は、当遺跡の周辺では少ないため、この地域の古代集落の様相を検討するためには、貴重な資料である。

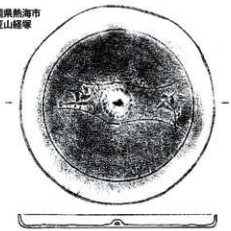
番号	出土遺跡	所在地	材質	計測値						経塚造営時期	備考
				鏡径（cm）	縁幅（cm）	縁高（cm）	鈕高（cm）	鈕径（cm）	重さ（g）		
①	笈垣内遺跡	三重県鈴鹿市小岐須町	青銅	10.8	0.15	0.7	0.35	0.9	85.13（保存処理後）	13世紀前後	中世墓
②	左坂経塚	京都府京丹後市	青銅	10.3	－	－	－	－	－	12世紀後半～13世紀前半	
③	伊豆山経塚	静岡県熱海市	青銅	10.2	0.1	0.6	0.3	0.7	－	12世紀後半～13世紀前半	鏡面に承安二年(1172)銘あり
④	飯高経塚？	岐阜県恵那市山岡町馬場山田	青銅	（10cm弱）	－	－	－	－	－	12世紀後半～13世紀前半	展示品のため計測値不明（鏡径10cm弱）
⑤	阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡	東京都利島村	青銅	8.4	0.3	0.15	－	－	30.5	製作時期12世紀前半	
⑥	上板井経塚	兵庫県篠山市	青銅	8.4	0.3	0.1	0.3	0.9	16.94	12世紀末～13世紀初頭	
⑦	多度経塚	三重県桑名市多度町	白銅	10.9	0.3	0.8	－	－	199.6	12世紀～13世紀	
⑧	多度経塚	三重県桑名市多度町	青銅	8	0.15	0.2	－	－	59	12世紀～13世紀	

第33表　網代双鳥鏡出土一覧表

①三重県鈴鹿市
釜塚内遺跡

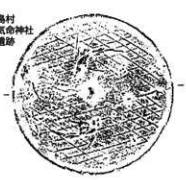
②京都府京丹後市
左坂経塚

③静岡県熱海市
伊豆山経塚



④岐阜県恵那市
(飯高経塚)

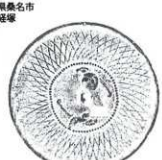
⑤東京都利島村
阿豆佐和気命神社
境内祭祀遺跡



⑥兵庫県篠山市
上板井経塚

⑦三重県桑名市
多度経塚

⑧三重県桑名市
多度経塚



第51図　近似鏡拓影及び写真（１：２）

（3）鎌倉時代以降

確認した遺構としては、掘立柱建物・柵列・土壙墓・土坑（建物に伴う南東隅土坑を含む）・溝・区画溝・自然流路などがある（第52図）。

これらの遺構は、調査区全体で確認されたが、ＮＲ152を挟んで、遺構の様相がやや異なる傾向にある。そこで、仮にＮＲ152の東側を東区、西側を西区と称して、以下、その概要を紹介する（第54・55図）。

東区　掘立柱建物を４棟、土壙墓を５基、溝を５条、土坑を数基確認した。なお、確認した掘立柱建物と溝の方向は、概ね同じである。溝については、後世の削平などにより、残存する深さが浅いため四隅が途切れているが、掘立柱建物群を取り囲むように巡っていたものと思われる。

具体的には、ＳＢ63、ＳＢ65、ＳＢ81の掘立柱建物３棟は、ＳＤ１、ＳＤ29、ＳＤ28によって区画された中に配置されている。この範囲が、１つの屋敷地であると想定して、さらに詳しく見てみることにする。

この屋敷地は、概ね東西方向に細長い。その規模は、個々の溝の芯々間の距離を計測した結果、南北方向は33m、東西方向については、西側が判然としないが、60mもしくは66mの可能性がある。

掘立柱建物の３棟のうちＳＢ63は、今回の調査では最大の床面積（126㎡）であり、５間×５間の総柱建物で南東隅土坑を伴っている。この建物は屋敷地内の東側に寄ってはいるが、南北方向のほぼ中央に位置しており、西側のＳＢ81と概ね北側の柱筋を揃えている。なお、ＳＢ81は、この屋敷地のほぼ中央に位置している。このＳＢ63とＳＢ81とＳＢ65の３棟が屋敷地を構成する建物群の基本的な組み合わせとすると、ＳＢ63は主屋、ＳＢ81は副屋、ＳＢ65は倉庫という性格も考えられようか。

なお、井戸については今回の調査では確認できていない。生活に必要な水は、ＮＲ152を利用していたのであろう。

この屋敷地の南側を区画するＳＤ１の南にはＳＤ20とＳＤ21が並行して走る。特に、ＳＤ１とＳＤ21との溝芯々間の南北方向の距離は、16.5mであり、屋敷地の南北間のちょうど半分の距離である。

土壙墓５基の内、ＳＸ76・ＳＸ78・ＳＸ79・ＳＸ80の４基は、屋敷地の中ではなく、ＳＤ１とＳＤ20・ＳＤ21との間でまとまって確認された。その内のＳＸ76には、和鏡、和鉄、毛抜きなどが副葬されており、有力層の存在が想定される。

また、ＳＸ60もこの屋敷地の中ではなく、北側と東側を画するＳＤ28・ＳＤ29の北東で確認された。土壙墓５基のいずれも、屋敷地の外側に存在していることが注目に値しようか。

西区　掘立柱建物を７棟、柵を１列、土壙墓を１基、溝を数条、土坑を数基確認した。掘立柱建物については、東区と概ね同じ方位のものが多いが、床面積はやや狭い感がある。また、東区の様なまとまりもあまり感じられない。

溝については、ＮＲ152に付随するような機能の溝は存在するが、掘立柱建物を明瞭に区画するような溝はない。

土壙墓については、山茶椀１点を副葬するＳＸ110を確認したにとどまる。

ところで、東区で確認された屋敷地の規模について、南北方向は33m、東西方向は60mか66mのどちらかである可能性を先に指摘した。そこで最後に、どちらの方に蓋然性が高いかを、調査区内で確認された主な遺構の位置関係をもとに、若干検討を加えることにする。

まず、この屋敷地を一つの基本単位として実線で、また、東西方向、南北方向の半分の距離には点線で、調査区全体に割り付けを行った。Ａ案（第54図）が、東西60m×南北33m、Ｂ案（第55図）が、東西66m×南北33mである。以下、屋敷地を大区画（実線範囲）、その４分の１の面積を小区画（点線範囲）と称して、主な遺構の配置を見てみることにする。

ＮＲ152であるが、その川幅はＡ案、Ｂ案ともに小区画の範囲に収まり、また、流れの方向は屋敷地とほぼ同じであることに違いはない。しかし、詳しく見てみると、Ａ案ではＮＲ152の西側の岸が、Ｂ案では東側の岸が、概ね南北の区画ラインに合致する。なお、流れの方向が南から、若干南東方向に変える辺りに大区画の東西ラインが合致する感じである。

また、西区の掘立柱建物については、明らかな区画溝は確認できなかったが、Ａ案・Ｂ案ともに大区

画の範囲内に、１～２棟程度の配置がなされるようである。東区の様に建物の大きさや並びの方向による組み合わせなどは、あまり見受けられない。ただし、ＳＢ106の西側柱筋とＳＢ130の東側柱筋が揃い、また、同じＳＢ130の北側柱筋とＳＢ131の南側柱筋が概ね揃うなど、建物の配置に計画性も感じられる。とはいうものの、このような建物配置では、Ａ案かＢ案のどちらを意識した結果であるかを判断することはできない。

次に土壙墓であるが、東区で確認された５基は、Ａ案にしろ、Ｂ案にしろ、ともに屋敷地の外側に存在している。しかし、西区のＳＸ110の位置は、Ａ案では東区と同様に大区画の外側に、Ｂ案では大区画の内側に存在することになる。

この土壙墓を東区と同様、屋敷地の外側を意識した位置に存在することを共通項と考えれば、Ａ案の東西60ｍが妥当となる。しかし、ＮＲ152を挟んで土壙墓には、屋敷地の外側と内側という意識にも差異があったと想定すれば、Ｂ案の東西66ｍが妥当ということになろうか。

なお、Ｂ案の66ｍという数字は、南北方向の33ｍのちょうど２倍に当たることから、根拠はないが、Ａ案よりも妥当性があるかもしれない。

ともあれ、60ｍのＡ案、66ｍのＢ案、どちらの区画の範囲が正しいかは定かではないが、何らかの企画性のある区画を意識した集落である可能性は十分にありそうである。

また、区画溝の有無、掘立柱建物の規模の差異、土壙墓の副葬品の優劣などから考えて、ＮＲ152を挟んで、西区より東区の方が有力者層の屋敷地が存在する集落であったことは優に推測される。

このような集落内の屋敷地の有り様が、どのような時代背景を反映しているのかなどに言及することはできないが、当地域の中世の集落を考える上では貴重な資料を提供しているものと思われる。

（服部）

【註】

①國學院大學海洋信仰研究会『阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡』（六一書房　2005年）

②國學院大學考古学資料館『伊豆山経塚遺跡発掘調査報告』（2005年）

③東京国立博物館所蔵であるが久保智康「平安時代後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史（下）』（同朋社　1987年）に写真が掲載されている。

④多度町『多度町史』（2002年）

⑤財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「大宮町左坂古墳群の経塚状遺構」『京都府埋蔵文化財情報第76号』（2000年）

⑥兵庫県教育委員会『上板井古墳群』（1986年）画像については兵庫県立考古博物館から提供を受けた。

⑦四日市市遺跡調査会『上野遺跡』（1991年）
四日市市遺跡調査会『上野遺跡２』（1992年）

⑧千里ヶ丘遺跡発掘調査団『千里ヶ丘発掘調査報告書』（1968年）

⑨三重県教育委員会『芸濃南部発掘調査ニュース　No.５その１』（1987年）
三重県「松山遺跡」『三重県史資料編考古２』（2008年）

⑩三重県埋蔵文化財センター『嶋抜Ⅱ』（2000年）

⑪三重県「蛟山遺跡」『三重県史資料編考古２』（2008年）

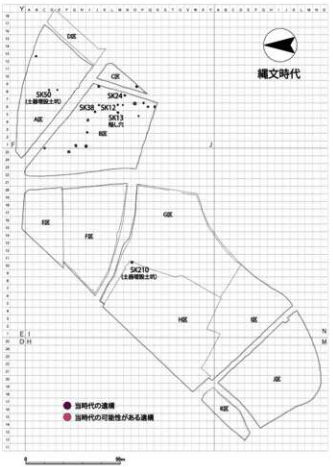
⑫三重県教育委員会「服部遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』（1983年）

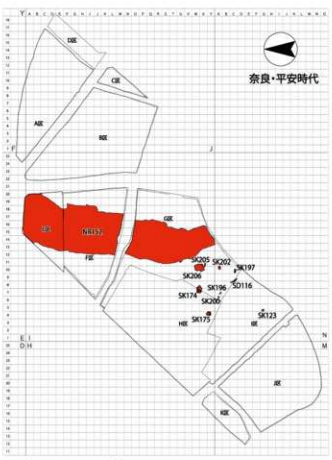
⑬秋山浩三「古代の男性墓・女性墓－奈良・平安時代時代墳墓の副葬・伴出品にみえる性差－」『古代文化』（51巻12号　1999年）

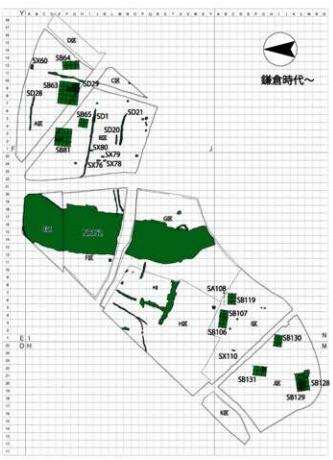
⑭日本道路公団東京第一建設局・財団法人千葉県文化財センター『佐原市吉原三王遺跡』（1990年）

【参考文献】

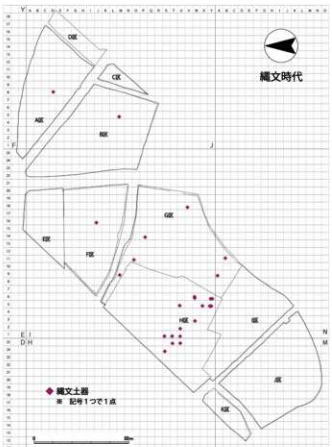
・久保智康「中世・近世の鏡」『日本の美術394』（至文堂　1999年）
・広瀬都巽『和鏡の研究』（角川書店　1974年）

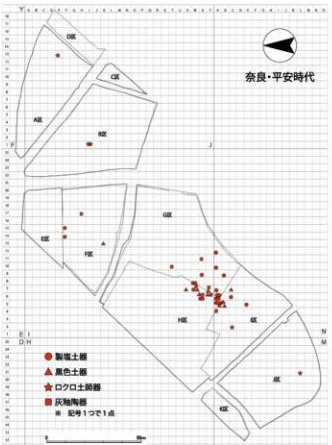




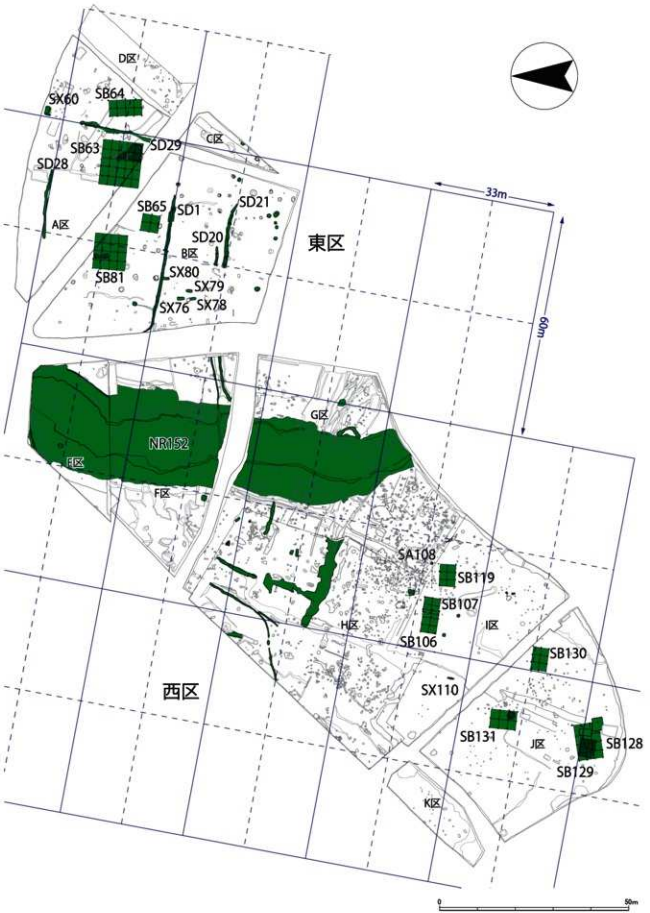


第52図　遺構全体図および時代別変遷図（１：2,000）





第53図　遺物出土分布図（１：2,000）



第54図　区画割図Ａ案（１：1,000）

第55図　区画割図B案（１：1,000）

写　真　図　版

米軍空中写真

写真図版１

第２次調査Ａ・Ｂ区調査前風景（東から）

第２次調査Ｉ・Ｊ・Ｋ区調査前風景（東から）

第２次調査Ｉ区調査前風景（東から）

第２次調査Ｊ区調査前風景（南から）

写真図版３

第４次調査Ｈ区調査前風景（東から）

第２次調査Ｂ・Ｃ区遺構検出状況（北から）

第４次調査Ｅ区調査前風景（東から）

第２次調査Ｊ区完掘状況（北東から）

写真図版５

第４次調査Ｈ区完掘状況（南から）

第４次調査Ｅ区完掘状況（北東から）

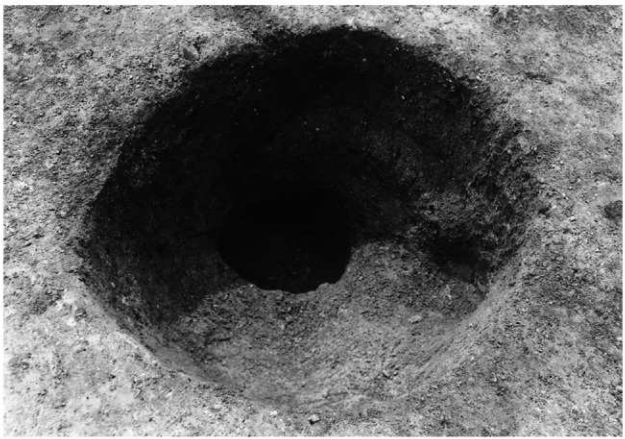
第５次調査Ｇ区完掘状況（北から）

第５次調査Ｇ区東南部完掘状況（西から）

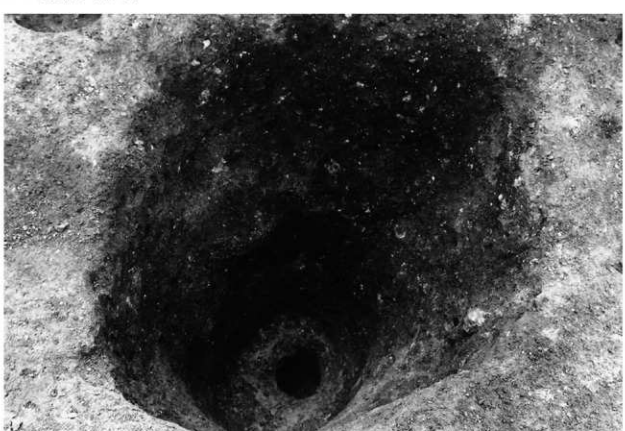
写真図版７

ＳＫ50土層断面（東から）

ＳＫ210遺物出土状況（南から）



ＳＫ12完掘状況（北から）



ＳＫ38完掘状況（北から）

写真図版９

ＳＫ196焼土検出状況（東から）

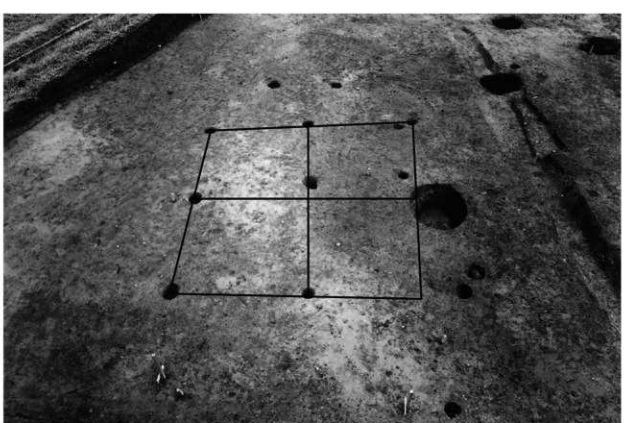
ＳＫ197焼土検出状況（北東から）

ＳＫ200完掘状況（南から）

ＳＫ202完掘状況（北から）

写真図版11

ＳＫ205焼土検出状況（北西から）



ＳＢ65完掘状況（西から）

ＳＢ81完掘状況（西から）

ＳＢ106完掘状況（東から）

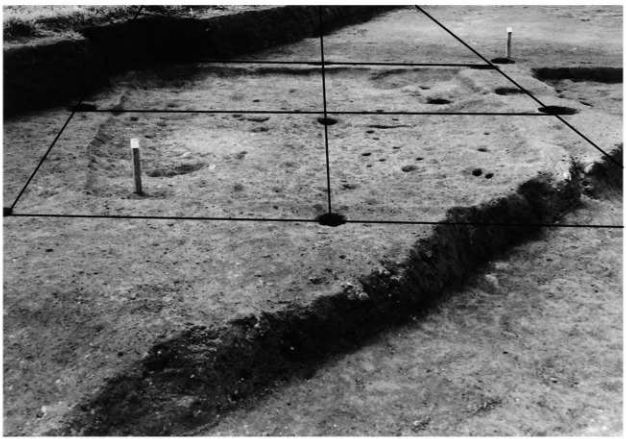
ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況①（北から）

ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況②（北から）

ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況③（北から）

ＳＢ106北東隅柱穴遺物出土状況④（北から）

写真図版15



ＳＫ55・56完掘状況（東から）

ＳＫ126完掘状況（北東から）

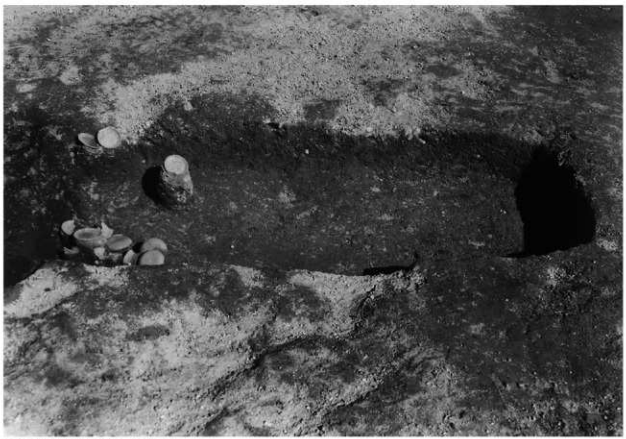
ＳＸ60遺物出土状況（北から）

ＳＸ76・78・79遺物出土状況（南から）

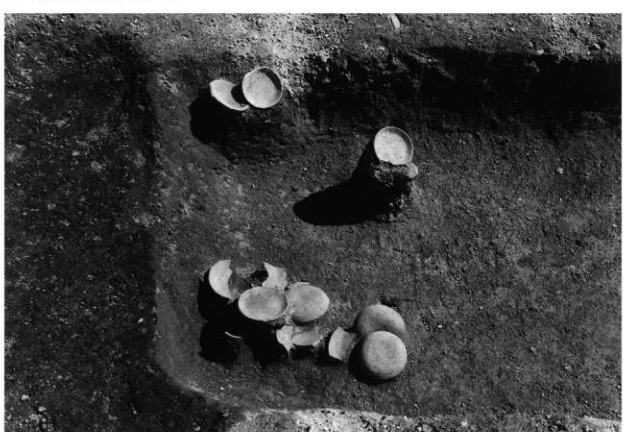
写真図版17

ＳＸ76遺物出土状況①（西から）

ＳＸ76遺物出土状況②（西から）



ＳＸ78遺物出土状況①（西から）



ＳＸ78遺物出土状況②（西から）

写真図版19

ＳＸ79遺物出土状況①（西から）

ＳＸ79遺物出土状況②（西から）

ＳＫ161完掘状況（南から）

ＳＫ163・164完掘状況（東から）

写真図版21

ＳＫ193完掘状況（東から）

ＳＫ194完掘状況（東から）

SD28（J－B８～J－C８）土層断面（東から）

第５次調査Ｆ区ＮＲ152完掘状況（北から）

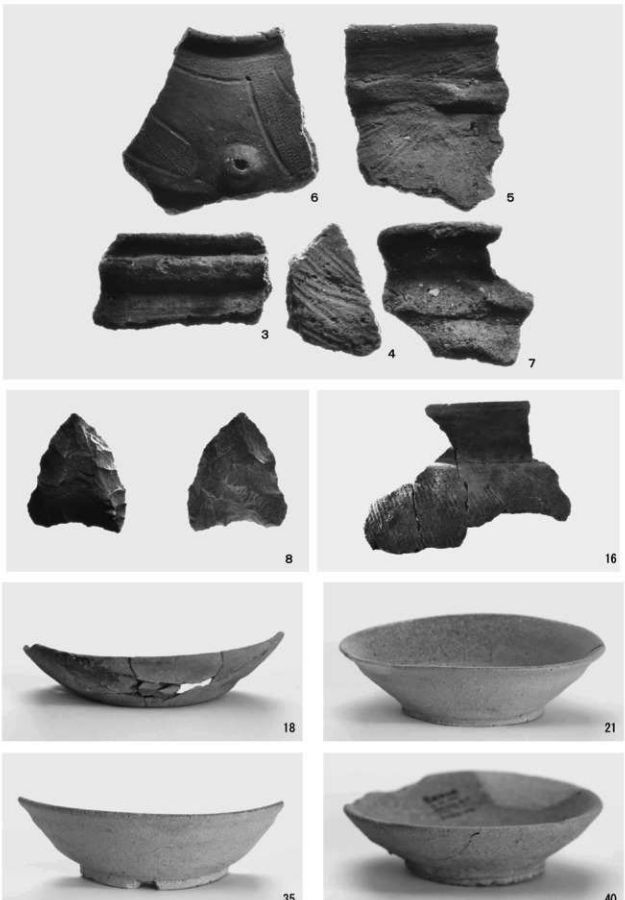
写真図版23

出土遺物①

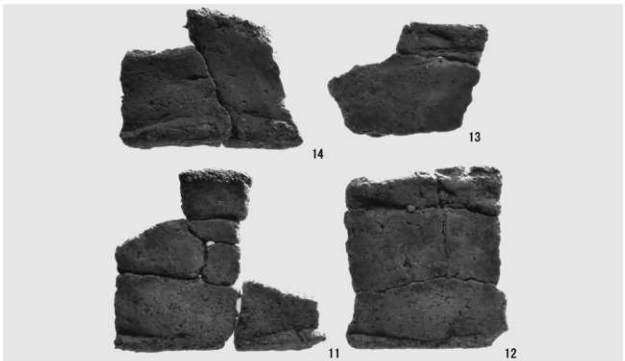
2

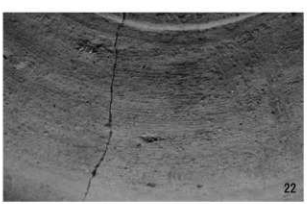
出土遺物②

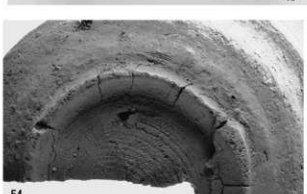
写真図版25

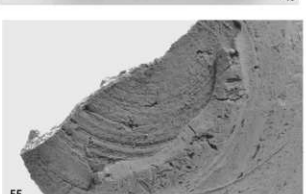


出土遺物③









出土遺物④

写真図版27

58

61

62

64

70

73

74

150

出土遺物⑤

151

152

153

155

193

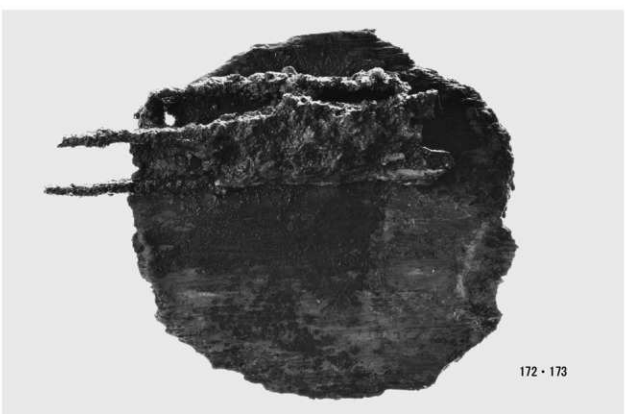
196

199

200

出土遺物⑥

171



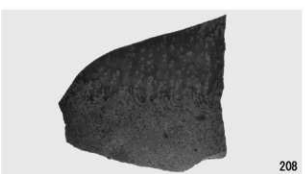
172・173

183
184
182
177
176
179
180
175
178
S X 78

186
185
190
189
188
187
S X 79

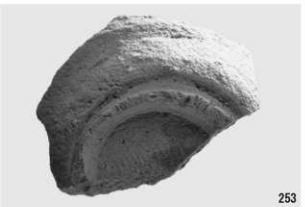
出土遺物⑧

写真図版31



出土遺物⑨

252


253

265

269

273

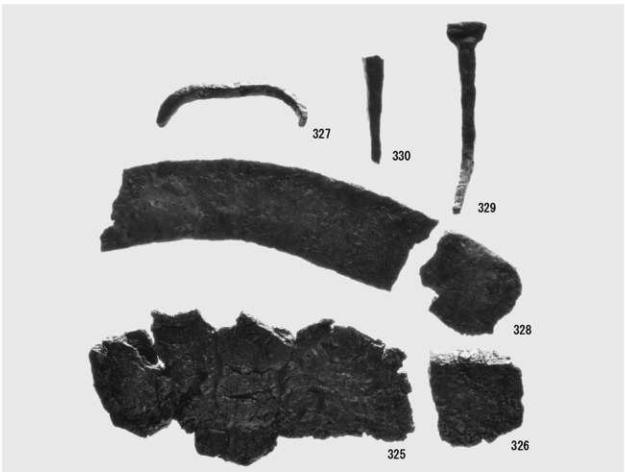
293

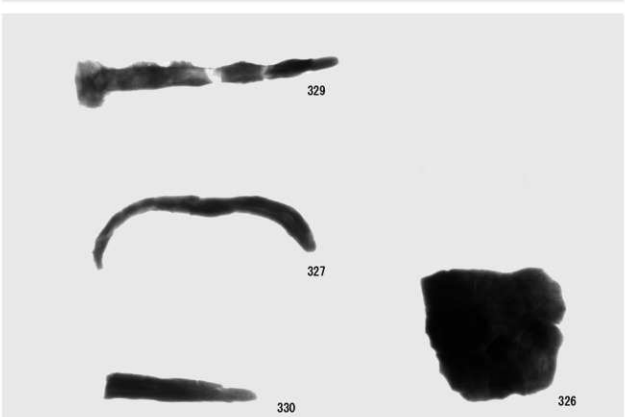
299

312

出土遺物⑩

写真図版33





出土遺物⑪

報告書抄録

ふりがな	かまがいといせき（だいに・よん・ごじ）はっくつちょうさほうこく
書名	釜垣内遺跡（第２・４・５次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３２３－１３
編著者名	浅野陸司・小原雄也・大川操・中村法道・萩原義彦・服部芳人・村上尖
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL　0596-52-1732
発行年月日	2018（平成30）年10月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かまがいといせき 釜垣内遺跡	すずかしおおすちょう 鈴鹿市小岐須町	24207	1032	34° 56′ 57″	136° 27′ 10″	20120524 ～20121126	第２次調査 8,500	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業
						20130527 ～20130913	第４次調査 3,200	
						20150527 ～20151218	第５次調査 3,810	
						計	15,510	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項
釜垣内遺跡	集落跡	縄文	土器埋設土坑 陥し穴	縄文土器（晩期）	
		奈良・平安	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・灰釉陶器・ ロクロ土師器・黒色土器・ 製塩土器	
		鎌倉時代	掘立柱建物・区画溝・土坑・土壙墓・自然流路	山茶椀・小皿・土師器・常滑陶器・渥美陶器・和鏡・和鉄・毛抜き・刀子	

要旨

縄文時代晩期の土器埋設遺構・陥し穴や、奈良・平安時代の溝・土坑などの他、鎌倉時代以降の掘立柱建物・区画溝・土壙墓などを検出した。特に掘立柱建物は複数棟確認されたが、調査区のほぼ中央を南北方向に流れる自然流路を挟んで、東側の掘立柱建物は溝によって区画されており、西側の掘立柱建物は区画されていないという違いがある。土壙墓も複数確認されたが、その内の１基には、和鏡・和鉄・毛抜き・刀子が副葬されていた。中世の集落の調査としては、良好な遺跡である。

附図１　遺構平面図（１：300）

三重県埋蔵文化財調査報告３２３－１３

釜垣内遺跡（第２・４・５次）発掘調査報告

2018（平成30）年10月

編集･発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　共立印刷株式会社